

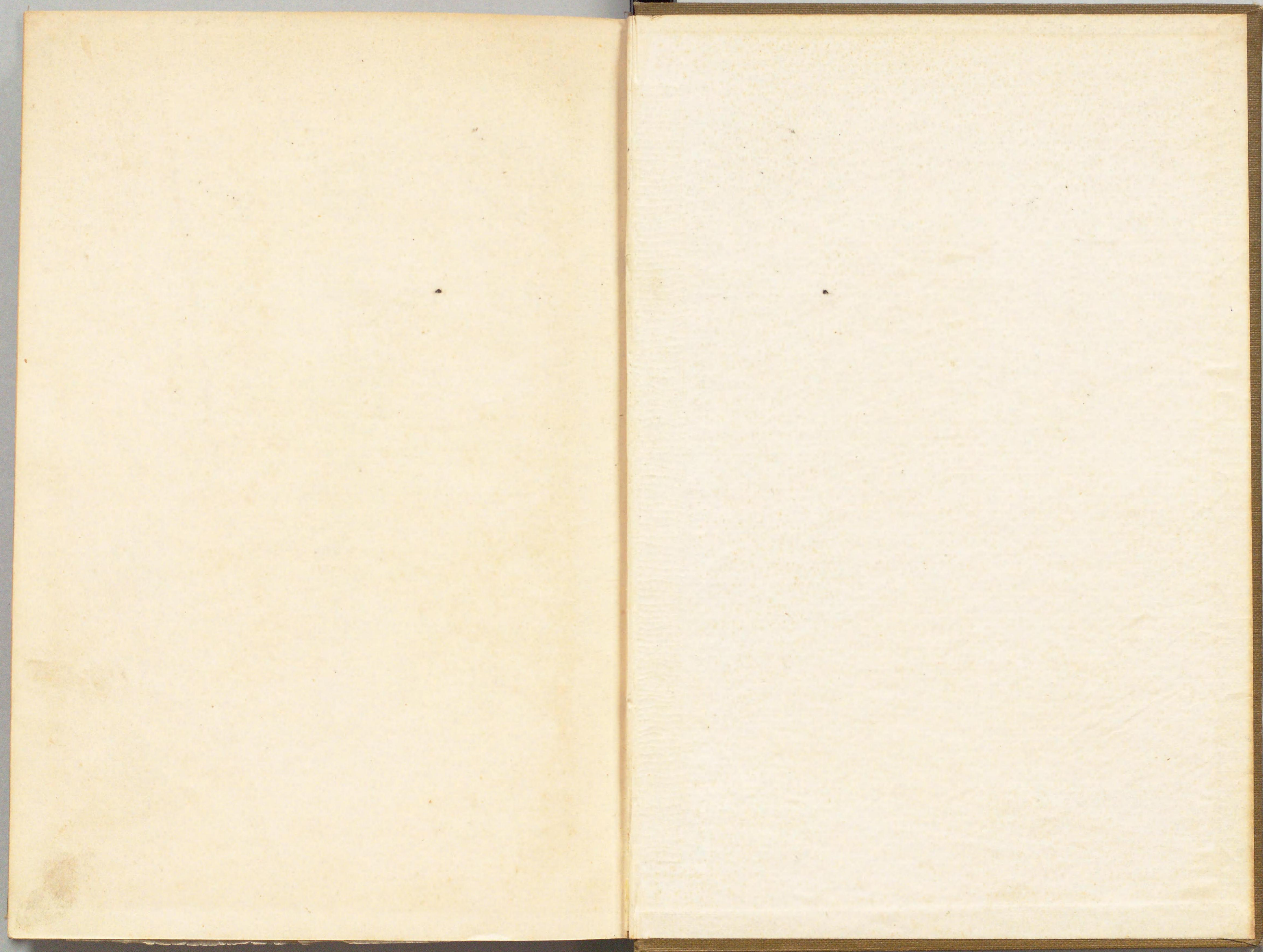


121.3  
Si266n



00626429







日本儒學年表

斯文會

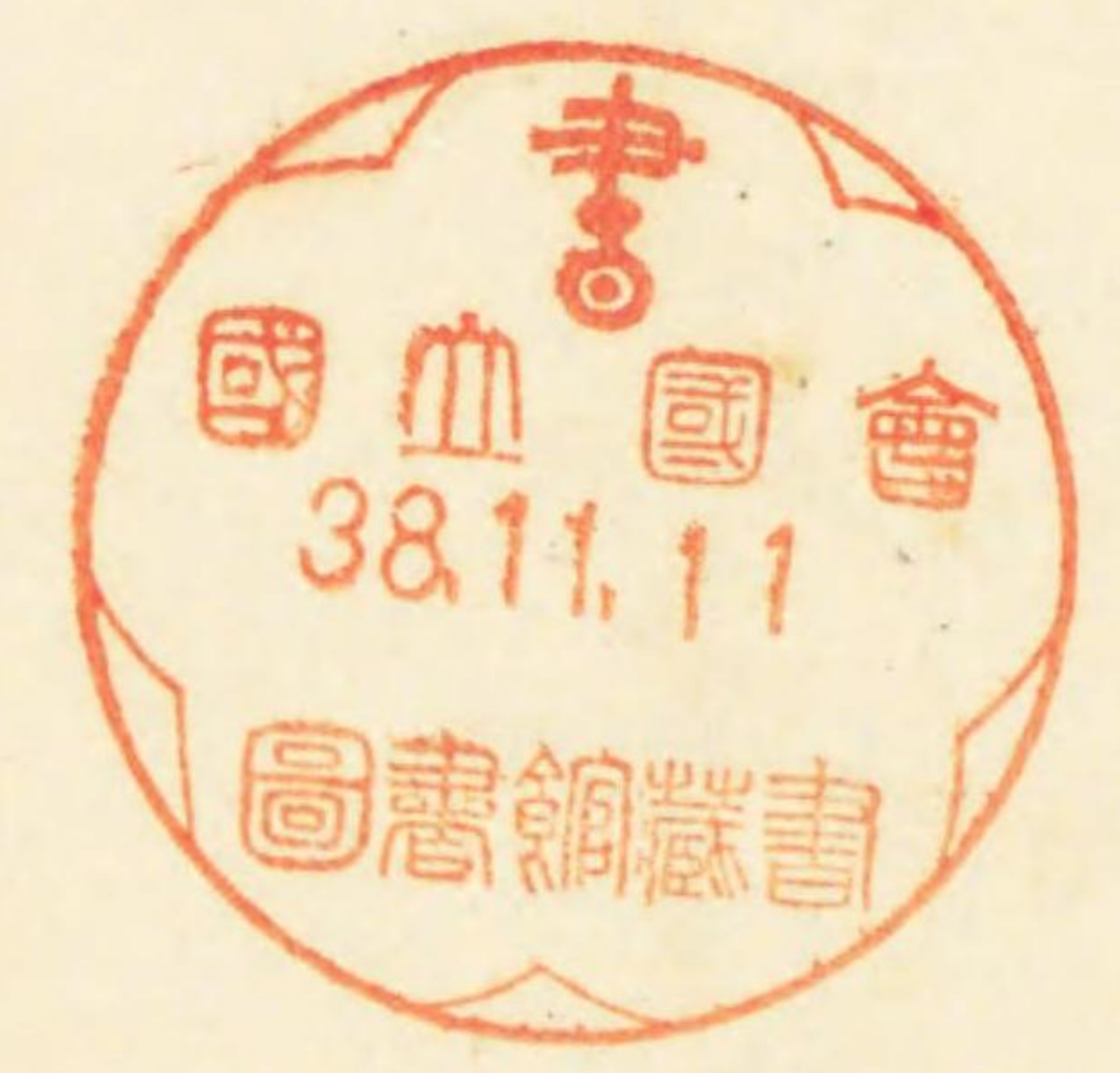


日本儒學年表

斯文會



121.3  
Si266n  
II



626429

叙 言

一、本表は、孔夫子二千四百年追遠祭記念出版物として、斯文會に於て特に編纂したるものなり。  
一、本表は仲哀天皇九年より、大正十一年十月に至るまで、我國に於ける儒學及び一般漢學に關する事實を、正史又は正確と認められたる文書に據り、年を逐うて記載し、以て儒教漢學が我國に於て如何なる方面に適用せられ、又如何なる効果を發生せしかを世人に知らしむるを目的とす。故に至尊の好學、將家の弘文、儒臣の進講、學校の興廢、學者の生卒、其他制度、儀式、著述、出版等の儒教漢學に關するものは、皆之を記載し、從來未だ曾て有らざる所の新參考書たらしめんとすると共に、一面



には是に由て儒學の精神と效用とを發揮せんことを期せり。  
引用書は多數に涉り、出典に略稱を用ひたるもあり。略稱は  
下に擧ぐ。

一、儒學に直接の關係なき國家の大事、又は佛教方技等の記載あ  
るは當時の大勢及び儒教漢學と他の學術との關係を見る便  
宜あるが故なり。

一、文體、前後不同なるは、力めて引用書の原文に従ひしを以てな  
り。

一、史實傳述等の年代不明なる者は、時代又は年代の末、又は其人  
の卒年に記せり、

一、朝鮮の事は、總て會員中樞院參議魚允迪氏の寄稿に據り、委員  
の之を譯述せるものなり。又併合以前は、別項としたるが、其

の後は月次に従へり。

一、本表の編纂は、大正九年十一月に始り、各員擔當の書に就きて、  
検索採擇し、毎月一回會合して、編纂上の協議を遂げ、十一年八  
月に至り、稍く定稿を得たり。事創始に屬し、時急忙に際し、且  
つ人は繁務に従へるを以て遺漏誤謬なきを必せざれども、期  
日切迫の爲嚴密なる審査を爲す能はずして印刷に付するこ  
ととせり。識者の是正を得て、他日訂正の資料とせんことは  
編者の切望する所なり。

一、本表の題簽は文學博士小牧昌業之を書し、編纂は、特別委員安  
井小太郎、中村久四郎、山口察常、前川三郎、高成田忠風、諸橋轍次、  
竹田復の七氏分科擔當せり。

大正十一年十月

編者識



引用書の略稱

略稱	本名
一、記	古事記
一、紀	日本書紀
一、續紀	續日本紀
一、後紀	日本後紀
一、續後紀	續日本後紀
一、紀略	日本紀略
一、通鑑	本朝通鑑

略稱	本名
一、續通鑑	續本朝通鑑
一、日史	大日本史
一、史料	大日本史料
一、教育資料	日本教育史資料
一、先哲年表	先哲叢談年表
一、平安墓所	平安名家墓所一覽
一、人名辭書	大日本人名辭書

日本儒學年表

天皇	紀元	年號	支干	事	實	支那	西曆
仲哀	八六〇	九	辰庚	○十月皇后新羅を征して其の國都に入り重寶府庫を封じ國籍文書を收む(紀)	後漢獻帝建安	五	200
應神	九四四	一五	辰甲	○八月百濟王阿直岐を遣して良馬を貢せしむ皇太子菟道稚郎子之を師として經典を學ぶ(紀)荒田別命巫別を百濟に使用して博識の士を求めしむ王仁孫孫王を得て還る(紀・日史)	西晉武帝太康	五	284
	九四五	一六	巳乙	○二月百濟の王仁來朝し論語十卷千字文一卷を獻す(記・紀)		六	285
	九五七	二八	巳丁	○二月高麗入貢す菟道稚郎子表文を讀みて其の無禮を責む(紀)	惠帝元康	七	297
履仲	一〇六三	四	卯癸	○八月始めて諸國に國史を置き言事を記せしむ(紀)	東晉安帝元興	二	403
反正	一〇七四	三	寅甲	○八月新羅の醫來朝して天皇の病を治す(紀)		一〇	414
	一〇七五	四	卯乙	○九月氏姓を定む(紀)		一一	415
顯宗	一一四五	一	丑乙	○三月始めて曲水宴を設く(紀・日史)	齊武帝永明	三	485
繼體	一一七三	七	巳癸	○六月百濟五經博士段揚爾を貢す(紀・日史)	梁武帝天監	一一	513



天皇紀元	年號	支干	事	實	支那	曆西
一一七六	一〇	申丙	○九月百濟五經博士漢高安茂を貢して段楊爾に代らしむ(紀日・史)		一五	516
一一二二	一三	申壬	○六月百濟より醫・易・歷博士を遞番往來せしむ(日史)	元帝承聖元	一五	552
一一二一	一四	酉癸	○六月百濟に勅して醫・易・七歷の博士及び卜書曆本藥種を貢せしむ(紀)		二	553
一一一四	一五	戌甲	○二月百濟五經博士王柳貴を貢して馬丁安に代はらしむ又易博士王道良曆博士王保孫醫博士王有倭陀探藥師潘量豐丁有陀樂人德三斤己麻次進奴進陀を貢す(紀、日史)		三	554
一一三二	元	辰壬	○五月王辰爾高麗の上れる烏羽の表を讀む(紀)	陳宣帝 太建	四	572
一一五三	元	丑癸		隋文帝 開皇	三	593
一一五四	二	寅甲			四	594
一一五五	三	卯乙			一五	595
一一五六	四	辰丙	○十月皇太子廐戸皇子高麗僧惠總葛城臣と道後の温泉に浴し碑を其の傍に立つ(釋日本紀所引伊豫國風土記)		一六	596
一一五七	五	巳丁			一七	597
一一五八	六	午戊			一八	598
一一五九	七	未己			一九	599
一一六〇	八	申庚			二〇	600
一一六一	九	酉辛		仁壽元		601
一一六二	一〇	戌壬	○十月百濟の僧觀勒來朝し曆本天文地理通甲方術の書を獻す(紀)		二	602
一一六三	一一	亥癸	○十二月始めて冠位十二階を定む(紀)		三	603
一一六四	一二	子甲	○四月皇太子廐戸皇子憲法十七條を作る(紀)○九月朝禮を改定す(紀)始めて黃書畫師山背畫師を定む(紀)		四	604
一一六五	一三	丑乙		煬帝大業元		605
一一六六	一四	寅丙			二	606
一一六七	一五	卯丁	○七月小野妹子を隋に遣す鞍作福利を通事と爲す(紀)		三	607
一一六八	一六	辰戊	○四月小野妹子隋より歸朝す隋使裴世清以下十二人從ひて來る(紀・日史)○九月隋使裴世清歸國す小野妹子を大使とし吉士雄成を小使と爲し福利を通事と爲して之を送らしむ留學生倭漢直福因奈羅譯語惠明高向漢人玄理新漢人大國學問僧新漢人日文南淵漢人請安志賀漢人惠隱漢人廣齊等八人之に從ふ(紀・日史)		四	608
一一六九	一七	巳己	○九月小野妹子隋より歸朝す(紀・日史)		五	609
一一七〇	一八	午庚	○三月高麗王僧曇徵法定を貢す曇徵五經を知り且能く彩色紙墨を作る(紀)		六	610
一一七一	一九	未辛			七	611



天皇紀元	年號	支干	事	實	支	那	曆
一一八二	三〇	午壬				五	622
一一八三	三一	未癸	○七月新羅の使奈未智洗爾來朝す學問僧惠齊惠光醫惠日福因等之に従ひて歸朝す(紀)			六	623
一一八四	三二	申甲				七	624
一一八五	三三	酉乙				八	625
一一八六	三四	戌丙	○五月大臣蘇我馬子卒(紀)			九	626
一一八七	三五	亥丁				九	627
一一八八	三六	子戊	○三月天皇崩	太宗貞觀元		二	628
一一八九	元	丑己	○正月舒明天皇即位			三	629
一一九〇	二	寅庚	○八月犬上御田歙藥師惠日を唐に遣す(紀)			四	630
一一九一	三	卯辛				五	631
一一九二	四	辰壬	○八月唐使高表仁犬上御田歙を送りて來朝す學問僧靈雲僧旻等之に従ふ(紀)			六	632
一一九三	五	巳癸				七	633

天皇紀元	年號	支干	事	實	支	那	曆
一一七二	二〇	申壬	○是年百濟人味摩之吳の伎樂舞を傳ふ(紀)			八	612
一一七三	二一	酉癸	○新羅眞平王三四 ○高句麗嬰陽王二三 ○百濟武王二三			九	613
一一七四	二二	戌甲	○六月犬上御田歙矢田部造(闕名)を隋に遣す(紀)			一〇	614
一一七五	二三	亥乙	○七月犬上御田歙矢田部造隋より歸朝す(紀)			一一	615
一一七六	二四	子丙				一二	616
一一七七	二五	丑丁				一	617
一一七八	二六	寅戊				二	618
一一七九	二七	卯己				三	619
一一八〇	二八	辰庚	○是歲皇太子厩戸皇子島大臣共に議して天皇記國記臣連伴造國造百八十部並に公民等の本記を撰す(紀・日史)			四	620
一一八一	二九	巳辛	○二月厩戸皇子薨(紀)			四	621



天皇	紀元	年號	支干	事	實	支	那	曆西
皇極	一三〇二	元	寅壬	○正月皇極天皇即位			一六	642
孝德	一三〇一	一三	丑辛	○十月天皇崩			一五	641
	一三〇〇	一二	子庚	○十月學問僧清安學生高向玄理唐より歸朝す(清安は推古十六年の紀に據る)紀			一四	640
	一二九九	一一	亥己	○九月學問僧惠隱惠雲唐より歸朝す(紀・日史)			一三	639
	一二九八	一〇	戌戊				一二	638
	一二九七	九	酉丁				一一	637
	一二九六	八	申丙				一〇	636
	一二九五	七	未乙				九	635
	一二九四	六	午甲				八	634
	一三〇三	二	卯癸	○中大兄皇子周公孔子の教を南淵先生に學ぶ(紀)			一七	643
	一三〇四	三	辰甲	○六月蘇我蝦夷父子を誅す(紀)○天皇讓位孝德天皇即位○始めて左右大臣			一八	644
	一三〇五	大化元	巳乙	○六月蘇我蝦夷父子を誅す(紀)○天皇讓位孝德天皇即位○始めて左右大臣			一九	645

天皇	紀元	年號	支干	事	實	支	那	曆西
皇極	一三〇二	元	寅壬	○正月皇極天皇即位			一六	642
孝德	一三〇一	一三	丑辛	○十月天皇崩			一五	641
	一三〇〇	一二	子庚	○十月學問僧清安學生高向玄理唐より歸朝す(清安は推古十六年の紀に據る)紀			一四	640
	一二九九	一一	亥己	○九月學問僧惠隱惠雲唐より歸朝す(紀・日史)			一三	639
	一二九八	一〇	戌戊				一二	638
	一二九七	九	酉丁				一一	637
	一二九六	八	申丙				一〇	636
	一二九五	七	未乙				九	635
	一二九四	六	午甲				八	634
	一三〇三	二	卯癸	○中大兄皇子周公孔子の教を南淵先生に學ぶ(紀)			一七	643
	一三〇四	三	辰甲	○六月蘇我蝦夷父子を誅す(紀)○天皇讓位孝德天皇即位○始めて左右大臣			一八	644
	一三〇五	大化元	巳乙	○六月蘇我蝦夷父子を誅す(紀)○天皇讓位孝德天皇即位○始めて左右大臣			一九	645
	一三〇六	二	午丙	及内臣を置き中臣鎌足を内臣と爲す(紀)○高向玄理僧旻を國博士と爲す(紀・日史)○大化と建元す我が國の年號此に始まる(紀)			二〇	646
	一三〇七	三	未丁	○正月改新の詔を下す(紀)○八月新に百官を置く(紀)			二一	647
	一三〇八	四	申戊	○是歲七色十三階の冠位を定む(紀)			二二	648
	一三〇九	五	酉己	○二月學問僧を三韓に遣す(紀)			二三	649
	一三一〇	白雉元	戌庚	○新羅眞德女主二 ○高勾麗寶藏王七 ○百濟義慈王八		高宗永徽元		650
	一三一一	二	亥辛	○是年新羅金春秋唐に如きて國學に詣り釋奠を觀て還る朝鮮始めて釋奠の禮あるを知れり(文獻備考・三國史記)			二	651
	一三一二	三	子壬	○四月班田の制を定め戶籍を造る(紀)			三	652
	一三一三	四	丑癸	○五月吉士長丹高田根磨を唐に遣す學問僧道嚴道通道光惠施覺勝辨正惠照僧忍知聰道昭定惠安達道觀道福義向學生巨勢藥氷老人等二百四十一人之に従ふ(紀)			四	653
	一三一四	五	寅甲	○六月僧旻卒(日史)			五	654
	一三一四	五	寅甲	○二月高向玄理遣唐押使と爲り長安に至りて高宗に見ゆ尋いで唐に卒す(紀・日史)			五	654



天皇紀元	年號	支干	事	實	支	那	曆西
一三一五	元	乙卯	○正月齊明天皇重祚		六		655
一三一六	二	丙辰			顯慶元		656
一三一七	三	丁巳			二		657
一三一八	四	戊午			三		658
一三一九	五	己未	○七月坂合部石布津守吉祥を唐に遣す(紀)		四		659
一三二〇	六	庚申			五		660
一三二一	七	辛酉	○七月天皇崩皇太子朝に臨む		龍朔元		661
一三二二	元	壬戌	○百濟僧詠を還俗せしめて大學頭と爲す(續紀)		二		662
一三二三	二	癸亥			三		663
一三二四	三	甲子	○二月冠位を増して二十六階と爲し氏上民部家部を定む(紀)		麟徳元		664
一三二五	四	乙丑	○九月唐使劉德高等二百五十四人筑紫に至る(紀)○十二月守君大石等を遣して唐使劉德高を送らしむ(紀)		二		665
一三二六	五	丙寅			乾封元		666
一三二七	六	丁卯			二		667

天皇紀元	年號	支干	事	實	支	那	曆西
一三一八	七	戊辰	○正月天皇即位		總章元		668
一三一九	八	己巳	○十月大織冠内大臣藤原鎌足卒年五十(紀註・日史)○是歲月河内鯨を唐に遣す		二		669
一三二〇	九	庚午	○二月戶籍を造る所謂庚午年籍是なり(紀)		咸亨元		670
一三三一	一〇	辛未	○正月冠位法度の事を施行す(紀)○學職頭鬼室集斯に小錦下(集解に云ふ當に小錦上に作るべしと)を授く(紀)○三月黄書本實水臬を獻す(紀)○十一月唐使郭務悰等二千人對島に至る(紀)○十二月天皇崩帝學を好み文を能くし庠序を設け製する所の文章甚だ多きも今傳はらず(日史)○弘文天皇即位		二		671
一三三二	元	壬申	○六月大海人皇子兵を吉野に擧ぐ(紀)○七月天皇崩帝文藻に富み始めて五言の詩を作る(日史)		三		672
一三三三	元	癸酉	○二月天武天皇即位		四		673

○新羅文武王一三  
 ○正月新羅王謂ふ強首は能く文辭を以て意を中國及び麗濟に致す我が先王兵を唐に請ひて以て麗濟を平けしも亦強首文章の助に由ると(東國通鑑・三國史記)  
 ○唐の詔書新羅に至る解し難き處あり牛頭なるもの之を解す王命して謝表を製せしむ文工に意盡く王益々之を奇とす牛頭は任郡の人任生と稱して名いはす王



天皇紀元年號支干 事 實 支 那 曆西

一三四三	一〇	壬午	一三四二	九	辛巳	一三四一	八	庚辰	一三三九	七	己卯	一三三八	六	戊寅	一三三七	五	丁丑	一三三六	四	丙子	一三三五	三	乙亥	一三三四	二	甲戌
弘道元			永淳元			開耀元	永隆元	調露元	三	二	儀鳳元	二	上元元													
683			682			681	680	679	678	677	676	675	674													

其の頭骨を見て強首と稱す(東國通鑑)  
 ○正月占星臺を建つ(紀)  
 ○二月詔して律令を撰定せしむ(紀)○三月川島皇子忍壁皇子等十二人に命じて帝紀及上古の諸事を記さしむ(紀・日史)○四月禁武九十二條を立て服色を定む(紀)  
 ○三月境部石積等に命じて新字四十四卷を造らしむ(紀・日史)○四月男女をして悉く結髪せしむ(紀)○八月禮儀言語の制を定む(紀)  
 ○新羅神文王二  
 ○是年國學を置きて禮部に屬す(三國史記)

持統

一三四四	一二	甲申	一三四三	一一	癸未	一三四二	一〇	壬午	一三四一	九	辛巳	一三四〇	八	庚辰	一三三九	七	己卯	一三三八	六	戊寅	一三三七	五	丁丑	一三三六	四	丙子	一三三五	三	乙亥	一三三四	二	甲戌
中宗嗣聖元 (武后光宅元)			睿宗垂拱元			三(二)	四(三)	五(四)	六(永昌元)	七(天授元)																						
684			685			686	687	688	689	990																						

○閏四月百寮の進止威儀を教ふ(紀)○十月八色の姓を定む(紀)  
 ○正月爵位を改定して諸王の位を十三階とし諸臣の位を四十八階とす(紀)十月留學生土師甥白猪實然唐より歸朝す(紀)  
 ○五月學問僧觀常雲歸朝す(紀)○七月初めて明位以下進位以上の服色を定む(紀)○九月天皇崩○持統天皇朝に臨む○十月大津皇子に死を賜ふ皇子才學あり尤も又筆に長ず詩賦の興るは皇子より始まる(紀)  
 ○新羅神文王六  
 ○使を唐に遣して禮典並に詞章を請はしむ武后有司をして吉凶要禮を寫し併せて文詞の規誡に涉るものを採らしめ五十卷を勒成して之を賜ふ(東國通鑑)

○六月令二十二卷を諸司に班つ(紀)○閏八月諸國司に令して戶籍を造らしむ(紀)  
 ○正月天皇即位○四月官人の服色八等を定む(紀)○九月學問僧智宗義德淨願唐より歸朝す(紀)○十一月元嘉曆及び儀鳳曆を行ふ(紀)



天皇紀元年號支干 實支那 西曆

一三五七	元西丁	○八月天皇讓位文武天皇即位	(初功元) 一四	697
一三五六	一〇申丙	○七月高市皇子薨(紀)	封通天元 一三(萬持登)	696
一三五五	九未乙	○四月金仁問唐に卒す年六十六(三國史記)	(天册萬歲元) 一一二	695
一三五四	八午甲	朝鮮 ○新羅孝昭王三	(延載元) 一一	694
一三五三	七巳癸	○正月百姓奴隸の服色を定む(紀) ○三月大學博士上百濟に食封三十戸を賜ひ以て儒道を優遇す(紀)	一〇(一一)	693
一三五二	六辰壬	朝鮮 ○新羅孝昭王元 ○是年秋強首卒(三國史記・東國通鑑・文獻備考) ○新羅の薛聰博學にして能く方言を以て九經義を解し後生を訓導す今に至るまで學者之を宗とす善く文を屬す或は云ふ嘗て唐學に入り又吏牘を製し官府の公簿に行ふと(三國史記・東國通鑑・文獻備考) ○四月大學博士上百濟に大稅一千束を賜ひて其の學に勤むるを褒す(紀) ○九月音博士續守言薩弘洛書博士上百濟善信に銀各二十兩を賜ふ(紀) ○十二月音博士續守言薩弘愷に水田各四町を賜ふ(紀)	九(長壽元)	692
一三五二	五卯辛	○四月大學博士上百濟に大稅一千束を賜ひて其の學に勤むるを褒す(紀) ○九月音博士續守言薩弘洛書博士上百濟善信に銀各二十兩を賜ふ(紀)	八(一一)	691

文武

一三五八	二戌戊		(聖曆元) 一五	698
一三五九	三亥己		一六(一一)	699
一三六〇	四子庚		(久祝元) 一七	700
一三六一	大寶元 丑辛	○正月遣唐使粟田真人等を唐に遣す(續紀) ○二月(四日)丁巳大學寮に於て釋奠す(同上) 是れ我國に於て釋奠の禮を行ひ孔子を祀りし始なり ○八月大寶律令成る藤原不比等等之を撰定す(續紀) 大學國學の制始めて備り大學寮は式部省の被管と爲し博士助教を置き學生の簡試及び釋奠の事等を掌らしむ(大寶令・令義解) ○八月明法博士を六道(西海道を除く)に遣して新令を講ぜしむ(續紀) ○從五位下調老人に正五位を賜る律令撰定に預るを以てなり(續紀)	(長安元) 一八	701
一三六一	二寅壬	○二月始めて新律を天下に頒つ(續紀) ○三月始めて度量を天下に頒つ(續紀) ○七月文武官をして新令を讀習せしむ(續紀) 始めて律を講ず(續紀) ○十月律令を天下に頒下す(續紀) ○十二月持統天皇崩(續紀)	一九(一二)	702
一三六三	三卯癸	○二月下毛野古麿等に田及封戸を賜ふ律令修撰の功を賞するなり ○三月國博士其の人を得ざる時は式部省をして選擬せしむ(續紀) ○七月五位已上をして賢良方正の士を舉げしむ(續紀) ○九月僧法蓮に野四十町を施す醫術を褒するなり(續紀) ○十月僧隆觀還俗す姓は金名は財頗る藝術に涉り算曆を知る(續紀) ○	中嗣(二〇) (三)	703



天皇紀元	年號	支干	事	實	支那	曆西
一三六四	慶雲 元辰甲		大寶中僧辨正唐に留學し憶郷の詩を作りて曰く「日邊瞻日本雲裏望雲端遠遊勞遠國長恨苦長安」と後唐に卒す(懷風藻・日史) ○正月百官跪伏の禮を停む(續紀)○七月粟田真人唐より歸り唐人我國を君子國といふと報告す(續紀)公解祿を式部省大學散位寮に給す(續紀)		二二(四)	704
一三六五		二乙巳	○二月藤原武智磨釋奠に先ち先師孔子の靈を祭る文を作る(藤原家傳)	中宗(復位) 神龍元		705
一三六六		三丙午	○三月詔して禮を重んじ俗を正さしむ(續紀)	二		706
一三六七		四未丁	○三月遣唐副使巨勢邑治等歸朝す(續紀)○四月山田御方に布・鹽・穀を賜ふ學士を優遇するなり(續紀)○五月美努淨磨及び學問僧義法義基總集慈定淨達新羅より歸朝す(續紀)○六月天皇崩○七月元明天皇即位○十二月詔を百官に下して禮を重ぜしむ(續紀)○慶雲中應試對策を始む其の後朱承天皇の泰平年中に至るまで獻策者六十五人あり(類聚符宣抄)	景龍元		707
一三六八	和銅 元申戊			二		708
一三六九		二酉己	○十二月下毛野古麻呂卒古磨文武の初律令の撰定に與る(續紀)	三		709
一三七〇		三戌庚	○三月都を平城に遷す	睿宗(後任) 景雲元		710
一三七一		四亥辛	○七月詔して律令を勵行せしむ(續紀)○十月始めて祿法を定む(續紀)	二		711

元正	元號	支干	事	實	支那	曆西
一三七二		五子壬	○正月太安麻呂古事記三卷を上る(古事記序・日史)	先天 元		712
一三七三		六丑癸	○四月新格並に度量衡を天下に頒つ(續紀)○五月諸國郡郷の名に好字を著けしめ又風土記を作らしむ(續紀・日史)	玄宗開元		713
一三七四		七寅甲	○二月紀清人三宅藤麻呂に詔して國史を撰せしむ(續紀)	二		714
一三七五	靈龜 元卯乙		○五月大學典藥生の未卒業にして薦を求むるものは國博士醫師に補するを禁ず(續紀)○七月紀淨人數人に穀百斛を賜ふ學士を優するなり(續紀)○八月阿部仲麻呂遣唐留學生と爲る年十六(續紀・日史)○吉備眞備遣唐留學生と爲る年二十二(續紀・日史)○九月天皇讓位元正天皇即位	三		715
一三七六		二辰丙	○八月多治比縣守を遣唐副使となし阿部安麻呂を大使となし藤原馬養を副使となす(續紀)○九月大伴山守代りて遣唐大使と爲る(續紀)○九月太安麻呂を氏長と爲す(續紀)	四		716
一三七七	養老 元巳丁		○三月遣唐押使多治比縣守等出發す留學生阿部仲麻呂吉備眞備等從ふ(續紀)○七月紀清人に穀一百斛を賜ふ學士を優するなり(續紀) 朝鮮 ○新羅聖德王一六 ○渤海高王大祚榮五 ○九月新羅太監守忠回唐より文宣王十哲七十二弟子の畫像を上る命じて大學に置かしむ(東國通鑑)	五		717



天皇紀元年號	支干	事	實支那	曆西
一三七八	二午戌	○二月遣唐押使多治比縣守等唐より歸朝す(續紀)	六	718
一三七九	三未己	○正月遣唐使多治比縣守等唐國授くる所の朝服を着して拜謁す(續紀)○二月粟田真人卒(續紀・日史) 百姓をして襟を右にせしめ職事の主典以上に笏を把らしむ(續紀)○十二月始めて婦女の服制を定む(續紀)	七	719
一三八〇	四申庚	○二月檢校造器司をして釋奠の器を造らしむ(續紀)○五月舍人親王日本紀三十卷系圖一卷を撰進す(續紀)○八月藤原不比等卒年六十二(續紀・日史)	八	720
一三八一	五酉辛	○正月學業優秀の者を賞して明經博士鍛冶大隅越智廣江等に絁布絲織等の物を賜ふ(續紀)	九	721
一三八二	六戌壬	○二月矢集虫麻呂等に功田を賜ふ律令撰定の功を賞するなり又學術ある者二十三人に田を賜ふ(續紀)○四月山田御方の職を徴するを免す其の學功を録するなり(續紀)○十一月始めて女醫博士を置く(續紀)	一〇	722
一三八三	七亥癸	○七月太安麻呂卒安麻呂古事記を撰し又日本書紀を撰するに與れり(續紀)○十月按察使所治の國を除く外博士を置くを停む(續紀)	一一	723
一三八四	元子甲	○二月天皇讓位聖武天皇即位	一二	724
一三八五	二丑乙		一三	725

天皇紀元年號	支干	事	實支那	曆西
一三八六	三寅丙	○九月内裏に玉來(伴信友云玉來は玉英の誤ならん)を生ず朝野の道俗に勅して玉來の詩賦を作らしむ文人の詩賦を上るもの百十二人之を一二三四等及び不第の五等に分ちて祿を賜ふこと差有り(續紀)	一四	726
一三八七	四卯丁		一五	727
一三八八	五辰戊	○三月天皇鳥池塘に宴し文人をして曲水の詩を賦せしめ各絁十疋布十端を賚ふ(續紀)○八月諸國の史生博士醫師の員並に考選の叙限を改定す(續紀)○十月始めて文章博士一人を大學寮に置く(享祿本類聚三代格)○是年始めて進士の試を行ふ(扶桑略記・朝野群載・日史)	一六	728
一三八九	元巳己	○七月新羅王弟金嗣宗を遣して入唐し子弟の國學に入ることを表請せしむ唐主之を許す(三國史記)	一七	729
一三九〇	二午庚	○二月長屋王に死を賜ふ年四十六王詩歌を善くし當時の方士皆其の門に遊ぶ(續紀・懷風藻・萬葉集・日史)○四月勅して異端を學習し幻術を蓄積し厭魅呪詛して百物を害するを禁じ犯す者は斬流に處す(續紀)	一八	730
		○二月釋奠中臣廣見を遣して大學の博士學生を慰勉せしめ物を賜ふ(續紀)○三月大學の學生及び陰陽醫術曆術漢語を修むる學生に學資を給する制を定む(續紀)		



天皇紀元年號支千 實支那曆西

一三九六	八子丙	○薩摩國正稅帳に春秋釋奠料の事を載す(東大寺正倉院文書)	二四	736
一三九五	七亥乙	○三月入唐大使多治比廣成等歸朝す唐人袁晉卿之に従ふ後大學音博士大學頭となり姓清村を賜はる(續紀) ○四月留學生吉備眞備唐より歸り唐禮百三十卷大衍曆經一卷太衍曆立成十二卷樂書要錄十卷等を献す(續紀・日史) ○十一月舍人親王薨親王文學有り勅を奉じて日本書紀を撰せり(紀・續紀)	二三	735
一三九四	六戌甲	○七月天皇南苑に幸し文人に詔して七夕の詩を賦せしむ(續紀・日史)	二二	734
一三九三	五酉癸	○六月山上憶良卒年七十四(萬葉集に據りて推定す) ○四月遣唐大使多治比廣成等唐に使す(續紀) ○十二月吉田宜を圖書頭と爲す(續紀)	二一	733
一三九二	四申壬	○八月秦朝元遣唐判官と爲る後歸朝して圖書主計頭に至る(日史) ○生徒の多少を以て博士の等級を定めて三等と爲し上等には田一町五段中等には一町下等には五段を給す(續紀) ○十月箭集蟲麻呂を大學頭と爲す(續紀)	二〇	732
一三九一	三未辛	○七月大伴旅人卒年六十七旅人文藻有り和歌を善くす(續紀・懷風藻・萬葉集・日史)	一九	731
		紀) ○天皇松林宮に宴し文章生等をして曲水を賦せしむ(續紀) ○文章博士を正七位下の官と定む(類聚三代格)		

一三九七	九丑丁	○八月藤原宇合卒年四十四字合博く墳典に涉り特に心を文藻に留め當時翰墨の宗たり集二卷有り(續紀・懷風藻・尊卑分脈・日史) ○十二月秦朝元を圖書頭と爲す(續紀)	二五	737
一三九八	一〇寅戌	○七月天皇西池宮に御して吉備眞備等三十人をして梅樹を賦せしむ(續紀) ○八月諸國をして國郡の地圖を上らしむ(續紀)	二六	738
一三九九	一一卯己	○四月多治比廣成卒廣成文學を好み詩を善くす(續紀・懷風藻・日史) ○八月蔭子孫及び位子をして少長となく大學に入らしむ(續紀)	二七	739
		<b>朝鮮</b> ○新羅孝威王三 ○渤海文王天興三 ○二月唐玄宗新羅聖德王の薨せるを聞き那禱を遣して往きて弔せしむ帝禱に謂つて曰く新羅は君子の國と稱す往かば宜しく經義を演べて大國儒教の盛を知らしむべしと(三國史記)		
一四〇〇	一二辰庚	○正月大伴犬養を以て遣渤海大使と爲す(續紀) ○三月紀必登を以て遣新羅大使と爲す(續紀) ○十月遣渤海大使大伴犬養歸朝す(續紀)	二八	740
一四〇一	一三巳辛	○七月橘奈良麿を大學頭と爲し紀淨人を治部大輔兼文章博士と爲し吉備眞備を東宮學士と爲す(續紀)	二九	741
一四〇二	一四午壬		天寶元	742



天皇	紀元	年號	支干	專	實	支	那	曆西
	一四〇三	一五	癸未	○六月林王を圖書頭と爲し下道眞備を春宮大夫兼皇太子學士と爲す(續紀) ○新羅景德王二 ○渤海文王天興七			二	743
	一四〇四	一六	甲申	○三月唐玄宗魏曜をして來聘せしめ併せて御注孝經一部を賜ふ(三國史記)			三	744
	一四〇五	一七	乙酉				四	745
	一四〇六	一八	丙戌	○四月紀廣名を大學頭と爲す(續紀) ○九月久勢王を大學頭と爲す(續紀)			五	746
	一四〇七	一九	丁亥	○新羅景德王六 ○渤海文王天興一一 ○正月國學に諸業博士助教を置く(三國史記) 國學教授の法周易尙書毛詩禮記春秋左氏傳文選を以て分ちて業と爲す(三國史記) 國學を改めて大學と爲す(三國史記)			六	747
孝謙	一四〇八	二〇	戊子	○四月元正上皇崩 ○八月釋奠の服器及び儀式を改定す(續紀)			七	748
	一四〇九	二一	己丑	○二月十六日辛亥の日は入學加冠等に吉なることを記載す(東大寺正倉院文書) ○百官大學生徒に詔して匿名の投書を爲すを禁す(續紀) ○七月天皇讓位孝謙天皇即位 ○八月御方大野を圖書頭と爲す(續紀)			八	749
	一四一〇	二二	庚寅	○九月石上乙磨卒乙磨心を墳典に潜め詩歌を善くし銜悲集二卷を著す(續紀・懷風藻・日史)			九	750

天皇	紀元	年號	支干	專	實	支	那	曆西
	一四一一	三	辛卯	風藻・日史			一〇	751
	一四一二	四	壬辰	○是歲大使藤原清河等を唐に遣す古備眞備を副使と爲す(續紀) ○懷風藻成る(懷風藻)			一一	752
	一四一三	五	癸巳	○是歲橘諸兄諸卿大夫と萬葉集を撰す(榮花物語・元曆校本萬葉集首書・仙覺抄・詞林采葉抄) ○阿部仲磨歸朝せんとして果さず(日史) ○紀清人卒(日史)			一二	753
	一四一四	六	甲午	○正月遣唐副使大伴古磨吉備眞備等歸朝す(續紀) ○十一月入唐學問生船夫子に外從五位下を授く辭して受けず(續紀) ○是歲石河年足卒年七十五年足文藻あり中納言兼文部卿に任じ嘗て別式二十卷を作る(續紀・日史)			一三	754
	一四一五	七	乙未	○正月年を改めて歳となす(續紀)			一四	755
	一四一六	八	丙申	○四月八日辛卯の日入學加冠等に吉なることを記載す(正倉院文書) ○五月聖武上皇崩	肅宗至徳元			756
	一四一七	天 平 元	丁酉	○四月詔して天下をして家ごとくに孝經一本を藏めて精勤誦習してます(孝を行はしむ(續紀) ○八月大學寮に二十町雅樂寮に十町の公廨田を置いて諸生に供給す(續紀・類聚國史・三代格) ○十一月諸國博士醫師の選任を嚴にせしめ其の講習書目を定む又新任の博士醫師をして受くる所の公廨一年分を其の師に送らし			二	757



天皇紀元年號支干 實 支 那 曆西

淳仁 一四一八 二 戊 乾元元 758

一四一九 三 亥 二 上元元 759  
一四二〇 四 子 二 寶應元 760  
一四二一 五 丑 二 代宗廣德元 761  
一四二二 六 寅 二 寶應元 762  
一四二三 七 卯 二 永泰元 763  
一四二四 八 辰 二 764  
一四二五 九 巳 二 765

稱徳 一四二五 神護元 巳 乙 朝鮮 ○新羅景德王二四 ○渤海文王天興二九

765 764 763 762 761 760 759

一四二六 二 午 大曆元 766

一四二七 神護景雲元 未 丁 二 767

一四二八 二 申 三 768

一四二九 三 酉 四 769

光仁 一四三〇 寶龜元 戌 庚 五 770



天皇紀元	年號	支干	事	實	支	那	曆西
一四三二	二亥辛		○七月藤原是人を大學助と爲す(續紀)○九月賀彌小津麻呂を大學員外助と爲す(續紀)○十一月明經文章音博士等五十五人に絲を賜ふ(續紀)○十二月日向大隅薩摩壹岐多楸の博士醫師の一任終身の制を改めて八年遷替と爲す(續紀)			六	771
一四三一	三子壬		○三月靱負御井に置酒して陪從の五位以上及び文士の曲水を賦する者に祿を賜ふ(續紀)○四月安部眞足を大學助と爲す大學頭淡海三船を兼文章博士と爲す(續紀)			七	772
一四三三	四丑癸					八	773
一四三四	五寅甲		○三月藤原是人を圖書頭と爲す(續紀)日置竊麻呂を大學頭と爲す東宮學士故の如し(續紀)			九	774
一四三五	六卯乙		○十月吉備眞備卒眞備入唐留學し經史衆藝に通ず是より先き大學の釋奠其儀未だ備はらず眞備禮典に依稽し器物始めて修まり禮容觀るべし(續紀)			一〇	775

天皇紀元	年號	支干	事	實	支	那	曆西
一四三六	七辰丙		○三月陰陽頭山上船主を兼天文博士と爲す(續紀) 朝鮮 ○新羅惠恭王一一 ○渤海文王天監四 ○二月國學に幸して講を聽く(東國通鑑)大學監を以て復國學と爲す(三國史記・文獻備考)			一一	776
一四三七	八巳丁		○正月藤原眞葛を大學頭と爲す(續紀)膳大丘を博士と爲す(續紀)○三月次侍從已上を内島院に宴し文人をして曲水を賦せしむ(續紀)○四月遣唐大使佐伯今毛人等拜辭す今毛人病あり往くこと能はず副使小野石根等出發す(續紀)			一二	777
一四三八	九午戊		○二月淡海三船を大學頭と爲す文章博士故の如し(續紀)藤原長山を圖書頭と爲す(續紀)○三月五位已上を内裏に宴し文人をして曲水を賦せしむ(續紀)○此歲秋遣唐使判官小野滋野唐客と與に歸朝す(續紀)○十二月袁晋卿に姓を清村と賜ふ(續紀)○是歲伊與部家守の議に従ひて孔子の享坐を定めて南面と爲す(紀略)			一三	778
一四三九	一〇未己		○三月五位已上を宴し文人をして曲水の詩を上らしむ(續紀)○閏五月諸國の史生博士醫師の員を増し史生は大國五人上國四人中國三人下國二人博士醫師は國毎に各一人と爲す(續紀)			一四	779
一四四〇	一一申庚			德宗建中元			780



天皇  
桓武

紀元	年號	支干	事	實	支	那	曆西
一四四二	天應元	辛酉	○四月天皇讓位桓武天皇即位○六月大納言兼式部卿石上宅嗣卒宅嗣博く國史に通じ淡海三船と文人の首たり宅嗣舊宅の一隅に文庫を建て名けて芸亭といひ儒書を藏せり(續紀)○十月淡海三船を大學頭と爲す(續紀)○十一月明經紀傳陰陽醫家諸の才能の士に絲各十紬を賜ふ(續紀)			二	781
一四四二	延暦元	壬戌	○六月安都眞足を大學助と爲し長尾金村を博士と爲す(續紀)○八月大學頭淡海三船を兼因幡守と爲す文章博士故の如し(續紀)安倍常島を圖書頭と爲す(續紀)		三		782
一四四三		癸亥	○五月大外記の官品を昇して正六位上(元は正七位上)と爲し少外記を昇して正七位下(元は從七位上)と爲す(續紀)○十一月朝原道永を兼大學助と爲す(續紀)		四		783
一四四四		甲子	○三月五位已上を宴し文人をして曲水を賦せしむ(續紀)○四月淡海三船を刑部卿と爲す大學頭因幡守故の如し(續紀)			興元元	784
一四四五		乙丑	○三月五位已上を鳴の院に宴し文人をして曲水を賦せしむ(續紀)○四月先帝今上の諱を犯すを禁じ白髪部を改めて眞髮部と爲し山部を山と爲す(續紀)○七月淡海三船卒年六十四三船群書を涉覽し筆札を好み大學頭文章博士に歴任し嘗て勅を奉じて神武以來の謚號を定む(續紀)釋日本紀所引私記)○八月大伴家持			貞元元	785

一四四六		丙寅				二	786
一四四七		丁卯	卒家持萬葉集を續撰して二十卷と爲す(續紀)仙覺抄・日史)○十一月朝原道永・津眞道を東宮學士と爲す(續紀)○十二月天皇菅原古人の子清公等兄弟四人に衣糧を給し勤學せしむ古人侍讀の勞を以てなり之を學問給料の始とす(續紀)二中歴・文粹)			三	787
一四四八		戊辰	○三月朝原道永を大學頭と爲す東宮學士文章博士故の如し(續紀)○五位已上を内裏に宴し文人を召して曲水を賦せしむ(續紀)○五月典藥寮の言に従ひ陶隱居の集註本草を廢して蘇敬の新修本草を行ふ(續紀)			四	788
一四四九		己巳	○二月主稅助麻田眞淨を兼大學博士と爲す(續紀)○六月東宮學士津眞道を兼圖書助と爲し藤原刷雄を大學頭と爲す(續紀) 朝鮮 新羅元聖王三 ○渤海文王天監五二 ○是歲春始めて讀時出身科を定む左傳禮記文選を讀みて其の義に通じ兼ねて論語孝經に明かなるものを上とし曲禮論語孝經を讀むものを中とし曲禮孝經を讀むものを下とす若し五經三史諸子百家の書に博きものは超擢して之を用ふ(東國通鑑)			五	789



一四五七	一六	丑丁	○二月續日本紀四十卷成る菅野真道等勅を奉じて撰す(紀略)	一三	797
一四五六	一五	子丙	○七月藤原繼繩卒年七十繼繩嘗て天平寶字より寶龜に至る國史を刪定す(後紀・類聚國史・日史)	一二	796
一四五五	一四	亥乙		一一	795
一四五四	一三	戌甲	○八月藤原繼繩等國史を撰進す(紀略)○十月平安遷都○十一月大學寮の公麻田を増して一百二町と爲し勸學田と曰ふ(類聚國史)	一〇	794
一四五三	一二	酉癸	○二月己未大學寮釋奠供牲の事を言ふ(紀略)○六月在原行平卒年七十六行平嘗て獎學院を左京三條に創す(紀略・補任・西宮記・拾芥鈔・日史)	九	793
一四五二	一一	申壬	○閏十一月明經の徒の吳音を習ふを禁じ漢音を熟習せしむ(紀略)	八	792
一四五〇	九	午庚	○三月物部國足を圖書助と爲す(續紀)	六	790
一四五一	一〇	未辛	○二月文章博士の職田を四町と定む(三代格)○三月刪定律令二十四條を始行す(續紀)親盡くる廟の忌祭を廢止す(續紀)長津王を圖書頭と爲す(續紀)太政官禮記によりて天子の廟制を奏す奏可す(續紀)○十二月岡田牛養を大學博士と爲し麻田眞淨を助教と爲す(續紀)	七	791

一四五八	一七	寅戊	○三月公羊穀梁二傳を學官に立て小經に準ず(學令集解)	一四	798
一四五九	一八	卯己	○二月和氣清麻呂卒(後紀)	一五	799
一四六〇	一九	辰庚	○十月伊與部家守卒家守唐に赴きて五經切韻説文を學びて歸朝し大學助教と爲り公羊穀梁二傳を講ず(紀略)	一六	800
一四六一	二〇	巳辛		一七	801
一四六二	二一	午壬		一八	802
一四六三	二二	未癸	○是歲遣唐大使藤原葛野麻呂等を唐に遣す既に發し風にあひて還る(後紀)	一九	803
一四六四	二三	申甲	○是歲遣唐大使藤原葛野麻呂等出發す留學生橘逸勢僧空海僧最澄等之に従ふ(後紀)	二〇	804
一四六五	二四	酉乙	○是歲和氣廣世父清麻呂の志を繼ぎ大學別當となるや學事を勸奨し學館を開き弘文院と稱し内外經書數千卷を藏す是れ私學の嚆矢なり(後紀)	順宗永貞元	805
一四六六	元	戌丙	○三月天皇崩○五月平城天皇即位○是歲遣唐使判官高階遠成橘逸勢僧空海歸朝す(後紀)	憲宗元和元	806
一四六七	二	亥丁		二	807
一四六八	三	子戊		三	808
一四六九	四	丑己	○四月天皇讓位嵯峨天皇即位	四	809



天皇紀元	年號	支干	事	實	支	那	曆西
一四七〇	弘仁元	庚寅			五	五	810
一四七一		辛卯			六	六	811
一四七二		壬辰	○二月辛丑の日神泉苑に幸して花樹を覽文人に命じて詩を賦せしむ花宴の節此に始まる(後紀)		七	七	812
一四七三		癸巳			八	八	813
一四七四		甲午			九	九	814
一四七五		乙未	○六月賀陽豐年卒年六十五豐年經史に精通し操を秉り義を守る東宮學士に任せらる(後紀)○六月萬多親王藤原園人新撰姓氏錄を上る(日史)		一〇	一〇	815
一四七六		丙申			一一	一一	816
一四七七		丁酉			一二	一二	817
一四七八		戊戌	○十二月藤原園人卒(日史)		一三	一三	818
一四七九		己亥	○是歲藤原冬嗣等勅を受けて日本後紀を撰す(日史)		一四	一四	819
一四八〇		庚子			一五	一五	820
一四八一		辛丑	○二月文章博士を昇して從五位下の官と爲す(三代格)○十二月藤原冬嗣一族子弟教養の爲に始めて學校を建て勸學院と名け大學寮の南に在るを以て南曹とい		穆宗長慶元		821

淳和	年號	支干	事	實	支	那	曆西
一四八二		壬寅			二	二	822
一四八三		癸卯	○四月天皇讓位淳和天皇即位		三	三	823
一四八四	天長元	甲辰			四	四	824
一四八五		乙巳	○新羅憲德王一六 ○渤海宣王建興六 ○五月金听をして唐に如かしむ听奏請す金允夫等十二人を國學に入れ其の先に在學せる崔利貞等を以て還らんと帝之に従ふ(東國通鑑)	寶曆元	元		825
一四八六		丙午	○七月藤原冬嗣卒年五十二冬嗣勸學院を置きて子弟を教授し封一千戸を拆きて之に給す嘗て勅を奉じ弘仁格内裏式を撰し又國史を監修せしが未だ成らずして卒す(紀畧・補任・三代格・内裏式・類聚國史・日史)		二		826
一四八七		丁未	○良岑安世・滋野貞主等經國集を撰す(日史)	文宗大和元	元		827
一四八八		戊申			二		828
一四八九		己酉			三		829
一四九〇		庚戌	○四月小野岑守卒年五十三岑守内裏式凌雲新集の撰に與り又續命院を建て、行旅に便せり(紀畧・補任・内裏式・凌雲集・續後紀・日史) 萬多親王薨(日史)○七月良岑安世卒(日史)		四		830



天皇 紀元 年號 支干 事 實 支 那 曆西

一四九一	八 亥 辛	○是歲滋野朝臣貞主勅命により諸儒と與に古今の文書を撰集し類を以て相從ふ凡て一千卷名けて秘府畧といふ(文德實錄・日史)	四	831
一四九二	九 子 壬	○二月天皇讓位仁明天皇即位○清原夏野等令義解を上る(日史)○四月皇太子(恒貞親王)始めて孝經を讀む時に皇太子御齡九歲なり(續後紀)	六	832
一四九三	一〇 丑 癸	○三月紀傳博士一人を減じて文章博士一員を加置す(續後紀・類聚三代格)○九月丙辰重陽節日天皇紫宸殿に御し文章生等を召して秋風歌の題を賦せしむ(續後紀)○十二月天長年中新撰の令義解を天下に頒ちて施行せしむ(續後紀)○是歲持節大使藤原常嗣副使小野篁を唐に遣はす(後紀)	七	833
一四九四	元 寅 甲	○三月僧空海卒年六十三(續後紀・日史)○七月天皇紫宸殿に御す菅原清公後漢書を侍讀す○八月後朝に釋奠す天皇紫宸殿に御し明經碩儒等を昇殿講義せしむ(續後紀)	八	834
一四九五	二 卯 乙	○四月甘南備高直卒年六十二高直文を善し琴書に工なり(續後紀・日史)遣唐大使藤原常嗣副使小野篁等を召して餞を賜ふ(續後紀)○五月故入唐大使藤原清河に從一品故留學生安倍仲滿に正二品故入唐使石川道益に從四品上故入唐判官紀馬主等に從五品上を贈る(續後紀)○七月遣唐使藤原常嗣小野篁出發す風に遇ひ破船して還る(續後紀)文章博士惟良貞道圖書頭と爲る(續後紀)	九	835

仁明

一四九六	三 辰 丙	○四月遣唐使藤原常嗣小野篁船舶を修治して出發す又風に遇ひ途より還る(續後紀)○十月清原夏野卒年五十六夏野令義解を撰す(續後紀・日史)	開成元	836
一四九七	四 巳 丁	○正月藤原氏宗式部少輔と爲り大學頭源明加賀守を兼ね(續後紀)○六月天皇清涼殿に御し助教眞道廣公をして群書治要第一卷を讀ましむ經文あるが故なり(續後紀・日史)○七月遣唐使船修繕成る發するに臨み副使小野篁の事につきて病と稱して行かず(續後紀)○八月丁亥文宣王(孔子)を釋奠す翌戊子天皇紫宸殿に御し大學博士學生等を召し遞に昨日講ぜし所の尙書の義を論難せしむ(續後紀)○十二月小野篁を隱岐に流す西道謠を作りて遣唐使の事を刺るを以てなり(續後紀)	二	837
一四九八	五 午 戊	○正月圖書頭惟良貞道伊勢守を兼ね(續後紀)大學頭源明近江守を兼ね(續後紀)○八月善道眞貞に田九段を賜ふ(續後紀)○九月遣唐大使藤原常嗣等歸朝す(續後紀)○十一月藤原善對策して中上を得たり(續後紀)	三	838
一四九九	六 未 己	○四月藤原常嗣卒年四十五常嗣史漢を涉獵し文選を暗誦し又好く文を屬し兼ねて隸書を能くせり遣唐持節大使と爲る(續後紀・日史)○五月淳和上皇崩○六月	四	839
一五〇〇	七 申 庚		五	840



天皇紀元年號支千 實支那 曆西

一五〇四	一一 子甲	○二月丁卯釋奠公卿大學に就きて事を行ふ(續後紀)	四	844
一五〇三	一〇 亥癸	○二月春澄善繩文章博士と爲る(續後紀)○六月朝野鹿取卒年七十鹿取史漢に涉り漢音に通じ嵯峨帝の藩邸に在るや侍講たり(續後紀・日史)菅野高年をして日本紀を内史局に讀ましむ(續後紀・日史)大學博士御船氏主越中守を兼ね(續後紀)○七月藤原緒嗣卒年七十緒嗣姓氏錄及日本後紀を撰するに與る(續後紀・姓氏錄序・類聚國史・日史)○八月丁巳釋奠(續後紀)藤原愛發卒年五十七愛發文章生より式部大輔と爲る(續後紀)	三	843
一五〇二	九 戌壬	○七月藤原繼業卒年六十五繼業大學頭と爲る(續後紀)嵯峨上皇崩年五十七(續後紀)○八月橘逸勢配所に赴く途に死す(續後紀・日史)小野篁東宮學士兼式部少輔と爲り茂世王大學頭と爲る(續後紀)○十月菅原清公卒年七十三清公凌雲集・文華秀麗集の撰に與る集六卷有り(續後紀・凌雲集序・文華秀麗集序・菅原後草・日史)	二	842
一五〇一	八 酉辛	○八月丁未釋奠公卿大學に就きて事を行ふ翌戊申天皇紫宸殿に御し大學博士學生を召し昨日所講の孝經を論難せしむ(續後紀)○九月小野篁の文才を愛みて特に本爵に復す(續後紀)○十二月日本後紀四十卷成る藤原冬嗣等勅を奉じて撰進す(續後紀・日史)小野恒柯等存問渤海使と爲る(續後紀)	武宗會昌元	841

一五〇五	一二 丑乙	○二月善道眞貞卒年七十八眞貞三傳三禮を以て業となし東宮學士となり晚年公羊傳を大學に講ず(續後紀)丁亥釋奠公卿等大學に就きて事を行ふ(續後紀)○三月菅原是善文章博士と爲る(續後紀)○八月丁丑釋奠公卿大學に詣りて事を行ふ翌戊寅天皇紫宸殿に御し大學博士學士等を召し論議せしむ(續後紀)	五	845
一五〇六	一三 寅丙	○七月藤原吉野卒年六十一吉野嘗て式部大輔と爲る(續後紀)○九月重陽節天皇紫宸殿に御し親王以下六位に至るの文人に賜宴し九日侍宴の詩を賦せしむ韻は平字を用ふ(續後紀)和氣眞綱卒年六十四眞綱文章生より參議に至る(續後紀)	六	846
一五〇七	一四 卯丁	○五月乙亥清涼殿に於て莊子の竟宴を行ひ侍講文章博士春澄善繩に御衣二襲を賜ふ當代の儒者共に以て榮となす(續後紀)辛卯天皇善繩を清涼殿に召し始めて漢書を讀む(續後紀・日史)○十月二品有智子内親王薨す内親王頗る史漢に涉り兼て善く文を屬す(續後紀)○是歲皇太子恒貞親王奏して曰く皇太子釋奠に當り大學に禮するは是れ舊儀なり此禮久しく廢す未だ所以を知らざるなりと天皇曰く今太子心興復に存す甚だ佳なりと即ち皇太子に勅して百官を率ゐて二季に奠せしむ(後拾遺往生傳)	宣宗大中元	847
一五〇八	嘉祥元 辰戌	○九月重陽宴公卿及び文人をして雨洗白菊の詩を賦せしむ(續後紀)	二	848



天皇

紀元

年號

支干

事

實

支

那

曆西

文德

一五〇九

二己巳

午庚

事

實

支

那

曆西

一五一一

三庚午

辛未

事

實

支

那

曆西

一五一一

二壬申

癸酉

事

實

支

那

曆西

一五一一

二壬申

癸酉

事

實

支

那

曆西

一五一一

三癸酉

壬申

事

實

支

那

曆西

一五一一

三癸酉

壬申

事

實

支

那

曆西

一五一一

三癸酉

壬申

事

實

支

那

曆西

清和

一五一八

二寅戌

事

實

支

那

曆西

一五一七

三丑丁

丙子

事

實

支

那

曆西

一五一六

二亥乙

丙子

事

實

支

那

曆西

一五一五

二戌甲

癸酉

事

實

支

那

曆西

一五一四

二酉癸

壬申

事

實

支

那

曆西

一五一三

二辰庚

辛未

事

實

支

那

曆西

一五一二

二卯己

庚辰

事

實

支

那

曆西

一五一一

二寅戌

癸酉

事

實

支

那

曆西



天皇紀元年號支干 實支那曆西

一五二二	三巳辛	○二月丁巳釋奠常の如し(三代實錄)○六月長慶宣明曆經を頒行す(三代實錄)○八月丁未釋奠常の如し六人部福貞周易を講ず明日明法博士等參内論義す○十六日天皇始めて論語を講ず大春日雄繼侍講す(三代實錄)○九月豐階安人卒年六十五安人漢書に精通し大學頭東宮學士と爲る(三代實錄)	二	861
一五二三	四午壬	○二月丁未釋奠常の如し葛井宗之左傳を講ず(三代實錄)○八月丁未釋奠常の如し苻田安雄御注孝經を講ず(三代實錄)明日明經博士等參内論義す(三代實錄)讚岐永直卒年八十永直律令に精通し明法博士と爲る明法博士額田今人等皆て刑法の疑義を唐國に質さんとす永直之を詳解して疑義氷釋せり(三代實錄・日史)	三	862
一五二四	五未癸	○正月源弘卒年五十二弘經史を好み隸書を善くす(三代實錄)助教滋善宗人卒年	四	863

一五二四	六申甲	六十四宗人經學に通じ儒素を以て自ら守る(三代實錄)○二月潔世王大學頭となる(三代實錄)○八月釋奠常の如し船副使磨禮記を講じ文章生詩を賦す(三代實錄)	五	864
一五二五	七酉乙	○二月丁巳釋奠常の如し(三代實錄)	六	865
一五二六	八戌丙	○二月釋奠苻田安雄周易を講じ文章生詩を賦す(三代實錄)○八月釋奠船副使磨左氏傳を講じ文章生詩を賦す(三代實錄)	七	866
一五二七	九亥丁	○二月丁丑釋奠常の如し(三代實錄)○八月丁丑釋奠常の如し翌日明經博士等を御前に召し經義を質す(三代實錄)○九月重陽の節群臣に宴を賜ひ文人をして詩を賦せしむ(三代實錄)○十月藤原良相卒年五十五良相文學の士を好み大學中貧	八	867



天皇紀元年號支干

事

實

支

那

曆西

一五二八

一〇  
子戊

寒の者を選び屢物を給す(日史・三代實錄)  
○二月丁丑釋奠常の如し(三代實錄) ○八月丁卯釋奠翌日明經博士參内論義す(同上) ○閏十二月源信卒年五十九信好んで書傳を讀み又草隸を善くす(三代實錄)

九

868

朝鮮 ○新羅景文王七 ○渤海彝震王度晃一〇

○是歲崔致遠唐に入り師を尋ねて學に力む(三國史記)

一五二九

一一  
丑己

○二月丁酉釋奠常の如し(三代實錄) ○四月貞觀格を撰す(三代實錄) ○八月丁亥釋奠常の如し翌日明經博士等參内論義す(三代實錄) ○八月續日本後紀二十卷成る藤原良房之を撰進す(續日本後紀序・日史) ○九月新撰貞觀格十二卷を頒行す(三代實錄)

一〇

869

朝鮮 ○新羅景文王八 ○渤海彝震一一

○七月學生李同等三人を遣して入唐業を習はしむ仍りて買書銀三百兩を賜ふ(三國史記)

一五三〇

一二  
寅庚

○二月春澄善繩卒年七十四善繩嘗て大學に後漢書を講じ又日本後紀を撰修す

一一

870

四〇

一五三一

一三  
卯辛

(三代實錄) ○三月菅原峯嗣卒年七十八峯嗣諸名醫と共に金蘭方を撰す(三代實錄) ○八月丁亥釋奠常の如し翌日明經博士等參内論義す(三代實錄) 天文博士中臣春繼卒(三代實錄) ○九月文章得業生正六位下菅原道真對策中上第を得るを以て位一階を加敘せらる(三代實錄) ○九月重陽節天皇紫宸殿に御し宴を群臣に賜ひ文人を召して天錫難老の詩を賦せしむ(三代實錄)

一二

871

○二月丁丑釋奠常の如し(三代實錄) ○四月陰陽博士笠名高卒(三代實錄) ○八月丁丑釋奠但し講論宴飲を停む文德天皇皇女勝子内親王薨じ輟朝三日の期限内にあるを以てなり(三代實錄) 藤原氏宗等貞觀式を撰す(三代實錄) ○十月明經文章博士等をして應天門の名を改むべきか否かを議せしめ改めざるに決す(三代實錄) 天皇諸儒を召し太皇太后の爲に喪服の事を議せしむ(三代實錄)

一五三二

一四  
辰壬

○正月菅原道真等を存問渤海客使となす(三代實錄) ○二月丁未釋奠大學助教善淵永貞毛詩を講ず文人學生に賜宴せず去年九月太皇太后崩じ主上心喪の日未だ満たざるを以てなり(三代實錄) 藤原氏宗卒(三代實錄) ○四月大學頭巨勢文雄藤原佐世勅命に依り渤海國使を鴻臚館に饗す(三代實錄) ○九月藤原良房卒年六十九良房勅を奉じ續日本後紀を撰進す(三代實錄・大鏡裏書・公卿補任・紀略・日史)

一三

872

四一



一五三三	一五	巳癸	○二月丁酉釋奠(三代實錄)○八月丁酉釋奠(三代實錄)	一四	873
一五三四	一六	午甲	○二月丁酉釋奠(三代實錄)○八月釋奠翌日天皇紫宸殿に御し明經博士等を召し經義を論ぜしむ(三代實錄)○十一月多治貞岑卒年七十六貞岑嘗て大學頭たり(三代實錄)	僖宗乾符元	874
一五三五	一七	未乙	朝鮮 ○新羅景文王一三 ○渤海景王四 ○九月崔致遠唐に在りて登科す(三國史記)		
一五三六	一八	申丙	○正月冷然院火あり國籍文書灰燼となる(三代實錄)○二月丁巳釋奠の禮を行はす(三代實錄)都良香文章博士となる(三代實錄)○四月皇太子始めて千字文を讀む橘廣相侍讀す(三代實錄)群書治要の竟宴を行ふ是より先き天皇群書治要を讀む參議菅原是善書中の紀傳諸子の文を授け奉り刑部大輔菅野佐世五經の文を授け奉る是に至りて竟る(三代實錄)天皇始めて史記を讀む大江音人侍講たり(三代實錄)○八月丁巳釋奠の如し翌日明經博士等參内論義す(三代實錄)○十月大藏善行をして御書を校定せしめ顔氏家訓を以て帝の左右の年少等に教授せしむ(三代實錄)	二	875
陽成			○二月丁巳釋奠の禮を停む皇太后宮司穢に染みて内裏に入りしによる丁卯釋奠の禮を行ふ(三代實錄)○四月大極殿災す(三代實錄)大學博士善淵廣岑等を召し	三	876

一五三七	元慶	元酉	○二月丁未釋奠(三代實錄)○四月夜日蝕の事あり明經紀傳明法博士をして日蝕夜にあり廢務すべしや否やを議せしむ(三代實錄)○四月天皇大江音人に勅して太上天皇に送るの書御諱を注すべしや否やを議せしむ御諱の一字を注することと定む(三代實錄)○四月南淵年名卒年七十年名文章生に補し少内記と爲る(三代實錄・日史)○八月丁丑釋奠を停む國忌に緣りてなり丁亥釋奠の禮を行ふべきに大學寮の犬産して穢を成せり因りて停止す(三代實錄)○十一月大江音人卒年六十七音人博學善く文を屬す弘帝範・羣籍要覽を撰し又貞觀格式を撰するに與る(三代實錄)	四	877
一五三八		二戌	○二月丁卯釋奠(三代實錄)善淵愛成をして始めて日本紀を讀ましむ(三代實錄)○八月皇弟貞保親王始めて蒙求を讀む橘廣相侍讀たり(三代實錄)丁卯釋奠(三代實錄)○十二月日本文德天皇實錄十卷成る藤原基經之を撰進す(文德實錄序但他本三年十一月に作る未だ孰か是なるを知らず)	五	878
一五三九		三亥	○二月都良香卒年四十六良香博聞強記善く文を屬し文章博士と爲る(三代實錄)丁卯釋奠(三代實錄)○四月天皇始めて御注孝經を讀む善淵永貞侍讀たり(三代實錄)	六	879



天皇紀元年號支干  
實支那曆西

一五四〇	四子庚	廣明元	880
一五四一	五丑辛	中和元	881
一五四二	六寅壬	二	882

實錄)○五月善淵愛成をして日本紀を讀ましむ(三代實錄)○八月丁卯釋奠の禮を停む此月八日木工頭藤原維邦寮直曹に於て頓に卒し諸司彼の寮に入るを以てなり(三代實錄)天皇始めて論語を講ず大學博士大春日雄繼侍講す(三代實錄)

**朝鮮** ○新羅憲康王四 ○渤海景王九

○二月國學に幸し博士以下に命じて講論せしむ(三國史記)

○二月丁亥釋奠占部月雄禮記を講ず(三代實錄)天文博士志斐安善卒(三代實錄)

○八月丁亥釋奠山邊善直毛詩を講ず(三代實錄)菅原是善卒是善文德天皇實錄を撰し又東宮切韻を著す(三代實錄)○十二月清和天皇崩す天皇好て書傳を讀み釋教に潜思す(二代實錄)○是歲巨勢金岡唐木に依り大學寮先聖先師九哲の像を模畫す(續通鑑後三條天皇延久三年三月)

○二月丁亥釋奠の禮を停む諒闇に依りてなり(三代實錄)○八月丁亥釋奠を停む諒闇に依りてなり(三代實錄)○是歲在原行平藤原氏の勸學院に倣ひて獎學院を起す(西宮記・日史)

○二月丁丑釋奠を停む去月大炊寮人の死穢ありしを以てなり丁亥釋奠直道守永

光孝  
一五四四  
八辰甲  
四

一五四三	七卯癸	三	883
一五四四	八辰甲	四	884
一五四五	九巳乙	光啓元	885

古文尚書を講ず(三代實錄)○八月丁未釋奠(三代實錄)日本紀竟宴を設け紀中の聖徳の帝王有名の諸臣を抄出して和歌を詠せしむ(三代實錄)

○二月丁未釋奠助教淨野宮雄周易を講じ文章生等詩を賦す(三代實錄)○八月丁酉釋奠直講山邊善直左氏春秋を講じ文章生等詩を賦す(三代實錄)○十一月圖書寮火を失す(三代實錄)

○二月天皇遜位光孝天皇即位○丁酉釋奠直道守永御注孝經を講じ文章生等詩を賦す(三代實錄)○四月天皇始て文選を讀む橘廣相侍讀たり(三代實錄)○八月菅原道真等太政大臣の職掌の事等につき奏議する所あり(三代實錄)○八月丁酉釋奠を行ふべきに六日氷を負へる牝馬主水司に於て傷胎し主水司其氷を御膳に供奉せしこと發覺したるにより延引して丁未之を行ふ助教淨野宮雄禮記を講ず(三代實錄)勅して新錢三十貫を以て左右京職に分給し其の利子を大學寮に送りて學生の菜料に充てしむ藤原佐世の奏言に依るなり(三代實錄)

○二月丁亥朔釋奠公卿畢く至る(三代實錄)○八月釋奠翌日明經博士等參内山邊善直古文尚書を講じ文章生等詩を賦す(三代實錄)○九月紀常直等を召して書迹を試む(三代實錄)○十一月勅して釋奠の祭牲を潔淨乾曝せしむ(三代實錄)○十二月大學博士善淵永貞卒年七十三(三代實錄)

**朝鮮** ○新羅憲康王一〇 ○渤海景王一五



天皇紀元年號支干 實支那曆西

一五四六	二丙午	○三月崔致遠唐より還る(東國通鑑) 崔彦攝唐に遊學し登科す(三國史記・高麗史)	二	886
一五四七	三丁未	○正月善淵愛成大學博士となる(三代實錄) ○二月釋奠淨野宮雄論詰の題を發し文章生等詩を賦す(三代實錄) 藤原彌蔭大學頭となる(三代實錄) ○五月紀安雄卒年六十五安雄經學に精しく又詞華に巧なり(三代實錄) ○八月丁未釋奠畢りて太政大臣廟に入りて文宣王の像を拜す公卿畢く會し明經博士をして周易を講ぜしむ(三代實錄)	三	887
一五四八	四戊申	○二月釋奠禮畢りて親王以下御座に就き淨野宮雄春秋の題を發し文章生等詩を賦す(三代實錄) ○八月丁未釋奠の禮を停む去月三十日木工寮將領泰千本地震に驚き恐れ失神して死し供祭所司此の死穢に觸れしを以てなり(三代實錄) ○八月天皇崩 ○十一月宇多天皇即位	文德元	888

宇多

一五四九	元己酉	○十月天皇博士善淵愛成に周易を受く(日史)	昭宗龍紀元	889
一五五〇	二庚戌	○二月釋奠論語を講じ爲政以德を以て詩題とす(田氏家集) ○三月雅院曲水飲を侍臣に賜ひ菅原道真等をして詩を獻せしむ(通鑑) ○五月橘廣相卒年五十四廣相陽成光孝宇多三朝に歴史に侍讀たり博く群書を讀み又文を善くす(通鑑・日史) ○七月七夕に文人に勅して代牛女惜曉更の詩を作らしめ小野美材をし序を作らしむ(通鑑) ○九月文人に勅して惜秋翫殘菊の詩を賦せしめ菅原道真をして序を作らしむ(通鑑) ○閏九月盡日侍臣詩人九人をして惜秋を賦せしむ菅原道真亦之に與る(通鑑) ○十月文人をして禁中初雪の詩を賦せしむ(通鑑)	大順元	890

**朝鮮** ○新羅眞聖女王元 ○渤海景王一八  
角干魏弘と大矩和尚とに命じ郷歌を修集せしむ之を三代目と謂ふ(三國史記)

一五五一	三辛亥	○正月藤原基經卒年五十六基經儒術を敦崇し釋尊の日公卿を率ゐて先聖を拜し明經博士をして周易を講ぜしむ元慶中勅を奉じて文德實錄十卷を撰す(扶桑畧)	二	891
------	-----	---	---	-----



一五五二	四子壬	景福元	892
一五五三	五丑癸	二	893
一五五四	六寅甲	宗乾寧元	894

記・補任・三代實錄・文德實錄・日史)○二月菅原道真を藏人頭に補す(通鑑)○六月博士善淵愛成周易を講了す(元年十月講を起す)島田忠臣に詔し詩并序を作りて之を紀せしむ(通鑑)○是歲圖書頭文章博士紀長谷雄始めて漢書を讀む(通鑑)○正月文章博士紀長谷雄尾張介に兼任す(通鑑)○五月菅原道真勅を奉じて類聚國史二百卷を撰進す(菅家御傳記・通鑑)源能有大藏善行等に勅して國史を撰せしむ(紀略・日史)僧昌住の新撰字鏡成る(日史)

○正月宴を宮人に賜ひ菅原道真をして催粧の詩を賦せしむ(通鑑)○二月中丁釋奠古文孝經を講ぜしめ後孝經の語を以て詩を賦せしむ(通鑑)○七月菅原道真書齊記を作り關入の制を設く(通鑑)○八月中丁釋奠禮記を講ぜしめ養老を賦せしむ(通鑑)文章院漢書竟宴(通鑑)

**朝鮮** ○新羅眞聖女王六 ○渤海景王二三 ○是歲崔承祐唐に在りて登科す四六集五卷あり糊本集と曰ふ(三國史記)

○二月中丁釋奠博士に勅して論語を講ぜしめ且才子をして爲政以德の詩を作らしむ(通鑑)○八月菅原道真を遣唐大使と爲し紀長谷雄を遣唐副使と爲す(扶桑畧記・通鑑)○九月菅原道真上疏して遣唐使を止むるを請ひ竟に行くを果さず(扶桑畧記・通鑑)○十二月參議菅原道真侍從を兼ね(通鑑)文章生橘澄清を伯耆

一五五五	七卯乙	二	895
一五五六	八辰丙	三	896
一五五七	九巳丁	四	897

權掾に任ず(通鑑)

○二月大學典樂の諸生並に鴻儒名醫の子孫は課試を経ずして諸國の博士醫師に任用の制を定む(通鑑)○三月菅原道真東宮の令を奉じ一刻に七絶十首を賦す(通鑑)菅原道真紀長谷雄と渤海使人裴邈に接し交字詩を賦す(菅家文章・通鑑)菅原道真制に應じて春惜櫻花の詩を賦す(通鑑)○十一月菅原道真東宮權大夫を兼ね(通鑑)

○二月齊世親王大學寮に於て始めて書を讀む文章博士紀長谷雄文選を講ず(紀略)○春菅原道真東宮の令を奉じて一刻にして五律二十首を賦す(通鑑)○十二月紀長谷雄勅を奉じて累代寶琴銘を作る(通鑑)

**朝鮮** ○新羅眞聖女王九 ○渤海景王二六 ○是年新羅崔致遠伽倻山に入り終る所を知らず著す所四六集一卷桂苑筆耕十二卷(二十卷)文集三十卷有り(東儒錄・三國史記)

○六月源能有卒(日史)大學頭文章博士兼式部大輔紀長谷雄を侍從に兼任す(通鑑)菅原道真を權大納言に任ず(通鑑)○七月天皇讓位醍醐天皇即位○菅原道真藤原菅根の爲に東宮侍講の賞として從五位に敘するを請ふ(通鑑)○九月菅原道真上皇の制に應じて閑居樂秋水の詩を賦す(通鑑)



一五五八 昌泰 元 戊午

○正月内宴群臣に命じて草樹暗迎春の詩を賦せしむ紀長谷雄序を作る(續通鑑)  
 ○二月天皇清涼殿に御して群書治要を讀む紀長谷雄之を奉授し大内記小野美材も尙復と爲る(續通鑑)(續通鑑・紀畧)○九月重陽宴に群臣をして菊有五美の詩を賦せしむ(續通鑑)上皇文人を朱雀院に召して重陽後朝の宴を設け秋思入寒松の詩を賦せしむ紀長谷雄序を作る(續通鑑)○十月藤原佐世卒佐世貞觀中對策及第し累遷して大學頭に任じ嘗て本朝現在書籍目錄を撰し世に傳る(續通鑑・日史)

昭宗光化元

898

一五五九

二 巳未

○正月天皇上皇に朱雀院に朝觀し菅原道真等をして庭中梅花の詩を賦せしむ(續通鑑)清涼殿に宴し菅原道真等をして鶯出谷の詩を賦せしむ(續通鑑)○二月菅原道真を右大臣と爲し藤原菅根を文章博士に兼任す(續通鑑)菅原道真上表して右大臣を辭す允さず(續通鑑)○三月菅原道真再び右大臣を辭す聽さず(續通鑑)上皇群臣を朱雀院の栢梁殿に宴し惜殘春の詩を賦せしむ菅原道真之が序を作る(續通鑑)菅原道真三たび右大臣を辭す遂に許さず(續通鑑)○七月七夕上皇文人を朱雀院に宴し浮雲動別衣の詩を賦せしむ(續通鑑)○九月九日群臣を南殿に宴し菊散一叢金の詩を賦せしむ(續通鑑)○盡日菅原道真上皇の制に應じて詩

二

899

一五六〇

三 庚申

を賦す(續通鑑)

○正月天皇朱雀院に朝觀し上皇と議して菅原道真をして關白たらしめんとす道真之を固辭す(續通鑑)内宴菅原道真等をして春風詞の詩を賦せしむ(續通鑑)○五月三善清行を文章博士と爲す(續通鑑)○六月文章博士三善清行詔を承けて文章博士藤原菅根に代りて史記を講ず(續通鑑・紀畧)○八月釋奠(續通鑑・紀畧)菅原道真清公是善道真三代の家集二十八卷を撰進す天皇律詩を賜ひて之を褒す(續通鑑)○九月詔して獎學院を以て大學寮の南曹と爲す(續通鑑)重陽宴に群臣をして寒露凝の詩を賦せしむ翌日清涼殿に宴し秋思の詩を賦せしむ(續通鑑)○十月三善清行書を菅原道真に呈して勇退を勸む(續通鑑)○三善清行明年辛酉革命の議を上る(續通鑑・紀畧・扶桑畧記)

三

900

一五六一

延喜 元 辛酉

○正月右大臣右大將菅原道真を貶して大宰權帥と爲す(紀畧・扶桑畧記・續通鑑)  
 ○二月文章博士三善清行菅原道真左遷に關し其門弟子を連座放逐せざらんことを請ふ(本朝文粹)○五月三善清行再び辛酉革命の文並に封事を上る(續通鑑)  
 ○八月藤原時平大藏善行等三代實錄五十卷を上る(續通鑑・三代實錄序・紀畧)  
 ○九月重陽の宴に群臣をして壽星南極見の詩を賦せしむ(續通鑑)菅原道真宰府に在りて去年今夜の詩を作る(續通鑑)北堂に於て史記竟宴有り各詠史詩を賦

天復元

901



一五六二	二 戌壬	○正月内宴群臣をして魚上氷の詩を賦せしむ(續通鑑) ○三月天皇史記を讀む(續通鑑) ○八月釋奠(續通鑑) ○九月重陽に群臣を宴し霜葉辭條下の詩を賦せしむ(續通鑑) 皇姪清平(是忠親王子)文章生に擧げらる(續通鑑) 盡日群臣を宴し惜殘菊の詩を賦せしむ紀長谷雄序を作る(續通鑑) ○十月秀才を召して詩を試み山無隱士を以て題と爲し每句後漢の逸人の名を用ひしむ藤原博文藤原諸蔭及第す(續通鑑) ○是歲小野美材卒美材書を善し又文才あり帝群書治要を讀む時美材侍讀せり(日史・續通鑑)	二	902
一五六三	三 亥癸	○正月群臣を仁壽殿に宴し殘雪間梅の詩を賦せしむ(續通鑑・紀畧) ○二月菅原道真卒年五十九(公卿補任・紀畧・日史) ○八月文章生藤原諸蔭に勅して漢書を藏人所に講ぜしむ(續通鑑) ○九月重陽に群臣を宴し玉砌蘭の詩を賦せしむ(續通鑑) 朝鮮 ○新羅孝恭王六 ○渤海哀王二 ○三月金文蔚前に唐に入りて及第し今册命使に充てられて還る(三國史記)	三	903

一五六四	四 子甲	○正月内宴群臣をして花伴玉樓人の詩を賦せしむ(續通鑑・紀畧) ○二月群臣を常寧殿の花下に宴し詩文を作らしむ(續通鑑) ○三月大學頭藤原弘蔭卒(續通鑑) ○八月釋奠聰子内親王の病に依り宴座を停む(續通鑑) ○大學寮日本紀尙復を差進む(紀略・續通鑑) 大學頭藤原春海日本紀を講ず(紀略・續通鑑) ○九月重陽群臣を宴し秋菊兼糗糧の詩を賦せしむ(紀略・續通鑑) ○是年藤原春海延喜四年記若干卷を撰す(續通鑑) 式部卿是忠親王大學別當を兼ね四道博士を襲す(續通鑑)	二	905
一五六五	五 丑乙	○正月群臣を仁壽殿に宴し春生梅柳中の詩を賦せしむ(續通鑑) 法皇大覺寺に幸して採菜の遊を爲し扈從の臣をして詩を獻せしむ(續通鑑) ○四月紀貫之古今和歌集二十卷を撰進す(續通鑑) ○八月釋奠翌日天皇南殿に御し儒臣をして經義を討論せしむ(續通鑑) ○九月藤原時平東宮直廬に陪し籬邊有殘花の詩を賦す(續通鑑) ○十二月大學寮北堂に漢書の竟宴有り各詩を賦す(續通鑑)	二	905
一五六六	六 寅丙	○正月法皇大覺寺に幸し大學生二十餘人を召して宴を賜ひ詩を賦せしむ是の日大雪(續通鑑) 群臣を仁壽殿に宴し春風散管絃の詩を賦せしむ(續通鑑) ○五月天皇始めて史記を讀む藤原菅根侍讀す(續通鑑) ○九月重陽群臣を宴し萸佩の詩を賦せしむ(續通鑑) 法皇文人を召して洞花秋欲落の詩を賦せしむ(續通鑑) ○十月藤原春海日本紀を講了す(續通鑑) ○閏十二月日本紀竟宴を設け群臣をして和	三	906



一五六七	七卯丁	歌を詠せしむ(續通鑑) ○正月内宴文章博士三善清行題を獻す(續通鑑)○二月皇太子嫡の喪有り明法博士惟宗善經の議に従ひて喪に服せず(續通鑑)○六月皇太后藤原溫子崩す天皇錫紵を服する三日廢朝五日(續通鑑)○八月明經博士を南殿に召して經義を討論せしむ(續通鑑)○九月重陽群臣を宴し霓裳羽衣の詩を賦せしむ(續通鑑)法皇文人を召して眺望九詠を賦せしむ(續通鑑)盡日法皇宴を開き遊殘菊花下の詩を賦す(續通鑑)○是歲藤原時平延喜格十二卷を撰進す(延喜格序・續通鑑)	五代梁太祖開平元	907
一五六八	八辰戊	○正月群臣を仁壽殿に宴し曉鶯啼宮樹の詩を賦せしむ(續通鑑)○六月領客使藤原博文宴を鴻臚館に設けて渤海の使人裴璆を餞し各詩を賦す擬文章生大江朝綱序を作りて文名を著はず時に年二十四(續通鑑)○八月釋奠(續通鑑)詔して舉士を試む三統理平鳥獸言語の間を設く菅原淳茂及第す(續通鑑)○十月從四位下藤原菅根卒年五十四侍讀の勞を嘉して從三位を賜る菅根又延喜格を與り撰す(紀畧・延喜格序・續通鑑)○十二月延喜格を天下に布行す(續通鑑)	二	908
一五六九	九巳己	○二月丁酉日食廢務により釋奠を延引す(扶桑略記)○四月藤原時平卒年三十九時平和歌を善くし學を好み延喜の初詔を奉じて三代實錄五十卷延喜格十二卷	三	909

一五七〇	一〇午庚	○是歲崔彥擣唐より還る(三國史記・高麗史) ○正月群臣を仁壽殿に宴し春風扇微和の詩を賦せしむ(續通鑑)○十月藤原諸蔭漢書を講了す宴を藏人所に設く(續通鑑)	四	910
一五七一	一一未辛	○正月紀長谷雄を中納言と爲す(續通鑑)○六月法皇侍臣を亭子院に召して酒を賜ひ紀長谷雄をして其の事を記せしむ(續通鑑)霖雨紀長谷雄苦雨賦を作る(續通鑑)○九月重陽の宴を設け群臣をして日色明遠空の詩を賦せしむ(續通鑑)○十月皇太子(崇象)始めて御注孝經を讀む(紀畧・續通鑑)○十二月大學寮音書竟宴を設く(續通鑑)	乾化元	911
一五七二	一二申壬	○正月内宴雪盡草芽生の詩を賦せしむ(續通鑑)○二月紀長谷雄卒年六十八長谷雄文章博士大學頭となる文藻の富贍一世に冠たり(紀畧)釋奠を延引す(紀畧)○九月重陽の宴を設け群臣をして爽籟驚幽律の詩を賦せしむ(續通鑑)	二	912



天皇紀元	年號	支干	事	實	支	那	曆	
一五七三	一三	酉癸	○正月内宴群臣をして何處春光到の詩を賦せしむ(續通鑑) ○二月釋奠(紀略・續通鑑) ○五月諸道の得業生文章生を課試す(續通鑑) ○八月丁丑釋奠翌日南殿に出御博士を召して經義を討論せしむ(紀略・續通鑑) ○十月法皇王卿文士を亭子院に宴し菊潭水自香の詩を賦せしむ(續通鑑) ○冬三善清行詰眼文を作る(續通鑑) ○是歲大學頭兼山城守菅原高規卒年三十八高規は道眞の長子なり(續通鑑)				未帝乾化三	913
一五七四	一四	戌甲	○二月公卿大夫方伯牧宰に詔して讜議を進め謀謀を盡さしむ(三善道行意見封事) ○四月式部大輔三善清行意見封事十二條を上る其の四に於て大學の舊制を復し大學生に食料を加給せんことを請へり(續通鑑・本朝文粹・日史) ○九月重陽宴を設け群臣をして露重菊花鮮の詩を賦せしむ(續通鑑)			四		914
一五七五	一五	亥乙	○正月内宴春生曉籌中の詩を賦せしむ(續通鑑) ○九月朱雀院に行幸して學生を試む(日史)		貞明元		915	
一五七六	一六	子丙	○七月博士八多貞紀春秋穀梁傳を大學寮都堂に講ず(紀畧・續通鑑) 七夕文士を召して星橋度雲衣の詩を賦せしむ(續通鑑) ○九月重陽宴を設け群臣をして寒雁識秋天の詩を賦せしむ大江朝綱序を作る(續通鑑) 文章生を召して宴を賜ひ木落		二		916	

一五七七	一七	丑丁	洞庭波の詩を賦せしめ且擬文章生を召して高風送秋六韻の詩を試みる及第する者六人(續通鑑)			三	917
一五七八	一八	寅戊	○正月内宴半開花の詩を賦せしむ(續通鑑) ○二月釋奠(續通鑑) ○三月觀櫻の宴を常寧殿に設け大内記三統理平及び藤原諸蔭橘正信文章生春淵良規坂上恒蔭藤原高樹等を召して春夜翫櫻花の絶句を賦せしめ綿を文人に賜ふ(續通鑑) ○四月右少將藤原伊衡に勅して累代書二百卷を宜陽殿に納れしむ是の書先に出して之を補訂謄寫して御書所に藏せしが今元本を還納せしめしなり(續通鑑) ○九月法皇文士を朱雀院に召し林池秋景の詩を賦せしむ(續通鑑) 重陽の宴を設け秋露如珠の詩を賦せしむ(續通鑑) ○十一月宗岡秋津試を奉じて登第す天皇書を賜ひて之を褒す(續通鑑)			四	918



天皇紀元年號支干	事	實	支那	曆西
一五七九	一九己卯	<p>鑑)○是歲東宮學士紀淑望等古今集の漢文序を作れり(續通鑑)</p> <p>朝鮮 ○新羅景明王元 ○高麗太祖元 ○渤海哀王一七</p> <p>○六月高麗の隱士朴儒來り見ゆ(高麗史)儒は海州の人經史に通ず初め弓裔に仕へしが裔の政亂るゝを見て出家山谷に隱る高麗太祖の即位を聞きて來り見ゆ太祖禮待し姓を王とを賜ふ(本傳)</p> <p>○正月群臣を仁壽殿に宴し和風初著抄の詩を賦せしむ(續通鑑)○十二月勸學院宴を設けて藤原忠平の四十の算を賀す(續通鑑)</p> <p>朝鮮 ○新羅景明王二 ○高麗太祖二 ○渤海哀王一八</p> <p>○九月吳越國の文士曾彦規高麗に來り投ず(高麗史)</p>	五	919
一五八〇	二〇庚辰	<p>○五月渤海使人裴璆歸國す文士詩を賦して之を餞し紀在昌序を作る(續通鑑)○六月藤原道明卒年六十五道明寬平中文學を以て進み大納言右大將に至る(公卿補任・紀略・日史)</p> <p>○九月重陽の宴に群臣をして秋菊有佳色の詩を賦せしむ(續通鑑)○十月空海に弘法大師と勅諡す(續通鑑)○十一月皇孫慶賴生る天皇孝經論語及び絹綿等を賜ふ(續通鑑)</p>	六	920
一五八一	二二辛巳	<p>○九月重陽の宴に群臣をして秋菊有佳色の詩を賦せしむ(續通鑑)○十月空海に弘法大師と勅諡す(續通鑑)○十一月皇孫慶賴生る天皇孝經論語及び絹綿等を賜ふ(續通鑑)</p>	龍徳元	921

天皇紀元年號支干	事	實	支那	曆西
一五八二	二二壬午	<p>○正月群臣を仁壽殿に宴し氷開春水暖の詩を賦せしむ(續通鑑)</p>	二	922
一五八三	延長元癸未	<p>○三月大學寮北堂に漢書竟宴有り各詠史詩を賦す紀在昌序を作る(通鑑)○四月菅原道眞の官爵を追復し且正二位を贈る(續通鑑)○七月皇子寬明親王(朱雀天皇)降誕明經紀傳の博士をして七ヶ月御湯殿に伺候せしめ千字文漢書孝經史記毛詩左傳等を讀誦せしむ(御産部類記)○八月十四日伊勢奉幣使の齋に依り釋奠の三牲は其の代を進むることす(西宮記)</p> <p>朝鮮 ○新羅景明王六 ○高麗太祖六 ○渤海哀王二二</p> <p>○六月吳越國の文士朴巖高麗に來り投ず(高麗史)</p> <p>○正月式部權大輔大學頭兼文章博士菅原淳茂卒(續通鑑)○二月式部權大輔大江千古卒千古對策及第し且詩歌を善くす(日史・續通鑑)</p>	唐莊宗同光元	923
一五八四	二甲申	<p>○五月橘公統史記を北堂に講ず(續通鑑)○十二月諸國に促して風土記を上らしむ(續通鑑)</p>	二	924
一五八五	三乙酉	<p>○二月文人を召して櫻花宴を開き花房紅狎獵櫻繁春日斜の二詩を賦せしむ(續通鑑)○五月僧寬建唐の五臺山に登るを請ふ黄金百兩を賜ひ且菅原道眞橘廣相都良香紀長谷雄四人の家集及小野道風の書卷を携行きて唐人に示さしむ(續通鑑)○七月式部省試及第者三人(續通鑑)○九月重陽宴に文人をして折花香盈把</p>	三	925
一五八六	四丙戌	<p>○二月文人を召して櫻花宴を開き花房紅狎獵櫻繁春日斜の二詩を賦せしむ(續通鑑)○五月僧寬建唐の五臺山に登るを請ふ黄金百兩を賜ひ且菅原道眞橘廣相都良香紀長谷雄四人の家集及小野道風の書卷を携行きて唐人に示さしむ(續通鑑)○七月式部省試及第者三人(續通鑑)○九月重陽宴に文人をして折花香盈把</p>	明宗天成元	926



天皇紀元	年號	支干	專	實	支	那	曆西
一五八七	五亥丁		<p>の詩を賦せしむ(續通鑑) 盡日天皇清涼殿前に菊を賞し宴を設け籬菊有殘花の詩を賦す(續通鑑) ○是歲三統理平卒年七十四理平文章博士となり詩を善くす又三代實錄延喜格を撰ぶに與る(日史)</p> <p>○八月式部大輔文章博士藤原文貞卒年六十二(續通鑑) ○九月重陽宴群臣をして秋日無私照の詩を賦せしむ(續通鑑) ○十一月藤原忠平等延喜式五十卷を撰進す(續通鑑) 先に時平延喜格を奉り未だ式に及ばずして卒す忠平遺業を繼ぎ此に於て成る</p>			二	927
一五八八	六子戊		<p>○正月群臣を仁壽殿に宴し晴添草樹光の詩を賦せしめ大江朝綱序を作る(續通鑑) ○六月小野道風をして中朝歷代聖主賢臣の德行を清涼殿の南廂の粉壁に書せしむ(續通鑑) ○十二月大内記大江朝綱をして詩を御屏の書圖に題せしめ小野道風をして之を書せしむ(續通鑑)</p>			三	928
一五八九	七丑己		<p>○正月内宴群臣をして停盃看春色の詩を賦せしむ(續通鑑) ○七月文章博士橘公統卒(續通鑑) ○九月式部大輔文章博士藤原博文卒(續通鑑) 巨勢金岡に詔して漢土歴世の賢佐功臣及び鴻儒文人三十二人の像を紫宸殿の障子に畫かしめ小野道風をして其の名を圖傍に題せしむ所謂賢聖障子是なり(續通鑑) ○是歲橘敏通文</p>			四	929

朱雀

天皇紀元	年號	支干	專	實	支	那	曆西
一五九〇	八寅庚		<p>章生に補せらる(續通鑑)</p> <p>○二月皇太子孝經を讀む東宮學士藤原元方侍讀す(續通鑑) ○九月天皇崩す壽四十六天皇學を好み詩文を作り其の詩句朗詠集に入る又御記若干卷あり(續通鑑)</p> <p>○十一月朱雀天皇即位</p> <p><b>朝鮮</b> ○新羅敬順王三 ○高麗太祖一三</p> <p>○十二月高麗王西京に幸し學校を創置し秀才廷綽に命じ書學博士と爲し六部の生徒を聚めて之を教へしむ頗る興學の效あり繪帛を賜ふ(高麗史・東國通鑑)</p>			長興元	930
一五九一	承平元	辛卯	<p>○七月宇多法皇崩す壽六十五天皇錫貯を服す(續通鑑)</p>			二	931
一五九二	二辰壬		<p>○正月内宴群臣をして聖化萬年春の詩を賦せしむ(續通鑑) ○二月成明親王孝經を文章博士大江維時に受く(紀畧・續通鑑) ○八月丁巳釋奠(貞信公記)</p> <p><b>朝鮮</b> ○新羅敬順王五 ○高麗太祖一五</p> <p>○十一月高麗の崔凝卒年三十五熙愷と諡す後太祖の廟庭に配享す(東國通鑑)</p>			三	932
一五九三	三巳癸		<p>○八月行明親王孝經を左少辨藤原元方に受く(續通鑑) 是歲菅原文時文章生に補せらる(續通鑑)</p>			四	933
一五九四	四午甲				後帝清泰元		934
一五九五	五未乙		<p>○正月群臣を仁壽殿に宴し鬮聲遠逐風の詩を賦せしむ(續通鑑) ○十月菊宴式部</p>			二	935



天皇紀元年號支干	事	實支那曆西
一五九六 六丙申	○十二月天皇宜陽殿に御し日本紀を講ずるを聴く既にして竟宴を設く(續通鑑) ○正月群臣を仁壽殿に御し春可樂の詩を賦せしむ(續通鑑)○十一月右大臣藤原恒佐大學別當を兼ね(續通鑑)	晉高祖天福元 936
一五九七 七酉丁	○正月内宴花柳遇時春の詩を賦せしむ(續通鑑)	937
一五九八 元戌戊	○正月内宴花柳遇時春の詩を賦せしむ(續通鑑) 朝鮮 ○高麗太祖二一 ○太祖崔承老を召見す時に年十二論語を讀ましめて甚だ之を嘉す是より委ぬるに文柄を以てす(本傳)	938
一五九九 二亥己	○六月孝經竟宴を設く(續通鑑)○十月文章博士大江維時文選を講じ畢る(續通鑑)○十一月天皇始めて史記を讀む(日史)	939
一六〇〇 三子庚	○十月菊花宴を設け群臣をして詩歌を獻ぜしむ(續通鑑)○十二月源英明卒英明學を好み詩文を能くし源氏小草五卷を著す(續通鑑)	940

一六〇一 四丑辛	○二月釋奠宴座を止む(江家次第)○三月天皇承香殿の花下に宴し群臣をして花樹暮雲深の詩を賦せしむ(續通鑑)大學寮北堂に文選竟宴を設く文人詩を賦し菅原文時序を作る(續通鑑)	941
一六〇二 五寅壬	○二月釋奠上皇の御惱により宴座なし(江家次第)○三月公卿大夫儒官に詔して封事を上らしむ(續通鑑)○是歲菅原文時對策及第す(續通鑑)	942
一六〇三 六卯癸	○正月群臣を綾綺殿に宴し花間訪春色の詩を賦せしむ(續通鑑)○六月諸博士を宜陽殿に召して經義を討論せしめ且學生に詔して詩を獻ぜしむ(續通鑑)大學頭藤繁時卒繁時文章博士式部大輔に歷任せり(續通鑑)○八月釋奠參議伴保平藤原衡大學寮に就きて事を行ふ凡そ釋奠納言を上卿とするは例也納言支障あれば則ち參議之に代る亦例なり(續通鑑)明日伊勢奉幣の事により三牲は魚を以て代進せしむ(北山抄)○十二月文章博士矢田部公望日本紀を講じ畢る竟宴を宜陽殿に設け文人を召して詩歌を獻せしむ大内記藤原幹序を作る(續通鑑)	943
一六〇四 七辰甲	○三月參議藤原在衡式部大輔を兼ね(續通鑑) 朝鮮 ○高麗惠宗元 ○十二月崔彥擣卒す文英と諡す太祖太子の師傅と爲し委ぬるに文翰の任を以てす一時の貴遊皆之に師事す(高麗史)	出帝開運元 944



天皇紀元	年號	支干	事	實	支	那	曆西
一六〇五	八巳乙	支干	○是年皇太弟日觀集二十卷を撰し小野篁以下十人の詩を集め大江維時をして序を作らしむ(續通鑑)		二		945
一六〇六	九午丙	支干	○三月丁丑釋奠前月穢有りて延期せしなり(續通鑑・紀略後篇) ○四月天皇讓位村上天皇即位		三		946
一六〇七	天曆元 未丁	支干	○正月天皇綾綺殿に内宴し親王公卿文人をして花氣染春風鶯聲韻管絃の詩を賦せしむ菅原文時鶯聲韻管絃詩序を作る花氣染春風詩序は傳はらず作者亦不詳(續通鑑) ○二月釋奠(紀略後篇) ○八月釋奠翌日諸博士を南殿に召し經義を討論せしむ(續通鑑) ○九月勸學院の椎木自ら折る(續通鑑) 始めて天滿宮を北野に建つ(續通鑑) ○十二月文章生數十人を省試す(續通鑑)	漢高祖天福元			947
一六〇八	二申戊	支干	○正月上皇群臣を馬場殿に召し紅梅の詩を賦せしむ(續通鑑) ○二月釋奠(紀略・續通鑑) 式部丞藤原清雅勸學院別當に補す(續通鑑) ○五月諸博士を宜陽殿に召す(續通鑑) ○六月省試文章生數十人を召して吳天降豐澤詩を試む既にして及第(東國通鑑)	朝鮮	乾祐元		948

○高麗定宗二

○二月是より先き崔胤契丹に虜にせられ才を以て用ひらる契丹の將に高麗を侵さんとするを知り書を爲りて之を報ぜり是に於て定宗命じて光軍司に置く

する者十五人(續通鑑) ○八月釋奠(續通鑑) ○是年橘直幹文章博士となる(日史)

一六〇九	三酉己	支干	○二月釋奠(續通鑑) ○三月上皇宴を二條院に設け親王公卿及式部大輔大江維時左中辨大江朝綱文章博士橘直幹大内記菅原文時等文人二十二人を召し落花亂舞衣の詩を賦せしむ大江朝綱序を作る(續通鑑) 天皇文士を仁壽殿に宴す(續通鑑) 文人を召して花鳥送春の詩を獻せしむ是日藏人所の尙書の講畢る宴を博士直講學生等に賜ふ(續通鑑) ○四月藤花宴を飛香舎に設け群臣をして樂を奏し詩歌を賦せしむ大江維時題を獻す(續通鑑) ○八月藤原忠平卒年七十忠平延喜式五十卷を撰進す(日本紀略・榮花物語・日史) 釋奠(續通鑑) ○十月文章博士紀在昌に詔して史記を講ぜしむ(續通鑑) ○十一月省試明史官辨山水の二題を標す文章得業生大江澄明辨山水を得て及第す(續通鑑) ○十二月大江朝綱に詔して坤元録を撰せしむ(續通鑑) 巨勢公忠に御屏に設色せしめ大江朝綱橘直幹菅原文時に各二十首の詩を題せしめ大江維時之を選定して二十首と爲し小野道風之を書す(續通鑑)	隱帝	二		949
一六一〇	四戌庚	支干	○二月式部大輔大江維時參議に任ぜらる(續通鑑) ○十月菊宴を開き博士文人を召して詩を賦せしむ(續通鑑) ○十二月省試衣無異禮を以て題と爲す(續通鑑) ○十二月源保光文章生に補せらる(續通鑑)		三		950



天皇紀元年號支干 實 支 那 曆西

一六二七	天德元巳丁	四	957
一六二五	九卯乙	二	955
一六二四	八寅甲	世宗顯德元	954
一六二三	七丑癸	三	953
一六二二	六子壬	二	952
一六一一	五亥辛	元周太祖廣順	951

○十月菊花宴王公卿相文人を召して詩を賦せしむ(續通鑑)

○二月釋奠に宴座を撤す上皇不豫の爲なり(續通鑑)

○七月吳越王錢弘使人蔣承勳をして書を右大臣藤原師輔に呈せしむ(續通鑑) ○九月左大辨大江朝綱參議に任ぜらる(續通鑑) ○十二月三善道統登第す(續通鑑)

○七月大内記菅原文時等に勅して封事を上りて闕政を言はしむ(日史) ○八月文章博士橘直幹民部大輔を兼ねるを請ふ之を聽す(續通鑑)

○九月菅原文時藤原實頼の爲に左大將の辭表を草し文名喧傳す(續通鑑)

○三月皇太子始て書を讀む(續通鑑) ○八月藏人所の學生を弓場殿に召し題を賜ひて之を試む(續通鑑) ○是歲菅原文時其子惟熙に學問料を賜はらんことを請ふ之を許す(本朝文粹・續通鑑)

朝鮮 ○高麗光宗七 ○是年周の前大理評事雙冀來る擢んでて文柄を授く(高麗史・東國通鑑)

○二月釋奠(續通鑑・紀略) ○七月吳越王錢俶の使盛德言來る(續通鑑) ○八月釋奠(續通鑑・紀略) ○十月式部省文章生を試み河水清正潔の詩を賦せしむ(續通鑑) 殘菊宴を設け寒菊吐餘芳の詩を賦せしむ(續通鑑) ○十二月大江河朝綱卒年七

十二朝綱博學能文又書に巧なり嘗て勅を奉じて新國史四十四卷を撰して宇多醍醐朱雀三朝の事を録せり(紀略・續通鑑)

朝鮮 ○高麗光宗九 ○五月高麗始めて雙冀を用ひ科擧を置かんことを議す試むるに詩賦頌及び時務策を以てして進士を取る此より文風乃ち興る(高麗史・東國通鑑)

○二月釋奠(續通鑑・紀略) 内宴群臣に春花珠萬顆の詩を獻ぜしむ式部權大輔藤原國光序を作る(續通鑑) 曲水宴天皇春晚紅桃色の詩を賦し群臣奉和す(續通鑑) 文士を秘書閣に召し春被鶯花送の詩を賦せしむ(續通鑑) ○五月藻壁門扁額の字減す小野道風をして之を書せしむ(續通鑑) ○七月七夕宴天皇風驚織女秋の詩を賦し群臣之に奉和す(續通鑑) ○八月釋奠(紀略・續通鑑) 文人をして各詩十首を獻ぜしめ之を左右に分ちて大江維時をして其の優劣を判ぜしむ之を詩合といふ(續通鑑) ○十月殘菊宴群臣をして寒花低岸菊風飄舞袖廻の兩題を賦せしむ(續通鑑) ○十二月勸學院學生宴を設けて左大臣藤原實頼の六十壽を賀す(續通鑑)

朝鮮 ○高麗光宗一〇

一六一八	二午戊	五	958
一六一九	三未己	六	959



天皇紀元年號支干 事 實 支 那 曆西

一六二〇	四申庚	○是歲秋使を遣して周に如き別序孝經一卷越王孝經新義八卷皇靈孝經一卷孝經圖三卷を進む(高麗史) ○二月釋奠(續通鑑)○三月始めて清涼殿に歌合を行ふ(日史)爲平親王御註孝經を菅原文時に受く事畢りて宴を設け詩を賦す藤原俊生序を作る(續通鑑)○七月七夕宴月扇動涼風の詩を賦せしむ(續通鑑)○八月釋奠翌日諸博士論議す(續通鑑)○九月勸學院廳火く(續通鑑)○十月大學南堂東曹火く(續通鑑)	宋太祖建隆元	960	
一六二二	應和元 西辛	○二月釋奠(續通鑑・紀略) 御遊花落桃源の詩を賦す(續通鑑)天皇觀櫻宴を釣殿に設け才士五十人(四位五人五位十四人六位四人文章得業生二人文章生三人擬文章生二十人學生二人)を召して花光水上浮の詩を賦せしむ菅原文時序を作る別に流鶯遠和琴の詩を試む(續通鑑)○三月文章博士に詔して擬文章生等の流鶯遠和琴の詩を評論せしむ及第する者十一人(續通鑑)○五月治部少丞藤原扶明を勸學院別當に補す(續通鑑)○七月侍臣をして別路動雲衣の詩を賦せしむ(續通鑑)○八月釋奠(續通鑑・紀略) ○十月群臣をして寒葉隨風散の詩を賦せしむ(續通鑑)松經霜後貞の詩を賦して群臣に賜ふ(續通鑑)○十一月天皇池邊初雪の詩を賦す(續通鑑)○十二月右少將藤原高光官を辭す高光嘗て村上天皇の詔を奉じ		二	961

一六二二 二戊壬 乾德元 962

一六二二	二戊壬	て文選三都賦序を誦誦して歡感を辱うせり(續通鑑) ○二月釋奠(續通鑑・紀略) 内宴風柳散輕絲の詩を賦す(續通鑑)○三月上巳侍臣に詔して仙桃夾岸開の詩を賦せしむ(續通鑑)○四月侍臣に命じ夢吐白鳳の詩を賦せしむ(續通鑑)○五月群臣を釣殿に宴し五月水聲寒の詩を賦せしむ(續通鑑)○六月學生を召して詩を試み穀倉院學問料を賜ふ(續通鑑)○七月七夕群臣を宴し織女渡天河の詩を賦せしむ(續通鑑) ○八月侍臣に命じて秋色寄高樹の詩を賦せしむ(續通鑑)釋奠(續通鑑・紀略) ○九月文章得業生藤雅材對策及第す(續通鑑) ○十二月學生等五人を召して詩を試む(續通鑑)閏十二月源氏王卿大納言高明等の申請により勸學院藤氏學生の除目任官に獎學院の源氏學生學館院の橘氏學生を加へて三院年舉となす(江次第抄)		三	962
一六二三	三亥癸	○二月釋奠(續通鑑・紀略) 内宴庭花曉欲開の詩を賦す(續通鑑)○三月天皇花を釣殿に賞し風來花自舞の詩を賦す(續通鑑)○四月文人を召して風雲夏景新の詩を賦せしむ(續通鑑)○六月大江維時卒年七十六維時博聞強記經史を淹貫し文章博士大學頭式部大輔東宮學士に歴任し中納言に進めり嘗て千歲佳句一卷養生抄三卷を著せり家集を日觀集といふ(續通鑑・日史)○八月釋奠(續通鑑・紀略) 翌内論議あり博士等參入す御物忌に依り出御なし(紀略)○十月近臣をして菊花色	乾德元	963	



天皇	紀元	年號	支干	事	實	支	那	曆西
	一六二四	康保元	子甲	<p>淺深無風葉自飛の二詩を賦せしむ(續通鑑)○十二月大納言源高明狀を獻し獎學院源氏學生を以て勸學院藤氏に准し年俸を賜はんことを請ふ之を許す(續通鑑)</p> <p>○二月釋奠(續通鑑・紀略)橘仲遠に詔して日本紀を講せしむ(續通鑑)○三月盡日宴を設けて留春春不駐の詩を賦せしむ(續通鑑)○八月釋奠(續通鑑・紀略)○十一月橘好古の請に依り勅して學館院を大學寮の別曹と爲す(續通鑑・日史)</p>				964
	一六二五	二	丑乙	<p>○二月釋奠(紀略)○三月觀櫻宴群臣をして詩歌を詠じ管絃を奏せしむ少内記大江昌言序を作る(續通鑑)○六月侍臣を召して窓下有清風の詩を賦せしむ(續通鑑)○七月文人を召して雲衣含夕露の詩を賦せしむ(續通鑑)○八月橘仲遠をして日本紀を講せしむ(日史)釋奠(紀略・續通鑑)○十月天皇朱雀院に幸して文人四十餘人を召し霜葉滿林紅の詩を賦せしめ又藏人所に詔して詩を試みしめ飛葉與舟輕を以て題と爲し澄陵永興の四字を韻と爲さしむ式部丞橘倚平及第す天皇又御問を設けて文人を試む藤原雅材對策す(續通鑑)○十二月菅原文時學問料を其の子輔昭に賜はんことを請ふ(續通鑑)式部大輔橘直幹梅一株を獻す詔して之を仁壽殿東庭に植ゑしむ(直幹の事此の後所見無し卒年亦詳ならず故に此に記す)(續通鑑)</p>				965

天皇	紀元	年號	支干	事	實	支	那	曆西
	一六二六	三	寅丙	<p>○二月釋奠(續通鑑)○三月曲水宴三月桃花浪の詩を賦せしむ(續通鑑)○八月釋奠(續通鑑)守平親王孝經を弘徽殿に讀み宴を設け詩を賦せしむ藤原篤茂序を作る(續通鑑)○十月八日式部省文章生試験停止「古今未曾有事也」といふ(紀略)○十二月内藏頭小野道風卒年七十一道風書を善くす三蹟の一(紀略・日史・續通鑑)圓融天皇始めて孝經を讀む(日史)</p>				966
冷泉	一六二七	四	卯丁	<p>○二月釋奠(續通鑑)櫻花宴群臣をして日照花影添の詩を賦せしむ(續通鑑)○五月天皇崩○十月冷泉天皇即位</p>				967
	一六二八	安和元	辰戊	<p>○正月延喜式を印するを許す(續通鑑)○六月省試(續通鑑)○八月釋奠(續通鑑)</p>	開寶元			968
圓融	一六二九	二	巳己	<p>○三月大納言藤原在衡尙齒會を粟田山莊に設け酒を行ひ詩を賦す菅原文時序を作る(續通鑑)○五月學問料を學生藤原弘道に賜ふ(續通鑑)○八月釋奠(續通鑑)天皇讓位○九月圓融天皇即位</p>				969
	一六三〇	天祿元	午庚	<p>○二月釋奠(續通鑑・紀略)○五月藤原實賴卒年七十一實賴嘗て大江朝綱等と新國史を編す(續通鑑)○七月文章博士藤原俊生卒年六十二(續通鑑)文章生を召して詩を試み國安民治を以て題と爲す(續通鑑)○八月釋奠(續通鑑・紀略)</p>				970
	一六三一	二	未辛	<p>○正月内宴鸞吟宮柳深の詩を賦せしむ(續通鑑)○二月釋奠(續通鑑・紀略)○三月省試あり(續通鑑)○八月釋奠(續通鑑・紀略)</p>				971



紀元	年號	支干	事	實	支那	曆西
一六三二	三元	申壬	○二月釋奠(續通鑑・紀略)		五	972
一六三三	天延元	酉癸	○正月圖書頭兼丹波介藤原篤茂木工頭大内記淡路守に任ぜられんを請ふ(續通鑑) ○七月省試あり豊年至の詩を賦せしむ(續通鑑) ○八月釋奠(紀略)		六	973
一六三四	二元	戌甲	○二月釋奠(續通鑑・紀略) ○三月清涼殿花宴菅原文時等の文臣をして詩を賦せしむ菅原輔正序を作る(續通鑑) 上皇文人を冷泉院に召して隔花遙勸酒の詩を賦せしむ菅原輔昭序を作る(續通鑑) 晦群臣を宴し春色雨中盡の詩を賦せしむ(續通鑑) ○八月釋奠(續通鑑・紀略) ○十一月正四位下式部大輔兼文章博士菅原文時正三位に敘せられんことを請ふ(續通鑑)		七	974
一六三五	三元	亥乙	○二月釋奠(續通鑑) ○八月釋奠(續通鑑) ○十二月外記局の文書自ら焚く(日史)		八	975
一六三六	貞元元	子丙	○二月釋奠(續通鑑・紀略) ○三月盡日文人を召して詩を賦せしむ(續通鑑) ○八月釋奠(續通鑑・紀略) ○高麗景宗元	太宗太平興國元		976
一六三七	二元	丑丁	○十一月金行成を遣し宋に如きて國子監に入學せしむ遂に登科す(東國通鑑) ○二月釋奠(續通鑑・紀略) ○三月皇太子初て孝經を讀む菅原輔正侍讀す(續通鑑) ○七月新皇居成る藤原佐理をして諸門の額を書せしむ(續通鑑) ○八月釋奠		二	977

一六三八	天元元	寅戊	(續通鑑・紀略) ○二月釋奠(續通鑑・紀略) ○三月省試野無遺賢を以て題と爲す(續通鑑) ○八月釋奠(續通鑑・紀略)		三	978
一六三九	二元	卯己	○二月釋奠(續通鑑・紀略) ○八月左少辨菅原雅規卒年八十餘雅規は文時の兄なり(續通鑑)		四	979
一六四〇	三元	辰庚	○正月正四位下式部大輔菅原文時從三位に敘せられんことを請ふ(續通鑑) ○二月釋奠(續通鑑・紀略)		五	980
一六四一	四元	巳辛	○正月正四位下菅原文時從三位に敘す(續通鑑) ○二月釋奠(續通鑑・紀略) ○九月式部大輔兼文章博士菅原文時卒年八十四文時文才卓越大江朝綱と名を齊しくす(續通鑑)		六	981
一六四二	五元	午壬	○二月釋奠(續通鑑・紀略) ○五月文章得業生高階信順對策及第す(續通鑑) ○七月太宰大貳菅原輔正赴任す天皇宴を設け之を餞す侍讀の勞を著すなり(續通鑑) ○八月僧裔然入宋を請ふ之を許す(續通鑑) 釋奠(續通鑑・紀略) ○十一月僧裔然發京入宋す文人贈以言の詩を作りて之を餞す大内記慶滋保胤序を作る(續通鑑)		七	982
一六四三	永觀元	未癸	○二月釋奠(續通鑑・紀略) ○七月省試文章生をして蟋蟀待秋吟の詩を賦せしむ(續通鑑) ○八月釋奠(續通鑑・紀略) 皇姪爲尊親王敦道親王御註孝經を讀む菅原		八	983



天皇紀元年號支干 實支那 曆西

華山	一六四四	二申甲	資忠之を奉授す(續通鑑)○是歲源順卒年七十三順博學詩文和歌を善くし嘗て萬葉集に點し又倭名鈔二十卷を著す(續通鑑・日史) 朝鮮 ○高麗成宗二 ○五月博士任成老宋より至り大廟堂圖一鋪並に記一卷社稷堂圖一鋪並に記一卷文宣廟圖一鋪祭器圖一卷七十二賢贊記一卷を獻す(高麗史)	雍熙元	984
一條	一六四五	寬和 元酉乙	○二月釋奠(續通鑑・紀略) ○二月陰陽天文博士賀茂保憲卒家世陰陽天文の兩道を掌り保憲最も其の道に精なり(續通鑑) ○八月參議藤原佐理に詔して殿門の額を書せしむ是日佐理從三位に叙せらる(續通鑑) 天皇讓位 ○十月華山天皇即位 ○十二月公卿大夫秀才明經儒生に詔して封事を上らしむ(續通鑑)	二	985
一條	一六四六	二戌丙	○二月釋奠(續通鑑・紀略) ○八月釋奠(續通鑑・紀略) ○閏八月省試(續通鑑) ○四月大内記慶滋保胤僧と爲り名を寂心と改む保胤文章を以て名を著す(續通鑑) ○六月天皇讓位 ○七月一條天皇即位 ○八月釋奠(續通鑑・紀略) 僧裔然宋より歸る裔然の宋に至るや鄭氏註孝經一卷任希古孝經新義第十五卷を携ふ宋人傳寫せり此の行裔然印本大藏經五千四十八卷を得て歸る(續通鑑) ○十月圓融法皇大井河に幸し詩歌管絃三船の遊を爲す水邊紅葉を以て題となし菅原資忠詩序を	三	986

一六四七	永延 元丁	○八月崔罕王琳を遣し宋に如きて入學せしむ(東國通鑑) 朝鮮 ○高麗成宗五 ○八月釋奠(續通鑑・紀略) ○九月兼明親王薨年七十四親王博學多才世に中書王と稱す(續通鑑) ○十月天皇東三條殿に宴し葉飛水面紅の詩を賦せしむ又擬文章生を召して池邊菊影鮮の詩を試む(續通鑑) ○十一月大江齊光卒年五十四(五十四通鑑五十三に作る) 齊光對策及第し東宮學士式部大輔に歷任し參議に至る(日史・續通鑑) ○是年宋人朱仁聰來る(續通鑑) 朝鮮 ○高麗成宗六 ○八月高麗十二牧經學博士一員を置いて以て諸生に教ふ(高麗史)	四	987
一六四八	二子戊	○二月釋奠(續通鑑・紀略)	端拱元	988
一六四九	永祚 元己丑	○八月釋奠(續通鑑・紀略) ○十月大内記菅原資忠卒年五十三資忠詩を善くし慶滋胤藤原爲時等と名を齊しくす(續通鑑) 朝鮮 ○高麗成宗八 ○四月大學助教宋承演羅州牧經學博士金輔仁を獎選す(高麗史) ○五月崔承老卒	二	989







一七五八	四 戊	<p>不善と爲し之を斥く朝議遂に決せず(續通鑑)○八月釋奠(續通鑑・紀略)○九月重陽宴文人をして菊是爲仙草の詩を賦せしむ(續通鑑)慶滋保胤卒保胤の家世陰陽を業とす保胤之を棄て文學に志し聲名あり(日史)○是歲紀齊名扶桑集を撰す收むる所は延喜より當代に至る七代の詩文なり(續通鑑)</p> <p>○二月釋奠(續通鑑・紀略)○七月藤原佐理卒年五十五書を善す(大鏡・紀略・公卿補任)○七月致仕式部大輔高階成忠卒年七十三(續通鑑)</p>	眞宗咸平元	98
一六五九	長保 元 己 亥	<p>○正月藤弘道を文章博士に任ず(續通鑑)○二月釋奠(續通鑑・紀略)○閏三月菅原輔正藤原實資等を菅廟に會し古廟春方暮の詩を賦す大江以言序を作る(續通鑑)○六月左衛門權佐惟宗允亮令を講じ詩を賦す大江以言序を作る允亮明法博士と爲り類聚判集百卷を著す(續通鑑)○八月釋奠(續通鑑・紀略)○九月藤原道長宇治別業に在りて詩を賦す藤原行成源孝道同賦す具平親王亦之に和す(續通鑑)内宴送秋筆硯中の詩を賦せしむ大江匡衡序を作る(續通鑑)○十月敦道親王文人を招きて以詩爲友の詩を賦せしむ大江匡衡序を作る(續通鑑)</p>	二	909
一六六〇	二 庚 子	<p>○二月釋奠(續通鑑・紀略)○八月釋奠(續通鑑・紀略)○十月藤原行成を正四位下に敘す殿門の額を書せしを賞するなり(續通鑑)○十月詩宴を開き燕雀相賀を以</p>	三	1000

一六六一	三 辛 丑	<p>て題と爲す大江匡衡序を作る(續通鑑)○十二月東宮の第一子敦明御註孝經を參議菅原輔正に受け文人を召して詩を賦せしむ式部大輔大江匡衡序を作る(續通鑑)</p> <p>○二月釋奠(續通鑑・紀略)○三月大江匡衡再び尾張守に任ぜらる兼式部大輔文章博士故の如し(續通鑑)○八月釋奠(續通鑑・紀略)</p>	四	1001
一六六二	四 壬 寅	<p>○二月諒闇に因りて釋奠を停む(續通鑑・紀略)○五月大江匡衡其の子能公の爲に學問料を請ふ(續通鑑)○十一月大學頭菅原爲紀卒年四十六(續通鑑)○十一月大江匡衡長男舉周の爲に藏人を請ふ(續通鑑)○是歲大江定基法師寂照入宋を請ふ之を許す明年寂照宋に入り眞宗に謁し五臺四明に遊び丁謂の厚遇を受く(續通鑑)慶滋保胤法師寂心卒(續通鑑)</p>	五	1002
一六六三	五 癸 卯	<p>○二月釋奠(紀略)○八月釋奠(紀略)○十一月藤原行成を正三位に敘す殿門の額を書するを賞するなり(續通鑑)</p> <p><b>朝鮮</b> ○高麗穆宗六</p> <p>○正月三京十道の博士師長をして生徒の才學あるものを獎勵し逐年薦舉せしむ(高麗史)</p>	六	1003
一六六四	寬弘 元 甲 辰	<p>○二月釋奠(紀略)○六月文人を召して詩を賦せしむ瑤琴治世聲を題となす(續</p>	景徳元	1004



天皇紀元年號支干	事	實	支	那	曆西
一六六五 二 巳乙	○二月釋奠(紀略)○三月三日御書所に於て詩會あり題に云く花貌年々同序は大 江匡衡之を作る(紀略)○七月七日御書所詩會題に云く織女雲爲衣大江以言序を 作る(紀略・續通鑑)弓場殿に於て學生九人を試む御書所衆二人闕くるによる(紀 略)○八月釋奠翌日内論議(記略)○十一月敦康親王飛香舍に於て初めて御注孝 經を讀む大江匡衡之を授け奉る又文人を召して詩を賦せしむ文章博士大江以言 序を作る(紀略・續通鑑)			二	1005
一六六六 三 午丙	○二月釋奠(續通鑑・紀略)○三月天皇藤原道長の東三條第より一條院に移る發 するに先ち詩宴を開き群臣をして渡水落花舞の詩を賦せしめ大江匡衡序を作る 此の日大江舉周を藏人と爲す(續通鑑)○八月釋奠(續通鑑・紀略)○十月文章生 を省試す(續通鑑)○十一月文章生を省試し芸始生を以て題と爲す(續通鑑)			三	1006
一六六七 四 未丁	○二月釋奠(續通鑑・紀略)文章生を省試す及第者十三人(續通鑑)文章博士大江 以言辨官の闕及び衛門權佐に兼任せられんことを請ふ(續通鑑)○三月藤原道長 曲水宴を開き因流泛觴を以て題と爲し大江匡衡をして序を作らしむ(續通鑑)○			四	1007

天皇紀元年號支干	事	實	支	那	曆西
一六六八 五 申戊	四月具平敦道の二親王及公卿文人人を召して宴を開き所貴是賢才の詩を賦せし む文章博士大江以言序を作る(續通鑑)○六月藤原頼通文人を招きて泉傳萬歲聲 の詩を賦せしむ大江以言序を作る(續通鑑)○八月釋奠(續通鑑・紀略)○九月重 陽宴文人をして菊映宮殿の詩を賦せしむ大江匡衡序を作る(續通鑑)				大中祥符元
一六六九 六 酉己	○正月參議菅原輔正參河守を兼ね(續通鑑)○二月菅原輔正參議を辭す(續通鑑) 釋奠(紀略・續通鑑)○三月藤原道長諸卿を率ゐて大學寮及び諸司を巡檢す(續通 鑑)○四月文章博士藤原弘道卒年五十八(續通鑑)大江匡衡周易を以て中宮(上東 門院彰子)の産を占す吉なり(續通鑑)○八月釋奠詩宴並に三道の論義なし此年 二月八日花山法皇崩御ありしによる(紀略・續通鑑)○九月中宮彰子皇子を生む 藏人辨藤原廣業帳外に候して史記帝紀を讀む(續通鑑)○十月大江匡衡勅を奉じ て新誕皇子の諱を敦成と勘進す(續通鑑)			二	1009



天皇紀元年號支干

天皇紀元年號支干	事	實	支	那	曆西
一六七〇 七戌庚	<p>朝鮮 ○高麗穆宗一二</p> <p>○八月柳邦憲卒邦憲儒學に長ず貞簡と謚す(東國通鑑)</p> <p>○二月釋奠(續通鑑・紀略) ○七月式部權大輔大江以言卒年五十六以言詩を善くし匡衡と並稱せらる(續通鑑)助教清原善澄盜に殺さる年六十八(續通鑑) ○八月釋奠し周易を講ず聖人養賢を以て題と爲す翌日天皇南殿に御し諸儒の論議を聽く(續通鑑・紀略) ○十一月天皇一條院新宮に移る道長細馬十正及び文選白氏文集等を献す(續通鑑)</p>				三
一六七二 八亥辛	<p>○二月釋奠上丁穢有り中丁に之を行ふ(續通鑑・紀略) ○四月文人を宴して早夏即事を賦せしむ(續通鑑) ○六月天皇讓位 ○七月藤原有國卒年六十九有國文を好み勘解由相公集若干卷有り子孫儒を業とす(續通鑑) ○八月釋奠此年六月二十二日一條天皇崩御により宴座なし(紀略) ○十月三條天皇即位</p>				四
一六七三 九子壬	<p>○七月侍從式部大輔大江匡衡卒年六十一匡衡一條帝の侍讀と爲り文章博士式部大輔東宮學士に歴任し嘗て勅を奉じて白氏文集に加點せり著す所江吏部集あり(續通鑑・紀略) ○十月大學頭文室如正式部大輔に兼任せられんことを請ふ(續通鑑) ○十一月藤原道長文人を宴し依醉忘天寒を以て詩題を爲す(續通鑑)</p>				五

三條

後一條

一六七三 二丑癸	<p>○二月釋奠(續通鑑) ○三月和漢朗詠集二卷成る藤原公任之を撰びて其の女婿藤原教通に贈れるもの(十訓抄・榮花物語・日史・續通鑑) ○八月釋奠(續通鑑)</p>				六
一六七四 三甲寅	<p>○二月釋奠(續通鑑・紀略) ○八月文章生を省試す(續通鑑) 釋奠(續通鑑) ○十一月東宮(敦成)參内讀書始の儀有り侍讀學士大江舉周御註孝經を奉授す(續通鑑)</p>				七
一六七五 四卯乙	<p>○二月釋奠(續通鑑・紀略) ○四月敦康親王詩宴を開き花殘春意駐を以て題と爲す(續通鑑) ○六月曆博士賀茂光榮卒年五十七光榮安倍晴明と能を争ひ終に曆道の祖と爲る(續通鑑) ○八月釋奠(續通鑑) ○十二月敦良親王始めて御註孝經を讀む式部大輔藤原廣業之を奉授す此の日文人を招きて詩を賦せしむ(續通鑑)</p>				八
一六七六 五辰丙	<p>○正月天皇讓位 ○二月釋奠(續通鑑) 後一條天皇即位 ○八月釋奠宴座なし此年七月京極院法興院等焼亡によりてなり(續通鑑・西宮記・紀略)</p>				九
一六七七 元巳丁	<p>○二月釋奠(續通鑑・紀略) ○八月敦良親王を皇太弟とす勸學院學生東宮に參賀す(續通鑑) 釋奠(續通鑑・紀略) ○十二月勸學院學生藤原道長の太政大臣任官を賀す(續通鑑)</p>	天禧元			1017
一六七八 二午戊	<p>○二月釋奠(續通鑑) ○三月上巳宴桃爲岸上霞を以て題と爲す(續通鑑) ○八月釋奠(續通鑑) ○十月勸學院學生立后を賀す(續通鑑) 天皇道長の上東門院新第に行幸して走馬を覽後文人をして經霜知菊性の詩を賦せしめ式部大輔藤原廣業序を</p>				二



一六八二	二 戌 壬	乾興元	1022
一六八一	三 亥 癸	仁宗天聖元	1023
一六八〇	四 申 庚		1020
一六七九	三 未 己		1019
一六八二	治安 元 辛 酉		1021

作る又擬文章生を召して翠松無改色の詩を試み諸儒をして之を判ぜしむ及第する者十四人(續通鑑・紀略)○十二月天文博士安倍晴明卒年八十五晴明天文學に明に子孫業を世にす(續通鑑)

○二月釋奠(紀略)○八月釋奠宴座あり儒士文人多く不參詩は四五枚なり(紀略)○九月重陽宴に文人を芸閣に召して菊嫩戒霜輕の詩を賦せしむ(續通鑑)○十月藤原道長文人を宇治の別業に招き漁火知夜永の詩を賦せしむ(續通鑑)

○正月東宮學士藤原廣業正四位上に敘す(續通鑑)大江時棟を出羽守に任ず(續通鑑)○二月釋奠(紀略)○八月釋奠講論宴座穩座等の式あり(左經記)○十月僧仁統明年辛酉革命の勘文を上る(續通鑑)○十一月式部大輔藤原廣業を參議に任ず(續通鑑)

○八月新羅の崔致遠に内史を追贈し先聖の廟庭に從祀せしむ(高麗史)

○正月諸道博士に勅して今年の辛酉革命を勘へ年號の字を撰せしむ(續通鑑)○二月諸道博士を召して改元の事を議せしむ決せず(續通鑑)釋奠(續通鑑・紀略)○七月七夕宴に織女契涼風を賦せしむ(續通鑑)○八月釋奠(續通鑑・紀略)

一六八二	二 戌 壬	乾興元	1022
一六八一	三 亥 癸	仁宗天聖元	1023
一六八〇	四 申 庚		1020
一六七九	三 未 己		1019
一六八二	治安 元 辛 酉		1021

二月釋奠(續通鑑・紀略)○八月藤原道長文人を上東門の第に招き池水浮秋景の詩を賦せしめ文章博士善滋爲政序を作る(續通鑑)釋奠(續通鑑・紀略)

○正月新羅の蔣聰弘に儒侯を追贈し先聖の廟庭に從祀せしむ(高麗史)

○二月釋奠(續通鑑・紀略)○八月釋奠(續通鑑・紀略)○九月藤原道長文人を法筵に招きて岸菊似流珠の詩を賦せしめ大内記菅原忠貞序を作る(續通鑑)大江舉周侍讀と爲る(續通鑑)

○二月崔致遠を追封して文昌侯と爲す(高麗史)

○二月釋奠(續通鑑・紀略)○四月藤原廣業年號の字を勸進す(續通鑑)○八月釋奠(續通鑑)

○五月周仲卒付は宋の人穆宗の朝商舶に隨つて來る文翰に工に兩朝の交聘の辭令多く其の手に出づ(東國通鑑)○六月崔沆卒沆は彦擣の孫なり金義と諡す(東國通鑑)

○二月釋奠(續通鑑・紀略)○八月親仁親王生る讀書始の儀あり文章博士大江舉



天皇 紀元 年號 支干 事 實 支 那 曆西

一六八六	三寅丙	周東宮學士藤原義忠其の事に預る(續通鑑)釋奠を停む尙侍藤原嬉子の薨に依りてなり(續通鑑)	四	1023
一六八七	四卯丁	○二月釋奠(續通鑑・紀略)右近府圖書寮火け累代の珍寶皆亡ぶ(續通鑑)○五月大江時棟御書所開闔と爲る(續通鑑)○八月釋奠(續通鑑・紀略)○十二月藤原行成卒年五十六行成書を善くし三跡の一に數へらる行成又貞觀政要を藏して常に之を誦せり(續通鑑) 朝鮮 ○高麗顯宗一八 ○八月宋の江南人李文通等來り書凡そ五百九十七卷を獻す(東國通鑑)	五	1027
一六八八	元戊辰	○二月釋奠(紀略・續通鑑)○四月藤原廣業卒五十三廣業東宮學士文章博士式部大輔と爲り參議に累進せり(續通鑑)○八月釋奠(紀略・續通鑑)○十月策試辨賢佐を題と爲す藤原實綱對策及第す(續通鑑)○是歲大江定基卒年七十六(日史)	六	1028
一六八九	二巳己	○二月釋奠(續通鑑・紀略)○閏二月清仁親王文人を招き花開皆錦繡の詩を賦せしむ文章博士善滋爲政序を作る(續通鑑)○三月藤原賴通文人を高陽院の第に招きて林池協勝遊の詩を賦せしむ善滋爲政序を作る(續通鑑)○七月密宴(即ち内宴)秋興在今宵の詩を賦せしめ且芸閣に勅して文を作らしむ(續通鑑)○八月釋奠を停む日蝕に依りてなり(續通鑑・紀略)	七	1029

一六九〇	三午庚	○二月釋奠(續通鑑・紀略)○七月大外記釋奠式日祭儀省略の先例を上申す(左經記)○八月釋奠(續通鑑・紀略)○九月侍臣文人を召して詩歌管絃の宴を開きて菊爲花第一を以て題と爲す藤原義忠序を作る(續通鑑)	八	1030
一六九一	四未辛	○二月釋奠(續通鑑)○三月密宴桃源皆壽考の詩を賦せしむ(續通鑑)東宮に詩宴あり桃花助醉歌を以て題と爲す(續通鑑)○七月大江舉周正四位下に敘す舉周累年侍讀し史記文選を奉授して其の篇を終へたるを以てなり(續通鑑)○八月釋奠内論議を停む大博士中原貞清助教清原賴隆障りあるによりてなり凡そ諸道皆博士あり然れども大博士と稱するは明經博士也釋奠講論は明經の勤むる所なり故に此の如し(續通鑑)	九	1031
一六九二	五申壬	○二月釋奠(續通鑑・紀略)○三月上東門院賴通の白河別業に在り天皇行幸し玩花の遊を爲し文人をして水上落花輕の詩を賦せしむ藤原實綱序を作る(續通鑑)○九月藤原賴道文人を招きて殘菊色非一の詩を賦せしむ日を歴て又文人を招きて秋盡夕陽中の詩を賦せしむ(續通鑑)○十一月皇太弟文人を昭陽舎に召し雲月	明道元	1032



天皇紀元年號支干

一六九三	六	癸酉	多佳會の詩を賦せしむ(續通鑑)	實	支	那	曆西
一六九四	七	甲戌	○二月釋奠(續通鑑・紀略) ○三月藤原賴通卿士儒官を白川第に會して花色見難 飽の詩を賦せしむ(續通鑑) ○七月七夕宴月爲渡河媒の詩を賦せしむ(續通鑑) ○ 八月釋奠(續通鑑・紀略) ○九月重陽宴菊花似壽星の詩を賦せしむ(續通鑑) ○十 月藤原賴通文人を宇治別業に招き隔水望紅林の詩を賦せしむ(續通鑑) ○十月 宮齋院に行啓し諸卿文人を召して詩歌の會を催し月照殘菊を以て題と爲す藤原 義忠序を作る(續通鑑)	實	支	那	曆西
一六九五	八	乙亥	○正月仁壽殿に内宴し春至足鸞花の詩を賦せしむ(紀略・續通鑑) ○二月釋奠(續 通鑑) ○五月藤原賴通文人を法筵に招き月是爲松花の詩を賦せしむ(續通鑑) ○ 八月大風宮殿倒壊し大學寮亦損ず釋奠を延期して中丁に之を行ふ(續通鑑) 密宴 文人をして月色不如秋の詩を賦せしむ(續通鑑) ○十月東宮の第一皇子親仁始め て書を読む東宮學士藤原義忠之を奉授す(續通鑑)	實	支	那	曆西
一六九六	九	丙子	○二月釋奠(續通鑑・紀略) ○三月藤原齊信卒年六十九齊信詩文を能くす(紀略・ 尊卑分脈・日史) ○八月釋奠(續通鑑・紀略) ○九月東宮に重陽宴あり菊似嘉賓の 詩を賦せしむ東宮學士平定親序を作る(續通鑑)	實	支	那	曆西

後朱雀

一六九六	九	丙子	○正月藏人藤原國成從四位下に敍せらる國成文才を以て一時に鳴れる故なり (續通鑑) ○三月藤原賴通文人を白川第に招き花滿林池の詩を賦せしむ藤原義 忠序を作る(續通鑑) ○四月天皇讓位 ○七月後朱雀天皇即位 ○是歲藤原明衡奏 して故大學頭大江通直の子朝通に穀倉院學問料を給せられんことを請ふ(續通 鑑)	實	支	那	曆西
一六九七	長曆	元	丁丑	四	1037		
一六九八	二	戊寅		寶元元	1038		
一六九九	三	己卯	○二月大學寮奏して文章生菅原實平を文章得業生に補せんことを請ふ(續通鑑)	二	1039		
一七〇〇	長久	元	庚辰	康定元	1040		
一七〇一	二	辛巳	○正月藤原公任卒年七十六(略記・日史・續通鑑) ○三月花宴擬文章生等を召し歌 舌不如鶯の詩七言四韻を賦せしめ又別に花樹邊池岸の詩を賦せしむ藤原義忠序 を作る及弟者十二人(續通鑑・日史) ○十月權左中辨藤原義忠卒年三十八義忠才 和漢を兼ね後朱雀帝の侍讀と爲る(續通鑑・日史)	慶曆元	1041		
一七〇二	三	壬午	○十一月尊仁親王始めて御註孝經を読む式部大輔大江舉周奉授す(續通鑑) ○二月權顯等兩漢書及び唐書を新刊して以て進む並に爵を賜ふ(高麗史)	二	1042		



天皇紀元	年號	支干	事	實	支	那	曆西
一七〇三	寬德元	四未	○七月七夕宴深渡漢水の詩を賦せしむ藤原實綱序を作る(續通鑑)○九月文章生大江佐國惟宗孝言源時綱學生藤原國綱を弓場殿に勅試し人名體七言十韻を賦せしめ共に學問料を賜ふ(續通鑑・日史)			三	1043
一七〇四	寬德元	申甲	○八月宋人張守隆但馬に漂到す中原長國を但馬介藤原生行を但馬掾に任じ之を勞せしむ長國は大江匡衡の門人生行は嘗て文章博士と爲りし者なり(續通鑑)			四	1044
一七〇五	永承元	二酉	○正月天皇讓位○四月後冷泉天皇即位 朝鮮 ○高麗靖宗一一 ○四月祕書省新刊禮記正義七十本毛詩正義四十本を進む命じて一本を御書閣に藏せしめ餘は文臣に賜ふ(高麗史)			五	1045
一七〇六	永承元	元丙				六	1046
一七〇七	永承元	二亥				七	1047
一七〇八	永承元	三子	○五月太宰府新羅曆を獻す(日史)○十一月太宰府宋曆を獻す(日史)			八	1048
一七〇九	永承元	四丑	○二月釋奠講論宴座なし此月天皇伯母一品備子内親王薨ぜしによりて也按ずるに長曆以來釋奠を書せず舊記證すべきなきによる也此一件は園太曆勸例に見ゆ是によりて釋奠毎歲廢せざりしを知るべし(續通鑑・日史)			皇祐元	1049

後冷泉

一七一〇	天喜元	五寅	○八月釋奠(續通鑑)○十一月大内記藤原實政を東宮學士となす(續通鑑)			二	1050
一七一〇	天喜元	六卯	○二月從三位式部大輔藤原資業日野山莊に隠る日野三位と稱せらる此人群書を聚め文庫を置き每册法界寺文庫の朱印を貼す(雍州府志)○九月重陽宴文人を召して菊開水岸香の詩を賦せしむ藤原國成序を作る(續通鑑)大江匡房歲十一にして詩を作る叡感ありて學問料を給はる世人之を名譽とす(續古事談)			三	1051
一七一一	天喜元	七辰	○八月釋奠宴座無し京極殿の火災の爲なり(續通鑑)○十月釣殿の御遊宴を文人に賜ふ(續通鑑)			四	1052
一七一二	天喜元	八巳	○正月式部權大輔兼丹波守藤原國成美作守に遷り藤原實範文章博士に任ぜらる(續通鑑)○七月大外記直講清原賴隆卒年七十五(續通鑑)			五	1053
一七一三	天喜元	九午	○三月大學頭藤原公義卒(續通鑑)○十月菅原定義文章博士に任ぜらる(續通鑑)大外記清原定滋卒年五十二(續通鑑)○十一月左中辨平定親式部大輔に兼任せらる(續通鑑)文章博士藤原實範等奏して藤原行家に勸學院の學問料を賜はんことを請ふ(續通鑑)			至和元	1054
一七一四	天喜元	一未					
一七一五	天喜元	二申				二	1055
一七一六	天喜元	三酉	○二月藤原明衡式部少輔に任ぜらる(續通鑑)○十月大學寮狀を獻じて方略を文章生藤原季綱に賜ひて之を課試せんことを請ふ(續通鑑)			嘉祐元	1056



一七二七	五丁酉	○八月大學寮奏して學問料を學生藤原敦基に賜はんことを請ふ(續通鑑)	二	1057
一七二八	元戊戌	○五月文章博士藤原家經卒(續通鑑)	三	1058
一七一九	二己亥	○九月文章博士等奏して學生藤原有俊を文章得業生に補せんことを請ふ(續通鑑) ○高麗文宗一三三	四	1059
一七二〇	三庚子	○四月李靖恭新雕三禮圖五十四枚を進む詔して祕閣に置かしむ(高麗史)	五	1060
一七二二	四辛丑	○十一月外記文章生賀茂陳經卒陳經文學に該通し姓を菅原と改む(續通鑑) ○十一月勸學院學堂從四位上文章博士藤原實範等連署して學生藤原敦基を文章得業生に補せんことを請ふ(續通鑑)	六	1061
一七二三	六癸卯	○六月王國子監に幸す(文獻備考) ○高麗文宗一五 ○八月釋奠を停む内裏の私の爲なり(續通鑑)○十月大學頭文章博士藤原實範其の官を辭するを請ふ(續通鑑)○十一月文章博士藤原定義大學頭を兼ね(續通鑑) ○正月式部省奏して文章得業生藤原有信を課試せんことを請ふ(續通鑑)○三月式部大輔兼文章博士平定親卒後朱雀帝の東宮に在るや定親學士と爲り即位に及びて侍讀と爲る(續通鑑)○十一月省試明城市辨興輦の二題を掲ぐ文章得業生藤	八	1063
一七二四	七甲辰	原有信對策及第す(續通鑑)藤原明衡東宮學士を兼ね(續通鑑) ○正月藤原國成再び式部大輔に任ず(續通鑑)○三月東宮學士藤原實政甲斐守に任ぜらる皇太弟宴を設けて之を饒し且詩を賜ふ(續通鑑)○十二月式部少輔菅原定義卒年五十三(續通鑑)	七	1062
一七二五	元乙巳	○三月藤原正家文章博士に任ぜらる(續通鑑)○是歲式部少輔藤原明衡大學頭に任ぜられんことを請ふ(續通鑑)	二	1065
一七二六	二丙午	○七月大學頭東宮學士藤原明衡其の帶する所の文章博士を辭せんことを請ふ許さず(續通鑑)	三	1066
一七二七	三丁未	○十月車駕宇治平等院に幸して詩を賦す藤原經信大江匡房藤原實綱藤原季綱藤原有信藤原知房扈從して詩を賦す(續通鑑)○是歲月藤原明衡狀を頼通に獻じて位一級を進められんことを請ふ(續通鑑)	四	1067
一七二八	四戊申	○四月天皇讓位○七月後三條天皇即位○大江匡房中務大輔に任ぜらる(續通鑑) ○高麗文宗二二 ○是歲崔冲卒年八十五冲は海州の人後進を收召し九齋を分つ曰く藥聖大中誠明敬業造道率性進徳大和待聘應舉のもの必ず名を九齋籍中に隸す世に之を侍中	神宗熙寧元	1068

後三條	一七二八	四戊申	神宗熙寧元	1068
	一七二七	三丁未		1067
	一七二六	二丙午		1066
	一七二五	元乙巳		1065
	一七二四	七甲辰	英宗治平元	1064



天皇紀元年號支干事實支那曆西

一七三三	五 丑	癸	朝鮮 ○高麗文宗二七 ○一月金良鑑宋に入り國子圖を募して來る(文獻備考)	六	1073
一七三二	四 子	壬	○三月權中納言源隆俊奏して大學寮先聖先師九哲の像裝潢漸く損したるを以て修補を加へんことを請ふ(續通鑑) ○四月右少辨大江匡房右大史紀成季に勅して大學寮に詣り影像修補の事を行はしむ(續通鑑) 大極殿成る十五日甲子臨御し宴を設け樂を作し詩を賦す(日史) ○八月釋奠但し宴座なし聰子内親王の病によりてなり(續通鑑) ○十二月天皇讓位白河天皇受禪	五	1072
一七三一	三 亥	辛	○四月大極殿に御し文人を召して宴を賜ひ詩筵を開く(續通鑑) ○七月親しく侍臣の詩を試む(日史) ○十二月文人を内裏に召し雪中竹を賦せしむ天皇東宮たりし時より好みて詩文を屬す(續通鑑)	四	1071
一七三〇	二 戌	庚		三	107
一七二九	元 酉	己		二	1069
延久			崔公徒と曰ふ冲卒し文憲と諡するに及び又之を文憲公徒と曰ふ時に儒臣徒を立つるもの別に十一あり合せて十二徒と曰ふ冲が徒最も盛なり東方學校の興る蓋し冲より始まる時に海東の孔子と謂へり(東國通鑑)		

一七三四	元 寅	甲	○源隆綱卒年三十二隆綱文漢有り(公卿補任・日史)	七	1074
一七三五	二 卯	乙	○八月式部省擬文章生を試み德配天を以て題となす(續通鑑)	八	1075
一七三六	三 辰	丙		九	1076
一七三七	元 巳	丁	○二月源師房卒年七十師房博學善く文を屬し和歌に工なり(略記・公卿補任・日史)	一〇	1077
一七三八	二 午	戊		元豐元	1078
一七三九	三 未	己	○十二月省試策漁獵を辨論するを以て題と爲す(續通鑑)	二	1079
一七四〇	四 申	庚		三	1080
一七四一	元 酉	辛	○八月釋奠但し宴座を停む(續通鑑) ○十一月末商孫忠に附して宋に報牒す(百鍊抄・經信記)	四	1081
一七四二	二 戌	壬	○二月釋奠(續通鑑) ○三月正四位下大學頭文章博士藤原實綱卒實綱詩文を以て世に名あり(續通鑑)	五	1082
一七四三	三 亥	癸	○二月釋奠但し講書せず(續通鑑)	六	1083
一七四四	元 子	甲		七	1084
一七四五	二 丑	乙		八	1085
一七四六	三 寅	丙	朝鮮 ○高麗宣宗三	哲宗元祐元	1086



一七五二	六	壬申	一七五二	三	己巳	一七四九	三	己巳	一七四七	元	丁卯	一七四七	寬治	元	丁卯	一七四八	二	辰戌	一七五〇	四	午庚	一七五一	五	未辛
一七五二	七	癸申	一七五三	八	甲酉	一七四九	四	午庚	一七四七	元	丁卯	一七四七	寬治	元	丁卯	一七四八	二	辰戌	一七五〇	四	午庚	一七五一	五	未辛
一七五二	七	癸申	一七五三	八	甲酉	一七四九	四	午庚	一七四七	元	丁卯	一七四七	寬治	元	丁卯	一七四八	二	辰戌	一七五〇	四	午庚	一七五一	五	未辛
一七五二	七	癸申	一七五三	八	甲酉	一七四九	四	午庚	一七四七	元	丁卯	一七四七	寬治	元	丁卯	一七四八	二	辰戌	一七五〇	四	午庚	一七五一	五	未辛

○六月王弟釋照宋より還り釋典及經書一千卷を獻す又興王寺に於て教藏都監を置き書を遼宋日本に購ひ四千卷に至る悉く皆刊行せり(東國通鑑)

○十二月天皇始めて書を讀む式部權大輔藤原正家御註孝經を奉授す(續通鑑)

○六月大學寮禮廟の祭器祭服を修めんことを請ひ許さる(日史) ○八月釋奠(續通鑑) ○十一月藤原實政八幡の神輿を射るを以て伊豆に流さる(公卿補任・尊卑分脈・日史)

○二月釋奠但し宴座を停む媯子内親王の病によりてなり(續通鑑) ○是歲藤原正家殺さる年八十一正家文學有り文章博士となる(尊卑分脈・百鍊鈔・日史)

○六月國學を修葺し文宣王を順天館に移安す(東國通鑑)

○四月文人を召し詩を賦せしめ擬文章生を試む(日史) ○六月參議大江匡房を召して漢書を讀ましむ(日史) ○八月釋奠參議藤原通俊事を行ふ(續通鑑)

○八月釋奠權中納言源俊實上卿となつて事を行ふ(江家次第・續通鑑)

○六月李資義等宋より還る時に帝我國の書籍に善本多きを聞き館伴に命じ求む

一七五二	六	壬申	一七五二	三	己巳	一七四九	三	己巳	一七四七	元	丁卯	一七四七	寬治	元	丁卯	一七四八	二	辰戌	一七五〇	四	午庚	一七五一	五	未辛
一七五二	七	癸申	一七五三	八	甲酉	一七四九	四	午庚	一七四七	元	丁卯	一七四七	寬治	元	丁卯	一七四八	二	辰戌	一七五〇	四	午庚	一七五一	五	未辛
一七五二	七	癸申	一七五三	八	甲酉	一七四九	四	午庚	一七四七	元	丁卯	一七四七	寬治	元	丁卯	一七四八	二	辰戌	一七五〇	四	午庚	一七五一	五	未辛
一七五二	七	癸申	一七五三	八	甲酉	一七四九	四	午庚	一七四七	元	丁卯	一七四七	寬治	元	丁卯	一七四八	二	辰戌	一七五〇	四	午庚	一七五一	五	未辛

る所の書目錄を書して之を授く乃ち曰く卷第足らざるもの有りと雖も亦須く傳寫し附來すべしと百篇尙書荀爽周易十八卷京房周易十八卷鄭康成周易九卷陸績注周易十四卷虞翻注周易九卷業遵毛詩二十卷孝經劉卽注一卷孝經章昭注一卷爾雅圖贊二卷等あり(東國通鑑・高麗史) ○九月七十二賢を國學の壁上に畫く(高麗史志)

○二月前參議從二位藤原實政下野に卒年七十五實政少にして對策し儒官に歴任し文を屬し歌に巧みなり後三條帝に仕へて東宮學士となる(尊卑分脈・十訓抄・古事談・日史・續通鑑)

○八月丁丑釋奠講師等の詩各感興を惹く(中右記)

○三月藤原師通曲水宴を六條第に行ふ道長以來久しく絶えしが此に至りて之を興す惟宗孝言をして序を作らしむ(續通鑑)

朝鮮 ○高麗肅宗元

○九月朴寅亮卒文烈と諡す宋熙寧中金觀と宋に使す宋人二公の詩文を刊し小華集と號す(東國通鑑) 又南化朝告奏表狀皆其の手に出づ古今錄十卷を撰し祕府に藏す(本傳)



天皇紀元年號支干

一七五七	承徳元	丁丑	○閏正月大納言正二位兼太宰權帥源經信太宰府に卒年八十二經信詩歌を善くす (公卿補任・日史・續通鑑)	實	支	那	四	1097	曆西
一七五八	二	戊寅					元符元	1098	
一七五九	康和元	己卯	○正月大學頭藤原季綱等連署して孔廟の祭器等を調治せんことを奏請し許さる (續通鑑・日史) ○六月藤原師通卒年三十八師通經史百家に通じ文學の士を進 用す(百鍊抄・日史) ○八月權中納言從二位藤原通俊卒(續通鑑) ○九月右中辨藤 原有信卒す有信對策及第して儒官に歷任し文を能くす嘗て釋奠に陪し論語を講 ずるを聽き智者樂水を賦し序を作る(續通鑑) ○是年大江匡房宰府に在りて詩千 言を作る(續通鑑)				二	1099	
一七六〇	二	戊辰	○二月宋舉子の賓貢を許す(東國通鑑)						
一七六一	三	辛巳	○八月大江匡房安樂寺菅廟に詣り古調二十言を作る(續通鑑) ○八月丁酉釋奠但し宴座を止む二月天皇外祖前關白太政大臣藤原師實薨じたる による(殿曆)				徽宗建中靖 國元	1101	

鳥羽

一七六二	四	壬午	○十一月白河法皇文人を鳥羽離宮に召し白雪樓臺に滿つるの詩を賦せしむ (續通鑑)				崇寧元	1102	
一七六三	五	癸未	○十二月藤原資光勸學院學頭となり學問料を受く年二十九特殊の恩典たり(中 右記)				二	1103	
一七六四	長治元	甲申	○三月洪灌に命じ無逸篇を會慶殿の屏風に書せしむ(高麗史)						
一七六五	二	乙酉	○正月前上野介藤原敦基狀を上り儒學並に奉上の勞を陳ぶ(續通鑑)				三	1104	
一七六六	嘉承元	丙戌	○七月正四位下文章博士藤原敦基卒其の詩文は階堂詞葉に見ゆ(續通鑑) ○高麗睿宗元				五	1106	
一七六七	二	丁亥	○十二月王文德殿に御し尹灌に命じて無逸を講じ吳延寵に禮記を講ぜしめ崔弘 嗣等儒臣二十一人をして聽講せしめ仍て酒饌を賜ふ(高麗史) ○正月越中大掾藤原爲兼上書して先例に准じて穀倉を院の學問料に賜らむこと を請ふ(續通鑑) ○是年從四位下前大學頭菅原是綱卒(續通鑑)				大觀元	1107	



天皇紀元年號支干 實支那 曆西

一七六八	天仁元	戊子	二	三	1108
一七六九	天仁元	己丑	二	三	1109
一七七〇	天永元	庚寅	二	四	1110
一七七一	天永元	辛卯	二	四	1111

朝鮮 ○高麗睿宗四  
 ○七月太學崔敏庸等七十八人武學韓子純八人を七齋に分處す周易を麗澤と曰ひ尙書を待聘と曰ひ毛詩を經德と曰ひ周禮を求仁と曰ひ戴禮を服膺と曰ひ春秋を養正と曰ひ武學を講藝と曰ふ(東國通鑑)

○二月丁未釋奠中納言藤原能實參議源重資等其事に勤む(續通鑑) ○八月丁未釋奠中納言藤原宗忠參議源重資等其事に勤め博士中原廣忠毛詩を講ず次いで宴座詩筵等あり(中右記・續通鑑) ○九月正四位下大學頭藤原敦宗卒後三條以來四朝に歷仕し博識文才頗る等倫に超の階實詞葉に其詩若干首を載す(續通鑑) ○十月藤原忠實文人を東三條第に會す(續通鑑) ○十一月大江匡房卒年七十一匡房博學能文三朝の帝師と爲り嘗て勅を奉じて朗詠集の全什を輯し又文庫を作りて多く書を載せり(公卿補任・日史・續通鑑) ○十二月天皇始めて書を読む侍讀前攝津守菅原在良御注孝經を授け奉る内大臣源雅實に勅して御本孝經に標書せしむ(續通鑑)

一七七二	三	壬辰	一七七三	永久元	癸巳	二	三	1112
一七七三	永久元	癸巳	一七七四	二	甲午	二	四	1113

朝鮮 ○高麗睿宗六  
 ○五月尹瓘卒文肅と謚す坡平の人將相と爲るに及び軍中に在りと雖も常に五經を以て自ら隨ふ(東國通鑑) ○七月使を遣して宋に如かしむ金富轍上表して辟雍に赴きて講を觀んことを乞ふ帝答詔して之を獎む(東國通鑑) ○八月胡宗旦を以て翰林院に知たらしむ且は宋人博學能文王寵顧す(東國通鑑)

○三月勸學院奏して院領の課役に充てらるるなからんこと請ふ(續通鑑)  
 ○三月大學寮より釋奠料未進濟の事を播磨國に通牒す(朝野群載)  
 朝鮮 ○高麗睿宗八  
 ○二月遼耶律固等を使す將に還らんとして春秋釋例金華濫洲集を請ふ王各一本を賜ふ(東國通鑑)

○十二月算博士三善爲康諸博士と諸生を率る先聖を祭り釋奠に擬す(續通鑑)  
 朝鮮 ○高麗睿宗九  
 ○正月國子生張仔等六十人闕に詣りて上書し國學を立てんことを請ふ(東國通鑑) ○六月庚祿崇卒年八十(東國通鑑) ○八月王國學に詣り朴昇中に命じ說命を講ぜしむ百官及び生員七百餘人聽講し各歌頌を進む王詩を製し和進せしむ(東國通鑑)



天皇紀元年號支干

實支那

一〇二

一七七五

三末乙

○七月勅して式部大輔菅原在良を召して侍讀せしめ宴を賜ふ(續通鑑)

朝鮮 ○高麗睿宗一〇

○四月進士金端甄惟底趙爽康就正權適等五人をして宋の太學に赴かしむ(東國通鑑)

一七七六

四申丙

○十二月藤原致光蓋天十二支漏刻銘を作る(續通鑑)算博士三善爲康朝野群載三十卷を撰す(續通鑑)

朝鮮 ○高麗睿宗一一

○正月高令臣卒年七一二良敬と謚す(東國通鑑・本傳) ○五月吳延寵卒年六十二文襄と謚す海州の人なり(東國通鑑・本傳) ○六月宋子弟の入學を許す(東國通鑑) ○八月清讌閣を禁中に作り朝夕經籍を講論す(東國通鑑) ○十一月寶文閣を置き清讌閣の學士を移して之に充つ清讌閣に御し朴景仁に命じ書の二典を講ぜしむ(東國通鑑) ○十二月清讌閣に御し高先柔に命じ書の三謨を講ぜしむ(東國通鑑) 清讌閣に御し池昌洽に命じ禮記の中庸投壺二篇を講ぜしむ寶文閣學士等をして投壺儀並に圖を纂定せしむ(高麗史)

一七七七

五酉丁

○二月下丁の日釋奠を行はんとす白河法皇曰く下丁は不吉の例たりと乃ち止む

1115

五

1116

六

1117

七

(續通鑑) ○十一月式部省秀才を試む(續通鑑)

朝鮮 ○高麗睿宗一二

○正月清讌閣に御し韓暲如に命じ周易乾卦を講ぜしめ朴昇中金富俗をして問難せしむ(東國通鑑・高麗史) ○五月進士權適趙爽金端宋より還る適等宋に入りて上舍及第す康就正甄惟底宋に死す(東國通鑑) ○八月金黃元卒年七十二元文詞海東第一と稱す李軌と名を齊うす(東國通鑑・本傳) ○十一月清讌閣に御し朴昇中に命じ詩の關雎を講ぜしむ金緣に命じ禮記を講ぜしめ胡宗旦に書の無逸を讀ましむ權適趙爽金端等をして諸經を讀ましめ夜分に至りて乃ち罷む(高麗史) ○十二月清讌閣に御し金緣に命じ書の洪範を讀ましめ諸王宰樞及諸學士をして聽講せしむ(高麗史)

一七七八

元永 元戊

○十一月式部省試す(續通鑑)從四位下大内記文章博士藤原永實卒(續通鑑)無品親王輔仁薨階莫詞葉親王の詩二十餘首を載す(續通鑑)

朝鮮 ○高麗睿宗一三

○三月宋人劉載卒載嘗て商船に隨つて來る(東國通鑑)清讌閣に御し洪灌に舜典を富俗に魯頌を韓安仁に泰卦及復卦を李永に說命を講ぜしむ(高麗史)

一七七九

二亥己

朝鮮 ○高麗睿宗一四

1119

宣和元

1118

重和元

一〇三



天皇	紀元	年號	支干	實	支那	曆西
	一七八〇	保安元	庚子	○七月始めて國學に於て養賢庫を立て、士を養ふ文風稍と振ふ(東國通鑑)○是歲清謙閣に御し朴昇中に命じ洪範中庸を講ぜしむ(高麗史) ○八月丁亥朔釋奠廟堂傾危により南廳座に於て行ふ(百練抄) 朝鮮 ○高麗睿宗一五	二	1120
	一七八一		辛丑	○六月清謙閣に御し朴昇中に洪範を鄭克永に月令を金縁に太甲を富僧に泮水を講ぜしむ(高麗史) ○二月釋奠穢によりて延引す(園太曆)○十月從四位上式部大輔菅原在良卒在良少にして對策し文章博士大内記を歷今上の侍讀となり詩文群に超ゆ(續通鑑) 朝鮮 ○高麗睿宗一六	保大元	1121
	一七八二		壬寅	○七月大學寮の孔廟壞る(日史) 朝鮮 ○高麗睿宗一七	二	1122

崇徳

天皇	紀元	年號	支干	實	支那	曆西
	一七八三		癸卯	講ぜしむ(高麗史)崔弘嗣卒年八十貞敬と諡す(東國通鑑・本傳) ○正月天皇讓位○二月崇徳天皇即位○十一月大嘗會藤原敦光悠紀歌を上る時人謂ふ敦光文才あるも倭歌に達せずと然れども儒士を用ふる例に據る(續通鑑) 朝鮮 ○高麗仁宗元	三	1123
	一七八四	天治元	甲辰	○正月金縁を以て國史を監修せしむ(東國通鑑)戸部を制し五典を以て民を教ふ(文獻備考) 朝鮮 ○高麗仁宗二	四	1124
	一七八五		乙巳	○月金陵卒年六十八貞慎と諡す(東國通鑑・本傳) ○八月釋奠素饌を用ふ(日史)	五	1125
	一七八六	大治元	丙午	○八月釋奠殺生禁斷により葷腥の類を供せず(百練抄) 朝鮮 ○高麗仁宗五	欽宗靖康元	1126
	一七八七		丁未	○三月王西京に在り金富僧に洪範を講せしむ麒麟閣に御し鄭沆に說命周官を鄭知常に無逸を講ぜしむ從臣及西京儒臣二十五人を召し詩を賦し酒を賜ふ(高麗史)諸州に詔し學を立て、以て教道を廣む(高麗史志)○十二月金仁存卒一時詞命多く其の手に出づ文成と諡す(東國通鑑)	高宗建炎元	1127



天皇紀元年號支干 實支那 曆西

一七九二	長承元	壬子	○二月釋奠(續通鑑)○九月關白藤原忠通文人を招きて月を翫ぶ(續通鑑)	二	1132
一七九一	天承元	辛亥	○三月諸生の老莊の學を治むるを禁ず(文獻備考) ○三月權大納言藤原宗忠等七叟宗忠の白河山莊に會して尙齒會を行ひ詩を賦し志を述ぶ(續通鑑)○八月從五位下藤原廣兼菅家文藻十二卷後集一卷菅相公集一卷を北野廟に納る(續通鑑)	紹興元	1131
一七九〇		庚戌	○七月御史臺國學の養士を減ぜんことを請ふ國學諸生上書して用ひざらんことを請ふ之を允す(東國通鑑)○十二月勅して侍從官をして各々遺逸一人を掲げしむ(東國通鑑)	四	1130
一七八九		己酉	○三月王國學を視て釋奠す敦化堂に御し金富輒に命じ無逸を講ぜしめ尹彦頤及び諸生をして大義を講問せしむ(高麗史)○八月書籍所に御し鄭沆に命じ宋朝忠義集を讀ましむ(高麗史)	三	1129
一七八八		戊申	○四月大學寮廟像御影を實檢し奉る(新抄)	二	1128
一七八七			○三月孝經論語を以て閩卷の童稚に分賜す(高麗史)○六月七月八月大明宮壽樂堂明仁殿等に御し經を講ぜしむ(高麗史)	一	

一七九三		癸丑	○四月金富僧卒年六十二文簡と諡す睿宗富僧富軾富轍兄弟三人皆文翰侍從たるを以て其の母を封ず(東國通鑑)○八月大雨奉恩寺後山上古井奔流し國學廳に入り經史百家の文書を漂没す(東國通鑑)○是年麒麟閣に御し尹彦頤をして乾卦を講ぜしめ鄭沆李之鄭知常等をして問難せしむ又鄭沆をして中庸を講ぜしむ(東國通鑑・高麗史)	三	1133
一七九四		甲寅	○五月崇文殿に御し金富軾に易尙書を講ぜしめ金富儀洪彝紋鄭沆鄭知常尹彦頤等をして問難せしむ又各々經を講ぜしむ○七月壽樂堂に御し富軾に乾卦泰卦を講ぜしむ(高麗史)	四	1134
一七九五	保延元	乙卯	○八月丁未釋奠宴座なし天下疫病によりてなり(中右記)	五	1135



一七九六	二 丙辰	<p>○正月鄭知常文名あり富軾之を忌む會々妙清反す軾乃ち知常が内應すと誣ひ之を殺す(東國通鑑)</p> <p>○四月權中納言源師時卒師時大江匡房に學び詩を能くす(續通鑑)</p> <p><b>朝鮮</b> ○高麗仁宗一四</p> <p>○五月金富軾尹彦頤の才學を忌み奏して之を貶す(東國通鑑) ○十月金富儀卒(東國通鑑)</p>	六	1136
一七九七	三 巳丁	<p>○十二月鳥羽上皇第四皇子雅仁親王(後白河天皇)初めて孝經を讀む藤原敦光侍讀たり(續通鑑・日史)</p>	七	1137
一七九八	四 午戊	<p>○二月藤原敦光藤原顯長に代りて白居易を祭るの文を作る(續通鑑) ○三月權大納言藤原實行大臣たらんことを望み文を作りて泰山府君を祭る(續通鑑) ○十月算博士三善爲康歲九十諸博士各々詩を作りて之を賀す(續通鑑) ○頃年内大臣藤原賴長屢々明經紀傳博士を招きて論語史記を聽き今年漢書を大納言源師頼に受け以て編を終ふ(續通鑑)</p> <p><b>朝鮮</b> ○高麗仁宗一六</p> <p>○十一月集賢殿に御し金富軾に易を講ぜしめ諸學士をして經を執りて聽かし</p>	八	1138

近衛

一七九九	五 未巳	<p>○二月從四位上大學頭菅原時登卒時登家業を繼ぎ儒官を兼ね階賞詞葉に其詩十首を載す(續通鑑) ○八月三善爲康卒年九十一爲康朝野群載三十卷續千字文章蒙頌韻等を撰す(本朝書籍目錄・大日本人名辭書) ○十二月源師頼卒年七十師頼才藻有り學を大江匡房に受く(尊卑分脈・日史)</p>	九	1139
一八〇〇	六 申庚	<p>○是年藤原賴長毛詩尚書孝經家語後漢書貞觀政要及び老子莊子等を周覽す(續通鑑)</p> <p><b>朝鮮</b> ○高麗仁宗一八</p> <p>○八月崔儒卒年六十九莊敬と謚す(東國通鑑・本傳)</p>	一〇	1140
一八〇一	永治 元 酉辛	<p>○十二月天皇讓位近衛天皇即位○是年藤原賴長周禮儀禮記春秋三傳孟子爾雅及び三國志晉書南北史唐書太平御覽を讀む(續通鑑)</p>	一一	1441
一八〇二	康治 元 戌壬	<p>○二月鳥羽法皇高陽女院を携へ船に駕して宇治に遊ぶ雷電甚し藤原賴長之を候し孝經を誦すること十五遍にして天晴る(續通鑑) ○四月永治二年を改めて康治元年と爲す藤原賴長其の議に預らず穀梁傳穀不升謂之康を引き之を難す(續通鑑)</p>	一二	1142
一八〇三	二 亥癸	<p>○正月式部省試す大内記藤原令明問頭たり(續通鑑) ○閏二月鳥羽法皇崇徳上皇熊野山に詣つ那智山の一小僧自ら宋人と稱するもの御座に侍し論語孝經を誦す</p>	一三	1143



二八〇四	天養元	甲子	<p>其唔呬は乃ち唐音なり(續通鑑)○七月内大臣藤原賴長諸博士を招き束帶して先聖先師の肖影を拜し得業生藤原成佐をして左傳第一卷を講ぜしむ事畢り詩宴を開き庚子は文宣王の誕日なるを以て自今此の日を以て例式をなし更に三傳三禮詩書易論語孝經を講ぜんことを約す(續通鑑)○八月從五位下大内記藤原令明卒令明家業を繼ぎて儒官となる階堂詞葉には其弟儒官茂明の詩五十餘首を載す(續通鑑)○九月藤原賴長頃年見る所の書目を點檢するに經家三百六十二卷史家三百二十六卷雜家三百四十二卷なり今年又再び左傳禮記等を覽る(續通鑑)○十月源雅兼卒年六十五雅兼詩歌を善くし著す所に禮記有り(尊卑分脈、日史)○十一月藤原賴長宋版周易正義を得たり(台記)○藤原賴長禮記正義を讀む又書生をして南史の故事五百九十件を舉げしめて其の記憶を試みしに賴長の覺知する所二百八十五條其半に及ばざるを慙つ(續通鑑)○十二月藤原賴長天文博士安倍泰親をして泰山府君を祭らしむ(續通鑑)</p> <p>○二月甲子革命の議あり藤原賴長其の先例を考へ易注解春秋緯等を援き諸卿と之を議定す(續通鑑)藤原賴長少納言藤原通憲を招きて易筮成卦之法を受く(續通鑑)○三月藤原賴長學生中原師長等を招き周易周禮禮記を講ぜしむ(續通鑑)</p>	一四	1144
------	-----	----	---	----	------

一八〇五	久安元	乙丑	<p>○四月藤原賴長源實長等を招き儀禮を講ぜしむ(續通鑑)○六月藤原賴長周易を講じ畢り更に左傳毛詩を講ず(續通鑑)○八月丁亥釋奠内大臣藤原賴長上卿となり大學寮に到り事を監す同二十一日庚子賴長例により博士等を招き尙書を講ず曰く今日庚子偶文宣王降誕日に當る大幸といふべしと因りて孔子生辰日を考證す(續通鑑)○藤原賴長例に依り博士學徒等を招きて尙書を講論す(續通鑑)○十月前式部大輔正四位下藤原敦光卒敦光文名を以て名を五朝に彰す階堂詞葉に其詩六十餘首を載す(續通鑑)○十二月藤原賴長清原定安をして五經正義公羊解微穀梁疏論語皇侃疏孝經述義等を大學寮に返納せしむ(續通鑑)</p> <p>○正月藤原賴長學生等を招き三尸を守り老子經を講ぜしむ(續通鑑)○二月釋奠藤原賴長大學に到て事を行ふ(續通鑑)○四月丁丑藤原賴長瓦葺文庫を大炊御門高倉に建つ正月より之を經始し此に至り成り群書を藏す(台記・續通鑑)○十月藤原成佐等を招き禮記穀梁を講ぜしむ(續通鑑)○十一月賴長周禮を講ず(續通鑑)</p> <p><b>朝鮮</b> ○高麗仁宗二三</p> <p>○五月李之氏卒公壽の子なり文正と謚す(東國通鑑)○十二月金富軾撰する所の三國史を進む(高麗史)</p>	一五	1145
------	-----	----	---	----	------



天皇

紀元

年號

支干

事

實

支

那

曆西

一八〇六	二寅丙	○二月藤原賴長文庫を建て、經籍を藏す(台記)○四月往古釋奠肉を供す中古以來之を止む或者いふ文宣王云ふ大神宮常に来臨す肉を供すること莫れと因りて之を止む(台記)○八月釋奠參議藤原忠雅等事を行ふ(續通鑑)○十一月崇徳上皇公卿及び文人等を召して詩筵を設く(續通鑑)○十二月藤原賴長周禮を覽る(續通鑑)	一六	1146
一八〇七	三卯丁	○正月太子に命じ鄭襲明を引いて大禹謨を講ぜしむ(高麗史) ○二月釋奠詩筵を停む(續通鑑)○四月從五位下橋以長學官院別當に補せらる(續通鑑)○五月前權中納言從二位藤原實光卒階奠詞葉に其詩數首を載す(續通鑑)○關白藤原忠實和漢文書二十合及び即位帖大内帖を賴長に授く(續通鑑)○八月藤原賴長朝夕自ら儀禮を講ず(續通鑑)○十月賴長橋以長の請に依り學官院を造る(續通鑑)○十二月天皇始めて御注孝經を讀み參議左大辨藤原顯業之を授け奉る(續通鑑)	一七	1157

朝鮮 ○高麗毅宗元

○七月崔惟清をして説命を講ぜしめ崔梓等をして聽講李元膺をして問難せしむ

一八〇八	四辰戊	○正月二十六日内大臣藤原賴長告文を奉りて文宣王孔子廟を拜す(台記)○二月釋奠藤原賴長大學別當として之を祭る(續通鑑)賴長博士學生等を招き毛詩を講ず(續通鑑)○八月二十一日丙子藤原賴長諸儒を招き孝經を講ず文宣王誕辰と稱するによる(續通鑑)○十二月天皇始めて孝經を讀む(日史)	一八	1148
一八〇九	五巳己	○九月特に權大納言藤原宗輔に勅して淳和院別當を兼ねしむ擧學淳和兩院は古より源氏公卿相代りて別當たり藤原氏にして淳和院を領するは異例たり(續通鑑)	一九	1149
一八一〇	六午庚	○是年尹彦頤卒文康と謚す易解を作る(東國通鑑・本傳) ○正月藤原俊經參内して蒙求を御前に讀む(續通鑑)○八月大風雨あり仁壽殿大學寮孔廟の前舎倒る(日史)釋奠權中納言藤原忠雅上卿となる(續通鑑)○十月參議藤原資信勸學院別當に補せらる(續通鑑)○十一月物を勸學院學生に賜ふ(續通鑑)鳥羽法皇密に藤原信西に詔して宇多帝以來堀河帝に至る實録を修めしむ(今傳らず)(續通鑑)	二〇	1150
一八一二	未辛	朝鮮 ○高麗毅宗五	二二	1151



天皇紀元年號支干 實支那曆西

一八一四	久壽元	戊甲	○二月釋奠(江家次第)頼長諸卿雲客博士等を招き詩筵を開く(續通鑑)○六月藤原頼長奏請して大學寮を修補す(續通鑑)○八月釋奠晴儀を用ふ(續通鑑)○九月崇徳上皇詩歌會を開く(續通鑑) 朝鮮 ○高麗毅宗八	二四	1154
一八一三	三辰	癸辰	○四月京都火災千草文倉即ち江家十代の書倉同じく焼く(百練抄・本朝世紀・宇槐記・抄續古事談・兵範記)因幡堂大政所法家書庫火起り書數萬卷焚く(日史)○五月藤原頼長鳥羽法皇の詔を奉じ學生を東三條第に試む(續通鑑)○七月藤原頼長來月釋奠禮服分配の事を沙汰し兼て諸司を催す其儀を嚴重ならしめんと欲してなり之を晴儀といふ(續通鑑)釋奠の禮を習ふ(續通鑑)○八月藤原頼長告文を大學寮に獻じ釋奠大禮妨なからんことを祈る(江家次第・續通鑑)十日釋奠恒式の外藤原頼長晴儀を行ふ此日法華八講を藤氏嫡管の法性寺に行ふ頼長釋奠と同日なるを以て人をして之に當らしめ自ら釋奠の式を行ふ(台記・百練抄・續通鑑)	二三	1153
一八一二	二申	壬申	○二年金富軾卒宋人著書其の世家を傳ふるものあり文集二十八卷文烈と謚す年七十七(東國通鑑)○三月鄭襲明藥を仰いで死す迎日縣の人(東國通鑑)	二二	1152

後白河

一八一五	二亥	乙亥	○正月更に科擧法を定む(東國通鑑) 朝鮮 ○高麗毅宗九	二五	1155
一八一六	保元	元子	○七月藤原頼長卒頼長學を好み經傳を講究す(保元物語・日史) 朝鮮 ○高麗毅宗一〇	二六	1156
一八一七	二丑	丁丑	○九月任元厚卒年六十八初名元鼓(東國通鑑・本傳) ○三月藏人所に於て直講の試を行ひ毛詩尙書左傳禮記の中十事を掲げて之を問ふ中原師直直講となる(續通鑑)○十月大學寮成る(續通鑑)○十二月式部權少輔兼文章博士菅公賢卒歲五十一(續通鑑)	二七	1157
一八一八	三寅	戊寅	○正月天皇仁壽殿に御し内宴を行ひ春生聖化中の題を設け關白以下各詩を獻す實に百餘年停廢せられし盛儀なり(續通鑑)○八月天皇讓位○十二月二條天皇即位	二八	1158
一八一九	平治	元卯	○正月内宴を行はせられ花下催歌舞を以て題と爲し諸臣各詩を獻す(續通鑑)○十月藤原朝隆卒年六十三朝隆書を能くし行成の筆意に通ず(續通鑑)○十二月藤原通憲藤原信頼に殺さる(平治物語・日史)通憲博學宋音に通ず所著本朝世紀法	二九	1159

二條



一八二〇	永曆 元辰 庚	○高麗毅宗一四 ○七月中淑卒高靈の人(東國通鑑)	曹類林日本紀注二卷有り○藤原成通卒年六十三詩歌を善くす(公卿補任・日史)	三〇	1160
一八二二	應保 元巳 辛	○八月藤原公能卒年四十七公能文才あり好んで詩を作る(續通鑑)		三一	1161
一八二二	二午 壬	○正月藤原宗輔卒年八十六宗輔能く文を屬し又音律に通じ管絃譜を爲る(續通鑑) ○八月釋奠詩宴なし去六月前關白藤原忠實卒七月前太政大臣藤原實行卒したるによりてなり(勸仲記)		三二	1162
一八二三	長寛 元未 癸	朝鮮 ○高麗毅宗一六 ○二月經筵經義を講ず(高麗史)○八月崔允儀卒年六十一允儀嘗て祖宗の憲章を集め唐制を雜へ采りて古今禮を詳定す(東國通鑑・本傳)		孝宗隆興元	1163
一八二四	二申 甲	○二月藤原忠通卒年六十八忠通倭歌を善くし詩文に長じ又翰墨の精一世に卓絶す(續通鑑)		二	1164
一八二五	永萬 元酉 乙	○二月藤原伊通卒年七十三伊通好んで詩を作り且書を能くす(續通鑑)○六月天皇讓位○七月六條天皇即位		乾道元	1165

一八二六	仁安 元戌 丙	○七月藤原基實卒年二十四基實翰墨の道に達す(續通鑑)		二	1166
一八二七	二亥 丁	○十二月皇太叔(高倉天皇)始めて御注孝經を讀む東宮學士藤原永範侍讀同基光尙復たり又兼實に勅して御書の上に外題を書せしむ(續通鑑)		三	1167
一八二八	三子 戊	○二月天皇讓位○三月高倉天皇即位		四	1168
一八二九	嘉應 元丑 己	○二月丁酉釋奠權中納言藤原資長上卿たり舊臘大神宮の火災により其儀式多く之を略す(兵範記・續通鑑) ○三月清原頼業左氏傳を校了し自ら跋文を書す時に年四十七歳其本流傳して金澤文庫に在り(續通鑑)		五	1169
一八三〇	二寅 庚	○八月文人等を御書所に召され中秋宴を賜ふ琴詩被月催を以て題となし藤原敦綱序を作る(續通鑑) 朝鮮 ○高麗毅宗二四 ○八月武臣鄭仲夫等亂を作し大臣を殺す○九月仲夫王に逼りて巨濟に遷らしむ(高麗史)○此年奉天殿に御し益稷を講ず(高麗史)		六	1170
一八三一	承安 元卯 辛	○二月丁未釋奠權中納言藤原雅頼上卿たり(續通鑑)		七	1171
一八三二	二辰 壬	○二月釋奠(續通鑑)○八月釋奠藤原資長平親範等各其の事を行ふ(續通鑑)		八	1172
一八三三	三巳 癸	○四月藤原公通卒年五十七公通頗る文才あり詩を善くす(續通鑑)○八月釋奠廟拜宴座なし此年六月多武峯燒亡せしによりてなり(百練抄)		九	1173



天皇紀元	年號	支干	事	實	支那	曆西
一八三四	淳熙元	甲午	<p><b>朝鮮</b> ○高麗明宗三</p> <p>○九月李義方金甫當を市に殺す文臣一切誅戮せらる(高麗史)○十月李義旼前王を弑す(同上)三京四都護八枚より郡縣館驛の任に至る迄凡て武人を用ふ(同上)</p> <p>○二月釋奠藤原忠親上卿となり藤原實守等之を助く(續通鑑)○三月平親宗文友を會し詩合を催す(續通鑑)○四月勸學院に藤花宴を開き學生等藤爲佳會媒を以て題となし詩を賦す(續通鑑)詔して藤原永範をして諸生を試み學問料を賜はしむ(續通鑑)○六月諸道儒士奏して文道を勤めざる者儒官に任すべからざること(續通鑑)を請ふ(續通鑑)</p> <p><b>朝鮮</b> ○高麗明宗四</p> <p>○十二月崔惟清卒年八十文淑と謚す昌原の人嘗て李翰林集注及び柳文事實を撰す又著す所の文章數百篇及び南都集世に行はる(東國通鑑・本傳)</p>	淳熙元		1174
一八三五	安元	乙未	<p>○正月後白河法皇墨帖御笛及び毛詩二十卷を天皇に贈る(續通鑑)○二月釋奠文章博士藤原敦周之に與る後宴庶尹允諧を以て題とし秀才藤原家實序を作る(續通鑑)○七月紀傳博士に勅し改元勸文を獻ぜしむ(續通鑑)○八月釋奠藤原資長等之に與る(續通鑑)○十月前文章博士藤原長光致仕し次で高野山に登り遁世す</p>	二		1175

一八三六	二	丙申	<p>年七十三(續通鑑)</p> <p><b>朝鮮</b> ○高麗明宗五</p> <p>○九月庚應圭卒弼の子なり年四十五(東國通鑑)</p> <p>○二月釋奠藤原實守上卿たり(續通鑑)○四月文人を御所に召し水行多佳色を以て題となし藤原守光序を作る(續通鑑)</p>	三		1176
一八三七	治承元	丁酉	<p>○四月二十八日大極殿火災諸門諸官省諸寮院諸文庫等多く類焼す大學寮及び勸學院亦焼く大學寮聖像及び民部省圖書倉幸に焼けず(續通鑑・日史)○四月大學寮未だ成らざるを以て官廳に釋奠す(日史)○八月太政官廳に於て釋奠を行ふ大學寮未だ經營せられざればなり(續通鑑・百練抄・江次第抄・玉海)○十月大學頭藤原有光卒年七十九(續通鑑)○十一月菅原在茂大學頭に任ぜらる(續通鑑)</p>	四		1177
一八三八	二	戊戌	<p>○二月釋奠藤原成範同長方上卿たり(續通鑑)○五月詞臣藤原成範同永範等を召し詩境多脩竹の題に詩を賦せしめ御製を賜ふ(續通鑑)○六月詩筵を清涼殿に開き禁庭催勝遊を以て題となし太政大臣以下侍臣を召して詩を賦せしむ(續通鑑・日史)</p>	五		1178
一八三九	三	己亥	<p>○二月釋奠官廳に於て之を行ふ藤原實定上卿たり(續通鑑)淨海太平御覽一千卷を獻す(續通鑑)南殿に御し花を飮び近臣をして詩を賦せしむ(續通鑑)○九月藤</p>	六		1179



天皇紀元 年號 支干 事 實 支 那 曆西

安徳 一八四〇 四子庚 原兼實に勅して舊詩卷を書せしむ兼實書に妙なるを以てなり(續通鑑)○十月文章博士藤原光經卒年五十二(續通鑑)

一八四一 養和 元 辛 月前文章博士藤原成光卒年七十(續通鑑)○八月釋奠舊都太政官に於て行はる藤原忠親上卿たり孝經聽講を以て題と爲す(續通鑑・山槐記)

一八四二 壽永 元 壬 〇二月藤原兼實黃石公素書を中原師景に受く(續通鑑)

後鳥羽 一八四三 二卯癸 〇二月釋奠藤原良通上卿たり(續通鑑)○三月文章博士藤原敦周卒(續通鑑)○八月後鳥羽天皇踐祚

一八四四 元曆 元 甲 〇閏十一月李公升卒年八十五文貞と諡す(東國通鑑)

朝鮮 〇高麗明宗一三

一八四四 元曆 元 甲 〇八月太政官廳に於て釋奠す子庶民の詩を賦す時に卽位式の高御座正廳に在り清原頼業西廳を用ひんと議す中原師尚等従はず遂に正廳を用ふ(玉葉・續通鑑)

攝政藤原基通始めて文殿を置き藤原家實を別當とし助教中原師直を開闔と爲す(續通鑑)

一八四五 文治 元 乙 〇正月右大將藤原良通藤原光長藤原兼忠藤原敦綱文章博士藤原業實藤原有家式部大輔藤原長守等を招きて密に詩筵を開く詩題は羈中春色滿なり(玉葉・續通鑑)

〇右大將藤原良通古文尙書を清原頼業に受く兼實同席し月を踰えて編を終ふ(玉葉・續通鑑)○八月釋奠但し宴座なし前月京師大地震ありしによりてなり(園太曆・玉葉・續通鑑)

一八四六 二午丙 〇六月勸學院衆藤原兼實の攝政拜任を賀す諸卿及び文章生來會す(玉葉・續通鑑・史料)攝政藤原兼實始めて文殿を置き藤原親經を別當と爲し中原廣季明經博士中原師直大學助教中原師綱算博士三善行衛明法博士中原章貞同中原明基を招きて酒を勸む(玉葉・續通鑑・史料)○八月釋奠宴座有り(玉葉・續通鑑・史料)○九月藤原邦通菊花を源頼朝に獻じ附するに一絶を以てす(吾妻鏡・續通鑑・史料)○十月天皇始めて御注孝經を讀む左大辨藤原兼光侍讀と爲る文章博士藤原光輔尙復と爲る(玉葉・續通鑑・史料)

一八四七 三未丁 〇二月釋奠後宴に政如農功を以て題と爲す(玉葉・續通鑑・史料)式部大輔藤原光範侍讀と爲る(公卿補任・史料)内大臣藤原良通作文始の儀を行ひ卿相雲客儒家歌人三十餘人を會して雅筵を開く藤原兼光詩題を出し藤原光輔序を作る(玉葉・續通鑑・史料)御書所作文始有り天皇始めて漢書孝文本紀を讀む式部大輔藤原光範侍讀と爲る光範及び藤原宗頼藤原公衡源兼忠文章博士藤原光輔藤原業實藤原

後鳥羽



一八四八	四申戊	敦經藤原宗業藤原長守藤原通業藤原爲長藤原孝範等詩を獻じ二十韻の聯句有り(玉葉・續通鑑・史料)○三月大納言參議及び清原賴業中原師尙小槻廣房等に院宣して直言を上らしむ(玉葉・續通鑑・史料)藤原成範卒成範博識文を能くす櫻町中納言と稱す(玉葉・續通鑑・史料)○六月攝政藤原兼實省試の詩判を覽る(玉葉・史料)○八月御書所作文を停む天皇不豫の爲なり(玉葉・史料)清原賴業貞觀政要に加點し又群書治要抄の點を訂正す(玉葉・史料)○九月清原賴業始めて三略を關白兼實の家に見る(玉葉・史料)○十月右中辨藤原定長秀才菅原爲長文人を北野廟に會して廟廷歲月長の詩を賦し大内記菅原長守序を作る(古今著聞集・續通鑑・史料)○十二月内大臣藤原良通卒爾の詩會を催す(玉葉・史料)	一五	1188
一八四九	五酉己	○二月釋奠(玉葉・續通鑑・史料)内大臣藤原良通卒年二十二良通學を清原賴業に受け詩を好み漢皇世系を著す(玉葉・續通鑑・史料)○四月藤原良經論語を大外記清原賴業に受く(玉葉・續通鑑)○七月權中納言源通親を淳和學兩院別當と爲す(公卿補任・吉記・續通鑑・史料)○八月釋奠(玉葉・續通鑑・史料)	一六	1189

一八五〇	建久元戊庚	脈・日史・仲資王記・續通鑑・史料)○八月釋奠宴座無し(園太曆・續通鑑・史料)○是歲清原賴業中庸を禮記より表出して之が解を爲る(康富記享德三年)實に宋の朱熹の大學章句中庸章句成るの年なり	光宗紹熙元	1190
一八五一	二亥辛	○正月天皇元服群臣詩歌を獻じ絲竹を奏す(玉葉・續通鑑・史料)○二月釋奠(地下家傳・史料)○三月御書所作文式部大輔光範大學頭菅原在茂等詩聯句を獻じ在茂序を作る(玉葉・續通鑑・史料)○八月右中辨藤原親經を侍讀と爲す(公卿補任・史料)釋奠(玉葉・續通鑑・史料)○十月天皇五帝本紀を讀む右中辨藤原親經侍讀たり(玉葉・續通鑑・史料・日史)○十二月守貞親王始めて御注孝經を六條院に讀む(玉葉・史料)	二	1191

朝鮮 ○高麗明宗二〇  
○八月韓文俊卒年七十(東國通鑑)

○正月藤原俊經卒年七十九俊經文章博士御書所別當式部大輔に累遷し參議に至り高倉帝の侍讀と爲る(公卿補任・辨官補任・尊卑分脈・史料)○二月法皇外記廳の菅原道眞の筆蹟を進めしめて之を六條殿に留む(玉葉・續通鑑・史料)○三月内裏詩歌會を開かんとす藤原能保の怒に觸れて俄に中止す(玉葉・史料)○四月中原廣元を明法博士に任じ左衛門大尉を兼ねしむ(玉葉・續通鑑・史料)○七月學問



一八五二	三子壬	<p>料課試の議あり院宣を下して試を行はずして其の人を挙げしむ(玉葉・史料) ○八月藤原良經始めて作文會を催す(玉葉・明月記略・史料)釋奠參議藤原光雅上卿となり左大將藤原良經事を監す(續通鑑・史料) ○十一月中原廣元の明法博士を罷む(吾妻鏡・尊卑分脈・史料) ○閏十二月前左大臣藤原實定卒年五十三實定文才有り詩を善くし最も和歌に長ず和漢の藏書萬餘卷(玉葉・吾妻鏡・續通鑑・史料)</p> <p>朝鮮 ○高麗明宗二二</p> <p>○正月李知命卒年六十五文平と諡す(東國通鑑・本傳)</p>	三	1192
一八五三	四丑癸	<p>○六月菅原道眞の策蹟を外記局に返附す(百練抄・史料) 式部大補藤原光範帝範を進講す(帝範奥書・史料) ○七月前太政大臣藤原師長卒年五十五師長學和漢を兼ね尤も琵琶に長ず(皇代曆・尊卑分脈・續通鑑・史料) 大内記藤原宗業の内御書所開闔に補す(公卿補任・史料)</p> <p>朝鮮 ○高麗明宗二二</p> <p>○是年鄭國儉崔誥等に命じ資治通鑑を讐校せしめ州縣に令して雕印して以て進めしむ侍從儒臣に分賜す ○廉信若卒年七十五孝文と諡す(東國通鑑・本傳)</p> <p>○八月釋奠を延引す太政官廳に五體不具の穢有るに依る(百練抄・史料)</p>	四	1193

一八五四	五寅甲	<p>○二月釋奠(玉葉・續通鑑・史料) ○三月右大將藤原良經作文會を催す(玉葉・史料) ○七月左大將藤原良經藤原兼光藤原光雅藤原定長平基親及び文章博士藤原宗業等を招きて後會只期秋の詩を賦せしむ(玉葉・續通鑑・史料) ○八月御書所作文會藤原賴範序を作り藤原宗業講師と爲り藤原業實講師と爲る(玉葉・續通鑑・史料)釋奠(玉葉・續通鑑・史料)</p>	五	1194
一八五五	六卯乙	<p>○八月釋奠詩の席題は有徳(三長記・史料) 藤原良經文人を招きて詩を講ぜしむ(三長記・史料)此の後詩會多く行はら煩を避け之を略す ○十月藤原資長卒年七十七資長博學文を善くし文章博士と爲り權中納言に進む(三長記・尊卑分脈・續通鑑・史料)</p>	寧宗慶元元	1195
一八五六	七辰丙	<p>○二月釋奠(玉葉・續通鑑・史料) ○三月藤原良經内大臣任官後の初度の詩歌會を催す(明月記略・史料)</p>	二	1196
一八五七	八巳丁	<p>○五月前大外記中原師尙卒年六十九師尙明經博士と爲る(尊卑分脈・中原系圖・史料) ○六月攝政基通文殿始を爲す(猪隈關白記・史料) ○十二月侍讀藤原範季從三位に敘せらる(公卿補任・續通鑑・史料)藤原家實公卿文人を招きて松伴萬年榮の詩を賦せしむ(猪隈關白記・史料)</p>	三	1197
一八五八	九午戊	<p>○正月藤原家實作文會を催す花下觀遊久を以て題と爲す(猪隈關白記・史料) ○</p>	四	1198



二月釋奠代初なれど坎日たるによりて宴座無し(三長記・史料) ○三月幕府平景經の不孝を責め其の所領を沒收して母に給ふ(北條九代記・史料) ○十一月大外記中原師直卒年七十二師直博士に任ず(自曆記・外記補任・押小路家譜・史料)

朝鮮 ○高麗神宗元 ○三月元子始めて書筵を寶文閣に開く(高麗史)

土御門 一八五九 正治 元己未 二 庚申 五 1199

○二月釋奠を停む源賴朝薨去の穢の依りてなり(猪隈關白記・吾妻鏡・續通鑑・史料) 藤原宗實文人を會して春來樂事多の詩を賦し又連句を爲す(猪隈關白記・史料) 院の御所に於て七十餘韻の連句有り(猪隈關白記・史料) ○三月六日藤原家實百韻の連句を爲す(猪隈關白記・史料) 足利義兼卒義兼嘗て足利學校を創建し支那傳來の先聖十哲の畫像祭器經籍を納む(右文故事所引分類年代記・史料) ○四月僧俊仍入宋す(泉涌寺不可棄法師傳・續通鑑・史料) ○八月廿一日藤原家實公卿文人等二十三人を會して作文會を開き風月佳趣多を以て題と爲す(右大辨資實序を作る(猪隈關白記・史料))

一八六〇 二 庚申 六 1200

○二月釋奠博學而篤志を題と爲す(玉葉・猪隈關白記・續通鑑・史料) 閏二月前關白兼實法性寺に遊びて詩歌合の宴を開き春日山寺即事以て詩題と爲す(明月記・續通鑑・史料) 藤原良輔狂詩會を催す(明月記・史料) ○六月菅原在茂卒年八十在茂文章博士大學頭と爲る(猪隈關白記・尊卑分脈・史料) ○九月上皇陰陽寮諸博士安倍晴光安倍泰忠等を召して射覆物を占はしむ(明月記・續通鑑・史料) ○十二月明年辛酉に當るを以て紀傳・明經・算・陰陽・曆道の博士及び式部大輔に命じて革命勅文を上らしむ(後京極攝政記・史料)

一八六一 建仁 元辛酉 二 壬戌 二 1201

○二月改元の事を議するに當り參議親經勅文を讀むに唐音を用ひ對馬音を用ひず(後京極攝政記・史料) 學問料試を院御所に行ふ窓梅薰夜袖を以て詩題と爲す(猪隈關白記・史料) ○三月學問料試を院御所に行ふ尋花朝待友を以て詩題と爲す(猪隈關白記・史料) ○八月釋奠孝經を講ず(猪隈關白記・三長記・史料) ○十二月天皇始めて御注孝經を讀む參議左大辨藤原資實を侍讀とし大學頭藤原長守を尙復とす(猪隈關白記・一代要記・史料)



一八六三	三亥癸	<p>明月記・史料) ○九月藤原基通文士を長講堂に招きて賦月の連句を爲す(猪隈關白記・史料) ○十月源通親卒年五十四通親淳和粹學兩院別當と爲る(百鍊抄・猪隈關白記・史料・續通鑑) 權大納言源通資を淳和粹學兩院別當に補す(公卿補任・史料)</p> <p>朝鮮 ○高麗神宗五</p> <p>○九月趙永仁卒年七十文景と謚す(東國通鑑・本傳)</p> <p>○二月釋典を停む五體不具の穢に依りてなり中丁に至りて之を追行す(明月記・猪隈關白記・續通鑑・史料) ○七月宜秋門院詩歌の會を開く攝政良經以下公卿文人各詩歌を獻す風景千秋久澄を以て題と爲す(續通鑑) ○八月釋奠(猪隈關白記・史料) 大江匡範卒年六十四匡範對策及第詩を能くす(尊卑分脈・和歌作者部類・猪隈關白記裏書・史料) ○十一月菅原長守卒年七十五長守文章博士大學頭に歷任し建仁元年侍讀と爲る(高辻家譜・史料) ○十二月東宮始めて御註孝經を讀む民部權大夫藤原賴範侍讀と爲り藤原宗尙復と爲る(東進記・續通鑑・史料) 諸道博士及び參議藤原親經式部大輔藤原光範に詔して明年甲子革命に當るや否やを勘申せしむ(勘申甲子年被行例事・史料)</p>	三	1204
------	-----	---	---	------

一八六四	元文 元子甲	<p>○正月源實朝初めて孝經を讀む源仲章侍讀す(吾妻鏡・續通鑑・史料) ○四月長兼周易を點す(三長記・史料) ○六月攝政良經藤原良輔藤原有家藤原爲長藤原宗業藤原孝範等を會して詠三史を賦す(明月記・續通鑑・史料) 藤原良輔尙書を清原良業に受く(明月記・續通鑑・史料) ○八月藤原定家左傳荒本を得て之を校合す(明月記・史料) 藤原良輔左傳を清原良業に受く(明月記・史料) ○十月源光行の百詠和歌十二卷蒙求和歌新樂府和歌成る(百詠和歌・本朝文集・史料) ○十二月藤原爲長を侍讀と爲す(明月記・菅儒詩讀年譜・史料)</p> <p>朝鮮 ○高麗神宗七</p> <p>○三月丁卯文宣王に釋奠す(高麗史)</p>	四	1204
一八六五	二丑乙	<p>○正月帝侍讀菅原爲長に五帝本記を受く(菅儒侍讀年譜・史料) ○二月藤原定家尙書を清原良業に受く(明月記・史料) ○三月源通具等新古今和歌集を撰進す參議藤原親經漢文序を作る(拾芥抄・新古今集序・日史・續通鑑・史料) ○五月藤原範季年七十六範季式部權少輔に任じ後鳥羽帝の侍讀と爲る(公卿補任・續通鑑・史料) ○六月攝政良經詩歌合を五辻殿に行ふ後鳥羽上皇又詠歌を賜ふ(明月記・元久詩歌合・史料) ○八月釋奠を停む平賀朝政誅戮の穢に依りてなり(園太曆・明月記・續通鑑・史料) 藤原定家清濁音を式賢に學ぶ(明月記・史料)</p>	開禧元	1205



一八六六	建永元	寅丙	事	實	支	那	曆西
<p>○高麗熙宗元          ○六月弘文公徒の諸生崔忠獻に訴へて曰く本徒の及第林得侯勢に付き我が宣聖堂を將軍金俊に賣る請ふ之を罪せんと乃ち囚へて候を得白金十斤を徴したり(東國通鑑)</p> <p>○正月幕府問注所火あり文庫所藏の文籍皆焼く(吾妻鏡・續通鑑・史料) 上皇水無瀬殿に幸す詩歌御會を開き山家即事の詩を獻せしむ(明月記・史料) 源實朝御註孝經を讀む源仲章侍讀す(吾妻鏡・續通鑑・史料) ○三月大學頭菅原在高侍讀と爲る(三長記・菅儒侍讀年譜・史料) 攝政藤原良經盜に殺さる年三十八良經學和漢を兼ね詩歌連句を善くし比年詩歌の會を開き率ね虛月なし文風大に興る又書に工なり(百鍊抄・公卿補任・三長記・源家長日記・續通鑑・史料) 左大臣藤原家實攝政と爲る勸學院學生參賀す(猪隈關白記・史料) ○四月菅原在高式部大輔と爲り藤原成信大學頭と爲り中原宗俊大學寮廟像の功に依りて右近衛將監と爲る(三長記・史料) 藤原良輔全經正義を讀む(三長言・史料) 民部卿藤原範光權中納言藤原資實同藤原親經式部大輔菅原在高文章博士藤原宗業同菅原爲長年號勸文を上る(猪隈關白記・史料) ○八月釋奠非天聰明を以て題と爲す(三長記・續通鑑・史料) 右大辨藤原光親勸學院別當を罷む右中辨藤原範朝之に代る(公卿補任・三長</p>							

一八六七	承元元	卯丁	事	實	支	那	曆西
<p>記・史料) ○十一月攝政家實文殿始を爲し兵部權大輔家宣を別當に大外記良業を開闔に補す(猪隈關白記・史料)</p> <p>○正月藤原範宣菅原長貞に學問料を給ふ(葉黃記・史料) ○四月前關白藤原兼實卒年五十九兼實學を好み書を善くす(仲資王記・史料) ○八月釋奠(猪隈關白記・史料) 明法博士坂上明基院宣を奉じて裁判至要抄を撰進す(裁判至要抄・史料)</p> <p>○九月式部大輔菅原在高文章博士藤原宗業同菅原爲長權中納言藤原資實同藤原親經民部卿藤原光範等に勅して年號勸文を上らしむ(猪隈關白記・史料) ○十一月白川殿新御堂成る上皇徙りて之に居る關白藤原家實參議藤原長兼民部卿藤原光範に勅して其の詩を障子に書せしむ(明月記・續通鑑・史料) ○十二月院御所に作文會あり藤原親經をして詩を獻せしむ(明月記・史料)</p> <p>○二月上皇詩會を水無瀬殿に開く(明月記・史料) ○四月上皇文人を高陽院に召し各をして林池夏景清の詩を賦せしむ(明月記・續通鑑・史料) 文章生菅原義高を藏人に補す(猪隈關白記・史料) ○六月左大將藤原道家權中納言藤原親經參議藤原長兼中將藤原教家及文人歌客を招きて詩歌會を開き勝地有仙鶴を以て詩題と爲す菅原爲長序を作る(明月記・續通鑑・史料) ○七月省試を行ふ(續通鑑) ○八月釋奠(猪隈關白記・史料) ○十月從五位上菅原淳高院昇殿を聽さる(公卿補任</p>							



天皇紀元年號支干

專

實

支

那

曆西

●史料)上皇關白藤原家實以下公卿文人を高陽院に召して菊殘斯萬年の詩を賦せしむ文章博士菅原爲長序を作る(猪隈關白記・史料)○十一月皇弟雅成親王始めて御註孝經を高陽院に讀む文章博士菅原爲長侍讀を爲し文章生藤原家光を尙復と爲す(猪隈關白記・史料)

○二月藤原光範卒年八十四光範東宮學士文章博士式部大輔に歷任し後鳥羽帝の侍讀と爲り民部卿に進む(公卿補任・續通鑑・史料)○八月釋奠(猪隈關白記・史料)

朝鮮 ○高麗熙宗五

○五月崔銑卒惟清の子なり(東國通鑑)○九月奇洪壽卒(東國通鑑)

○正月清原良業卒年四十七良業助教博士大外記に歷任す(外記補任・續通鑑・史料)○二月十四日藤原道家作文會を開き花下言志を以て題と爲す(玉藻・史料)其後數々之行ふ○五月阪上明基卒年七十三明記明法博士大判事に歷任す或は曰く明基又法曹至要抄一卷を鎌倉に撰進すと(玉葉・神宮本至要抄奥書・史料)○十一月藤原親經卒年六十親經東宮學士文章博士式部大輔に歷任し後鳥羽土御門二朝の侍讀と爲る(公卿補任・尊卑分脈・續通鑑・史料)天皇讓位○十二月

順德

一八七〇

四午庚

三

1210

一八七一

建曆

元辛未

四

1211

式部權大輔菅原爲長を侍讀と爲す(菅儒侍讀年譜・史料)順德天皇即位

○正月天皇受禪後の讀書始有り中納言藤原資實侍讀せり(猪隈關白記・史料)○

二月僧俊仍宋より歸朝す齋す所の群書都て二千三百三卷中に儒書二百五十六卷經書四百六十三卷法帖碑文七十六卷有り(泉涌寺不可棄法師傳・史料・續通鑑)釋奠を停む祈年祭に當るを以てなり仲丁に至つて之を追行す(猪隈關白記・史料)○

三月中納言藤原資實式部大輔藤原宗業權大輔菅原爲長文章博士菅原公輔藤原孝範に勅して改元勘文を上らしむ(猪隈關白記・史料・續通鑑)○五月藤原道家作文會を開く(玉藻・史料)○七月源實朝貞觀政要を讀む十一月に至りて之を終ふ(吾妻鏡・續通鑑・史料)○八月釋奠宴座併に三道堅義無し八條院の崩御に依りてなり(園大曆・史料)○十月式部權大輔菅原爲長從三位に敘せらる(玉藻・史料・續通鑑)○十二月源實朝中原仲章に命じて和漢名將事蹟を注進せしめ中原廣元三善

康信をして之を讀ましめ其の事業を討論す(吾妻鏡・續通鑑・史料)

朝鮮 ○高麗熙宗七

○九月崔謹卒居る所の齋を雙名といふ弟誦及張自牧等と耆老會を爲り逍遙自適す時人之を地上仙と謂ふ年七十七靖安と諡す(東國通鑑・本傳)

○二月釋奠宴座無し關白家實の母の薨去に依りてなり(玉藻・史料・續通鑑)○三

五

1212

一八七二

二申壬



一八七三	建保元	癸酉	六	1213
<p>月内裏に於て大學寮の孔子像を寫す(皇帝紀抄・史料)内裏に於て庚申詩歌會を行ふ霞添山景色を以て詩題と爲す(玉藻・史料)新制二十一條を下す(玉藻・續通鑑・史料)○四月院御所に於て五位藏人以下十人を召して詩を試み及第者は辨官に任じ落第者は解官す當時職事に一人の詩の作法を知る者無く人々周章せり(玉藻・明月記・史料)○五月内裏に於て詩歌會を行ふ(玉藻・明月記・史料)○六月和田義盛和漢名將の畫像十二鋪を源實朝に獻す(吾妻鏡・史料)○八月藤原道家任大臣後初度の作文會を開き松樹帶月光を以て題と爲す文章博士孝範序を作る會者公卿文士十七人なり(玉藻・史料)釋奠中納言藤原隆衡參議藤原實氏上卿たり後宴「大德必得其名」を以て詩題と爲し各をして詩を獻せしむ(玉藻・續通鑑・史料)式部大輔藤宗業侍讀爲るを請ひ又昇殺を聽されんことを請ふ(玉藻・續通鑑・史料)○十二月御書所の作文會有り明□□年を以て題と爲す是の日藤原宗業昇殿を聽さる(玉藻・史料)</p> <p><b>朝鮮</b> ○高麗康宗元</p> <p>○三月任儒卒元厚の子なり(東國通鑑)</p> <p>○正月藤原公良穀倉院學問料を給せらる(公卿補任・明月記・史料)○二月源實朝</p>				

一八七四	二	甲戌	七	1214
一八七五	三	乙亥	八	1215
一八七六	四	丙子	九	1216
一八七七	五	丁丑	一〇	1217
<p>近時中の藝能有るもの北條泰時等十八人を選びて學問所番となし分番祇候して和漢の故事を談せしむ(吾妻鏡・續通鑑・史料)○七月後鳥羽上皇菅原爲長をして貞觀政要を進講せしむ三日より十一日に至りて講了す(明月記・續通鑑・史料)○八月釋奠を停む延曆寺衆徒の騷擾に依りてなり(園太曆・明月記・續通鑑・史料)</p> <p>○二月藤原長兼出家す長兼詩文を好み藤原教家藤原資實と友とし善し文者三卿と稱せらる(尊卑分脈・公卿補任・通鑑・史料)</p> <p>○二月釋奠忠以成之を以て詩題と爲す(建保三年記・史料)○八月釋奠保其爵祿を以て詩題と爲す(建保三年記・史料)</p> <p><b>朝鮮</b> ○高麗高宗二</p> <p>○十一月尹岬儒誣に坐し尋いて死す權の孫なり朝政意に稱はざれば輒ち詩に託して謗訕す時に狂人と號す(東國通鑑)</p> <p>○三月内裏に於て北野宮に詠進の詩歌會あり(順徳院御集・史料)○十二月中殿御作文會有り關白藤原家實右大臣藤原道家藤原資實菅原在高菅原爲長藤原宗業等公卿文人十八人をして宴會樂退齡の詩を賦せしむ宗業序を作る(京都御所東山御文序記録・史料)</p> <p>○四月院御所に於て庚申御會有り詩歌連句を賦せしむ藤原家實藤原良輔藤原道</p>				



一八七九	承久 元 卯 己	六 寅 戊	<p>家菅原在高菅原爲長藤原宗業等公卿文人の詩を獻するもの二十人(明月記・史料) ○十月内裏に於て御作文會有り左大臣藤原良輔右大臣藤原道家藤原資實菅原在高菅原爲長藤原宗業十六人をして菊花似忠臣の詩を賦せしむ(京都御所東山御文庫記録・史料)</p> <p>○二月文章博士源仲章を侍讀と爲す(吾妻鏡・續通鑑・史料) ○六月内裏に於て白氏文集の論議有り(百鍊抄・史料) ○十月仲恭天皇降誕藤原長貞浴殿儒を奉仕す(菅儒侍讀年譜・史料) ○十一月左大臣藤原良輔卒年三十四良輔經史を清原良業に受け博分強記且詩を善くす(愚管抄・續通鑑・史料) ○是年内裏において御作文會あり左大臣藤原資實菅原爲長藤原宗業菅原在高等二十人詩を獻す(京都御所東山御文庫記録・史料)</p>	一一	1218
一八七九	承久 元 卯 己		<p>○正月源實朝右大臣拜賀の禮を鶴岡に行ひ別當公曉に殺さる文章博士源仲章同じく殺さる(吾妻鏡・續通鑑・史料) ○二月釋奠廟拜なし前月二十七日源實朝薨後の穢によりてなり(園太曆・愚管抄・史料) ○八月釋奠を延引す廟器調出し難きを以てなり(師守記・史料) 但し百鍊抄は延引の理由を天下の穢氣に依るとなせり</p> <p>○九月藤原宗業出家す年八十三宗業文章博士式部大輔に歷任す(公卿補任・尊卑</p>	一二	1219

仲恭 後堀河

一八八〇	二 辰 庚		<p>分脈・續通鑑・史料)</p> <p>○七月非參議菅原高長内御書所に宿直す(公卿補任・史料) 御書所に於て御作文會有り藤原範時等三十六人をして禁庭秋色勝の詩を賦せしむ藤原孝範序を作る(京都御所東山御文庫記録・史料) ○八月大炊殿に於て詩歌御會有り詩人の會に與るもの左大臣藤原道家以下十四人遊樓秋夜を以て題と爲す(京都御所東山文庫記録・史料)</p> <p>○高麗高宗七</p> <p>○三月李仁老卒初名得玉當時の名儒吳世材林椿趙通皇甫杭咸淳李諶之と七賢の遊を爲す著す所銀臺集二十卷後集四卷雙明集三卷破閑集三卷あり年六十九(東國通鑑・本傳)</p>	一三	1220
一八八一	三 巳 辛		<p>○四月天皇讓位仲恭天皇受禪 ○七月天皇遜位 ○八月宣旨釋奠停止(園太曆)源通具獎學院別當と爲る(續通鑑) ○十月式部大輔藤原賴範致仕す(續通鑑) ○十二月後堀河天皇即位</p> <p>○十二月天皇始めて孝經を讀む(日史)</p>	一四	1221
一八八二	元 午 壬		<p>○高麗高宗九</p> <p>○四月舊分國子監四季月を以て衛に之き日に衣冠の處子を集め論語孝經を試す中を取るものは吏部に報す吏部は更に考へて始めて初職を援く(東國通鑑)</p>	一五	1222



天皇紀元	年號	支干	事	實	支	那	曆西
一八八三	元仁	二未	○正月正二位菅原在高を侍讀と爲す在高辭して之を其の子淳高に讓る(續通鑑) ○四月將軍賴經手習始をなし長生殿裏春秋富不老門前日月遲の詩を書す(吾妻鏡・續通鑑)○十一月元仁と改元す菅原爲長詔書を作る(吾妻鏡・續通鑑)			一六	1223
一八八四	元仁	元申	○十一月元仁と改元す菅原爲長詔書を作る(吾妻鏡・續通鑑)			一七	1224
一八八五	嘉祿	元酉	○十二月李公老卒(東國通鑑)				
一八八六	嘉祿	二戌	○正月菅原在高從二位に敘す(續通鑑)○三月盜蘭林坊に入り孔子の畫菅公の畫像釋奠の雜具及び禮服等の物を盗み去る(續通鑑)○四月嘉祿と改元す諸博士年號勅文を獻す菅原在高の進むる所を採用す(續通鑑)○六月大江廣元卒年八十三(吾妻鏡・續通鑑)○七月平政子卒年六十九政子嘗て菅原爲長に囑して假名を以て貞觀政要を寫さしめ以て政事の資と爲せり(續通鑑)二十七日左大臣宣下釋奠は中丁を以て行ふべしと(園太曆)				
一八八七	安貞	元亥	○十二月盜あり大學寮文宣王の畫像を裂く(日史) ○九月大納言源道具卒年五十七通具和歌を能くし詩を嗜む(續通鑑)○十二月安貞と改元す博士菅原資高之を勳進す(續通鑑)			二	1226
一八八八	安貞	二子				三	1227

四條

一八八八	寬喜	元丑	○八月太子寶文閣に坐し始めて孝經を講す(高麗史) ○三月寬喜と改元す菅原爲長之を勳進す(吾妻鏡・續通鑑)○十一月菅原爲長を侍讀と爲す(續通鑑)			二	1228
一八八九	寬喜	二寅	○四月前參議源雅清卒年四十九雅清翰墨を善くし詩を好む(續通鑑)○十二月前關白太政大臣藤原基房卒年八十七基房文を好み詩を能くす(續通鑑)			三	1229
一八九〇	寬喜	二寅	○正月琴儀卒年七十八英烈と謚す(東國通鑑本傳)				
一八九一	貞永	三卯	○二月菅原淳高從三位に敘す(續通鑑)○三月盜あり大學影像二十一鋪を取る(日史)○八月北條泰時御成敗式目五十一箇條を定む(吾妻鏡・續通鑑)○九月菅原在高卒年七十四在高文章博士大學頭式部大輔に歷任し土御門帝の侍讀と爲る(續通鑑)○十月天皇讓位○十二月四條天皇即位			四	1231
一八九二	貞永	元辰	○七月兪升旦卒文安と謚す(東國通鑑)			五	1232
一八九三	天福	元巳	○八月藤原孝範卒孝範大學頭と爲る(續通鑑)○十二月菅原長倫其の子光兼を奏			六	1233



一八九八曆仁元戊戌	一八九七三酉丁	一八九六二申丙	一八九五嘉禎元未乙	一八九四文曆元午甲	一八九三嘉禎元未乙	一八九二嘉禎元未乙	一八九一嘉禎元未乙	一八九〇嘉禎元未乙	一八八九嘉禎元未乙	
○八月釋奠詩宴なし前月前右大臣藤原道經薨じたるによりてなり(勸仲記)	○二月釋奠(續通鑑)○十二月大納言源雅親昇學院別當を兼ね(續通鑑)天皇始めて孝經を讀む(日史)	○二月釋奠宴を罷む(日史)○六月菅原淳高正三位に敘す(續通鑑)○是歲圓爾(聖一國師)入宋す(五山文學小史)	○正月式部大輔菅原爲長參議に任ぜらる(續通鑑)○九月嘉禎と改元す前權中納言藤原資之を勸進す(續通鑑) 朝鮮 ○高麗高宗二二 ○十二月金仁鏡鏡卒初名良鏡近體詩賦に工みなりせに良鏡詩賦と稱す員肅と謚す(東國通鑑)	○十二月蒙古の兵境を壓して屢々詰る李奎報久しく兩制を掌る陳情書を製して表す帝感悟して兵を撤したり(東國通鑑) 朝鮮 ○高麗高宗二〇	○十二月蒙古の兵境を壓して屢々詰る李奎報久しく兩制を掌る陳情書を製して表す帝感悟して兵を撤したり(東國通鑑)	○十二月蒙古の兵境を壓して屢々詰る李奎報久しく兩制を掌る陳情書を製して表す帝感悟して兵を撤したり(東國通鑑)	○十二月蒙古の兵境を壓して屢々詰る李奎報久しく兩制を掌る陳情書を製して表す帝感悟して兵を撤したり(東國通鑑)	○十二月蒙古の兵境を壓して屢々詰る李奎報久しく兩制を掌る陳情書を製して表す帝感悟して兵を撤したり(東國通鑑)	○十二月蒙古の兵境を壓して屢々詰る李奎報久しく兩制を掌る陳情書を製して表す帝感悟して兵を撤したり(東國通鑑)	○十二月蒙古の兵境を壓して屢々詰る李奎報久しく兩制を掌る陳情書を製して表す帝感悟して兵を撤したり(東國通鑑)
二	嘉熙元	三	二	端平元	二	二	二	二	二	
1238	1237	1236	1235	1234	1235	1234	1235	1234	1235	

後嵯峨

一八九九延應元亥己	一八九〇仁治元庚子	一八九〇仁治元庚子	一八九〇仁治元庚子	一八九〇仁治元庚子	一八九〇仁治元庚子	一八九〇仁治元庚子	一八九〇仁治元庚子	一八九〇仁治元庚子	一八九〇仁治元庚子
○二月後鳥羽法皇隱岐に崩す壽六十法皇和歌に巧に又詩を好む(續通鑑)延應と改元す藤原經範之を撰進す(吾妻鏡・續通鑑)	○十一月菅原爲長正二位に敘す(續通鑑)	○七月圓爾宋より歸朝す(續通鑑・五山文學小史)○八月藤原定家卒年八十定家	○七月圓爾宋より歸朝す(續通鑑・五山文學小史)○八月藤原定家卒年八十定家	○七月圓爾宋より歸朝す(續通鑑・五山文學小史)○八月藤原定家卒年八十定家	○七月圓爾宋より歸朝す(續通鑑・五山文學小史)○八月藤原定家卒年八十定家	○七月圓爾宋より歸朝す(續通鑑・五山文學小史)○八月藤原定家卒年八十定家	○七月圓爾宋より歸朝す(續通鑑・五山文學小史)○八月藤原定家卒年八十定家	○七月圓爾宋より歸朝す(續通鑑・五山文學小史)○八月藤原定家卒年八十定家	○七月圓爾宋より歸朝す(續通鑑・五山文學小史)○八月藤原定家卒年八十定家
三	四	淳和元	淳和元	淳和元	淳和元	淳和元	淳和元	淳和元	淳和元
1239	1240	1241	1240	1241	1240	1241	1240	1241	1240



天皇紀元年號支千 實支那 曆西

一九〇五	三巳乙	朝鮮 ○高麗高宗三二 ○四月文籍藏する品の宮辭の旁近人家五十尺を撤して以て火災に備ふ(高麗史)	五	1245
一九〇六	四午丙	○二月釋奠(續通鑑)○三月菅原爲長卒年八十九爲長博學文を善くし文章博士式部大輔に歴任し士御門帝の侍讀と爲り正二位に至れり(續通鑑・日史)○閏四月刑部卿菅原淳高式部大輔に兼任す(續通鑑)○是年宋僧道隆來朝す(續通鑑・五山文學史)	六	1246
一九〇七	元未丁	○五月陋巷子と稱するもの論語集註十卷を梓行す北宋槧本の覆刻にして本邦儒書開版の濫觴なり(日本古刻書史)○八月釋奠(續通鑑)	七	1247
一九〇八	二申戊	○九月將軍賴嗣詩歌會を催す(吾妻鏡・續通鑑)○十二月宗尊親王御文始の儀あり文章博士菅原公良詩序を獻す(續通鑑)	八	1248
一九〇九	元酉己	○十二月大納言源具實昇學院別當と爲る(續通鑑)○是年心地覺心(法燈國師)入宋す(續通鑑・五山文學史)	九	1249
一九一〇	二戌庚	○二月北條時頼將軍賴嗣を諫めて文武の業を勵ましめ中原師連清原教隆を以て文學の師と爲す(吾妻鏡・續通鑑)○五月將軍賴嗣帝範を讀む清原教隆侍讀と爲	一〇	1250

後深草

一九一一	三亥辛	○正月菅原公良式部權大輔に任ぜらる(續通鑑)○二月七日丁酉釋奠宴座併に豎義を停む前月式乾門院利子内親王(四條天皇准母)薨せしによる(續通鑑)○十二月天皇始めて孝經を讀む(日史)○是年僧普門入宋す(續通鑑)	一一	1251
一九一二	四子壬	朝鮮 ○高麗高宗三八 ○八月宣聖の眞を新創の龜山洞國子監に奉安せり(高麗史)	一二	1252
一九一三	五丑癸	○二月前攝政藤原道家卒(吾妻鏡・續通鑑)○八月釋奠宴座併に豎義を停む此年六月宣陽門院觀子内親王(後白河天皇女)薨せしによる(續通鑑)	元	1253
一九一四	六寅甲		二	1254



一九一五	七	乙卯	○三月正嘉と改元す文章博士菅原在章之を勸進す(續通鑑)	三	1255
一九一六	元	丙辰	○是年僧惠雲入宋す(續通鑑)	四	1256
一九一七	正嘉	丁巳	○三月正元と改元す式部權大輔菅原公良之を勸進す(續通鑑) ○是年南浦紹明入宋す(五山文學小史)	五	1257
一九一八	二	戊午	○四月文應と改元す文章博士菅原在章之を勸進す(續通鑑) ○七月式部權大輔菅原公良卒年六十六(續通鑑) ○十二月左大臣公相第に於て明年辛酉あり當に改命すべしや否や宜しく紀傳明經算陰陽道をして勸申せしむべき由宣下あり(續史愚抄) ○是年月宋僧兀庵普寧來期す(續通鑑・五山文學小史)	六	1258
一九一九	正元	己未	○七月崔滋卒年七十三文清と謚す家集十卷續破閑集三卷あり(東國通鑑・本傳)	開慶元	1259
一九二〇	文應	庚申	○正月諸道博士に詔して辛酉革命の事を議せしむ明經道清原教隆算博士三善雅衡陰陽博士賀茂在資等勸文を獻す(續通鑑・續史愚抄) 盜大學寮孔子廟倉に入り七十二弟子の畫圖を破壊す(續史愚抄) ○二月菅原長成式部大輔に任ぜらる(續通鑑) ○五月新制二十條を下して民の憂苦を問はしむ革命に依りてなり(續通鑑)	景定元	1260
一九二二	弘長	辛酉	○三月東西の學堂を置く(高麗史志)	二	1261

一九二二	二	壬戌	○三月東西の學堂を置く(高麗史志)	三	1262
一九二三	三	癸亥	○正月菅原在章式部權大輔に兼任す(續通鑑) ○六月將軍宗尊帝範を讀む藤原茂範清原教隆侍讀す(吾妻鏡・續通鑑) ○八月將軍宗尊臣軌を讀む北條業時北條時廣安倍範元侍讀す(吾妻鏡・續通鑑) ○十二月菅原長成式部大輔を辭す藤原良賴之に代る(續通鑑)	四	1263
一九二四	文永	甲子	○二月文永と改元す式部權大輔菅原在章之を勸進す(續通鑑) ○七月清原賴尙卒年六十九賴尙儒官を経て大外記直講に官す(續通鑑) ○十二月菅贈太政大臣の眞筆を厨子に納めらる(續史愚抄)	五	1264
一九二五	二	乙丑	○正月詩歌御會始有り詩題缺(續史愚抄) ○三月菅原在章正三位に敘す(續通鑑) ○七月清原教隆卒年六十七教隆儒を以て幕府に仕へ將軍賴嗣の侍讀と爲る又北條實時の師と爲る(續通鑑)	度宗咸淳元	1265
一九二六	三	丙寅	○五月盜大學寮に入り孔子十哲畫像を裂く使を遣して之を檢せしむ(日史・續史愚抄) 詩御會百日満足御製都序を加へらる披講あり講師は菅原在匡朝臣なり(續通鑑)	二	1266
一九二七	四	丁卯		三	1267



天皇	紀元	年號	支干	事	實	支	那	曆西
	一九二八	建治	五戊辰	史愚抄)十一月北條時宗式目數條を追加す(續通鑑) ○是年僧南浦紹明宋より歸朝す(續通鑑・五山文學小史)			四	1268
	一九二九	元	六己巳	○五月菅原在章從二位に敍す(續通鑑) ○七月式部大輔菅原在章致仕す(續通鑑) 朝鮮 ○高麗元宗一 ○四月高麗王金坵を召して責めて曰く汝柳敬に結び經史に憑藉して國事を論議す予之を罪せんと欲すれども只汝が文翰の任を掌るを以て特に之を宥すと(東國通鑑)			五	1269
	一九三〇	治	七庚午	○二月釋奠(續史愚抄) ○八月釋奠(吉續記・續史愚抄) ○九月二條殿に遷幸し吉書御覽あり十三日三十日詩題御會あり(續史愚抄)			六	1270
	一九三一	元	八辛未	○正月射禮あり(續史愚抄)御作文題を雨露叶春情といふ(續史愚抄) ○二月釋奠(續史愚抄) 菅原良頼式部大輔を罷む菅原高長之に代る(續通鑑) ○三月御作文(續史愚抄) ○四月勸學堂鐘樓等焼じす(續史愚抄) ○七月菅原高長從二位に敍す(續通鑑) ○八月釋奠(續史愚抄) ○是年宋僧西澗子曇來朝す(續通鑑・五山文學小史)			七	1271
	一九三二	治	九壬申	○二月釋奠(續史愚抄) ○八月源雅忠卒四十五雅忠愚大納言兼淳和辨學兩院別當			八	1272

御宇多

	一九三三	元	一〇癸酉	と爲る(續通鑑)大納言源基具淳和辨學兩院別當に兼任す(續通鑑) 朝鮮 ○高麗元宗一三 ○正月李藏用卒年七十二文眞と謚す晚年臣節大に虧く(東國通鑑・本傳) ○七月詩歌御會有り(續史愚抄) ○八月釋奠(續史愚抄) ○十二月御書始有り御注孝經を御書す(續史愚抄)			九	1273
	一九三四	治	一一甲戌	○四月建治と改元す文章博士菅原在匡之を勸進す(續通鑑) ○十月菅原高長式部大輔を辭す藤原經業之に代る(續通鑑)			一〇	1274
	一九三五	元	一二乙亥	○閏三月北條時宗能書の公卿に託して現在三十六人の詩歌を選びて屏風に書せしめ甲乙丙丁の四帳と爲す藤原資宣詩を選し藤原光俊歌を選し藤原伊信之を圖せり(續通鑑) ○六月伏見帝始て孝經を讀む日史春宮御書始御注孝經を御書す(續史愚抄) ○八月十三日十五日御書所御作文を行はせらる十五日の題に曰く仙境月光明(續史愚抄) ○十月北條實時卒年五十三實時學を好み書を聚め金澤文庫を其の別莊武藏稱名寺内に建て儒佛の經典を藏せり(續通鑑) 朝鮮 ○高麗忠烈王二 ○五月張鑑卒年七十章簡と謚す(東國通鑑・本傳)	恭宗德祐元	二	1275	
	一九三六	治	一三丙子				二	1276



天皇 紀元 年號 支干 事 實 支 那 曆西

一九四一	四 巳 辛	○三月藤原經業式部大を辭し藤原茂範之に代る(續通鑑)○十二月菅原長成卒年	一八	1281
一九四〇	三 辰 庚	○二月御學問所に於て續詩歌御會あり(續史愚抄)○六月藤原在宗卒年八十二(續通鑑)○十月東福寺圓爾聖一國師卒年七十九(續通鑑) 朝鮮 ○高麗忠烈王六 ○是月一經一史に通ずるものとして國子に教授せしむ乃ち金碑崔雍方維柳沈蔣調李郤吳漢卿を以て經史教授と爲る(高麗史)	一七	1280
一九三九	二 卯 己	○八月宋僧無學祖元鏡堂覺圓來朝す(續通鑑・五山文學小史) 御書所に於て御作文を行はせらる(續史愚抄)○九月新院御作文題殘菊伴遐算(續史愚抄)	一六	1279
一九三八	弘安 元 寅 戊	○九月金坑卒年六十八文貞と謚す(東國通鑑・本傳) 朝鮮 ○高麗忠烈王四 ○七月道隆蘭溪卒年六十六大覺禪師と謚す(續通鑑・五山文學小史) ○八月菅原良頼卒年八十四良頼後深草帝の侍讀と爲り從二位に敍せらる(續通鑑)○十二月藤原茂範式部權大輔に任ぜらる(續通鑑)	一五	1278
一九三七	三 丑 丁	○十二月菅原在兼東宮學士に任ぜらる(續通鑑)○是年東巖惠安卒(五山文學小史)	元世祖至元 一四	1277

一九四二	五 午 壬	七十七長成文才一時に冠たり博士式部大輔大學頭に歷任し後深草龜山兩朝の侍讀と爲る(續通鑑) 朝鮮 ○高麗忠烈王七 ○八月朴桓卒年五十五文懿と謚す春州の人(東國通鑑本傳)	一九	1282
一九四三	六 未 癸	朝鮮 ○高麗忠烈王八 ○七月白文節卒(東國通鑑) ○八月釋奠(管見記・續史愚抄) 朝鮮 ○高麗忠烈王九 ○二月尹秀の言を用ひ儒士をして軍に充てんとす鄭可臣元朝の法儒戸軍事に與らざるを以て之を諫む王之を然りとす(東國通鑑)	二〇	1283
一九四四	七 申 甲	○正月源基具淳和院別當を辭す(續通鑑)○二月大納言源定實淳和院別當に補す(續通鑑)釋奠(續史愚抄)○三月御書所作文出題の儀有り主上密に渡りて之を御覽じ給ふ(續史愚抄)○八月丁未釋奠宴座並に穩座なし前月十八日關白藤原實經薨じたるによりてなり(勘仲記・續史愚抄)○十一月菅原高長卒年七十七高長文	二二	1284



天皇紀元年號支千  
實支那曆西

一九四五	八酉乙	事	章博士大學頭式部大輔に歷任す(續通鑑・尊卑分脈) 直講清原良季從四位下に敘す侍續の勞を賞するなり(續通鑑)	一二二	1285
一九四六	九戌丙	事	○七月御作文あり此に詩を講ぜらるる題に曰く禁庭契萬年(續史愚抄)○十二月詔して大臣以下の書札の禮院中禮路頭禮及下馬の禮を定む所謂弘安禮節是なり(續通鑑) 朝鮮 ○高麗忠烈王一一 ○五月郭預元に如き道に卒年五十五善く文を屬し書法一家の體を爲す(東國通鑑)○七月世子國學に入り六經を講ず(高麗史)○十一月吳良遇等に命じ國史を撰す將に以て元に進めんとす(東國通鑑)	一三三	1286

伏見

一九四七	一〇亥丁	事	○二月中原師冬明經博士に任ぜらる(續通鑑)○三月仙洞より大學寮先聖先師九哲御影等を寫し奉る是れ夏の讀書の間懸け奉らるべき料なり(新抄)尙書の講書あり次に詩の御會あり(續史愚抄)○四月菅原在公卒年七十四在公文章博士部式權大輔に歷任し後宇多帝の侍讀と爲る(尊卑分脈・續通鑑)○四月孔子講堂を爲り先聖先師已下の影を懸け廟器以下を設け來八日より夏中公卿殿上人諸道輩等讀書すべく又孝經一章を以て毎日講談あるべき旨治定す(續史愚抄) 朝鮮 ○高麗忠烈王一一三	一二四	1287
一九四八	正應元子戊	事	○正月李尊庇卒(東國通鑑)○十一月朱悅卒文節と諡す綾城の人(東國通鑑)	一二五	1288
一九四九	二丑己	事	○三月菅原高能卒高能大學頭式部權大輔に歷任す(尊卑分脈・續通鑑) 續詩歌御會あり御作文あり(續史愚抄)○伏見天皇即位○四月正應と改元菅原在嗣之を勸進す(續通鑑)○八月釋奠宴座なし前月二十四日大地震ありしによりてなり(園太曆・勘仲記)○九月源定實大納言淳和學兩院別當を辭す權大納言源具守之に代る尋いで學院別當を辭す内大臣源通基學院別當と爲る(續通鑑) ○正月射禮御作文あり題に曰く鶯是萬春友(續史愚抄)内大臣家詩會始題に曰く歡榮春色久(續史愚抄)○三月御書所御作文出題の儀あり(續史愚抄) 朝鮮 ○高麗忠烈王一一五	一二六	1289



一九五〇	三寅庚	正と諡す(東國通鑑・本傳) ○二月藤原兼倫式部大輔に任ぜらる(續通鑑)○四月權大納言淳和院別當源具守再び弊學院別當を兼ね(續通鑑) <b>朝鮮</b> ○高麗忠烈王一六 ○十一月世子元に如き鄭可臣閔漬等從ふ一日帝問ふ世子何の書を讀むと對へて曰く師儒有り鄭可臣閔漬此に在り時に從つて孝經論語を質問すと帝大いに悦び可臣に翰林漬に直學士を授く時人之を榮とす(東國通鑑)	二七	1290
一九五一	四卯辛	○六月大内記助教直講清原良季卒年七十一(續通鑑)	一八	1291
一九五二	五辰壬	○四月大納言源具守淳和弊學院別當を罷む源定實之に代る(續通鑑)藤原茂範式部大輔を辭す權大輔藤原兼倫之に代る(續通鑑)○九月大納言源具守復淳和院別當に補す(續通鑑) <b>朝鮮</b> ○高麗忠烈王一八 ○五月李益培卒(東國通鑑)○七月崔雍卒雍は惟清の曾孫(東國通鑑)○九月元我に命じ日本人を護送して其國に還らしむ王金有成を以て宣諭使と爲し郭麟を以て書狀官と爲す麟は狀元に擢でらる(東國通鑑)	二九	1292
一九五三	元巳癸	○五月勸學院學問料を藤原經宣に賜ふ(續通鑑)○七月乞巧奠(續史愚抄)○八月	三〇	1293

一九五四	二午甲	永仁と改元す菅原在嗣之を勸進す(續通鑑)釋導學生見參奏(續史愚抄) ○正月近衛兼教の第に於て作文あり題歡樂契萬春(續史愚抄)○二月釋奠續史愚抄)○四月菅原在兼東宮學士を辭す其子在經代りて任ぜらる(續通鑑)○五月御作文あり(續史愚抄)○六月御書所作文を行はせらる題水石多佳趣(續史愚抄)春宮御書始習禮あり御書は御注孝經也(續史愚抄)天皇始めて孝經を讀む(日史)○七月乞巧奠御作文あり題歡樂有秋契(續史愚抄)○八月釋奠東大寺八幡の神輿洛に在るを以て宴座堅義なし(續通鑑・續史愚抄)	三一	1294
一九五五	三未乙	○二月釋奠神木の動座に依り宴穩座を停めらる(續史愚抄)○八月釋奠東大寺八幡宮神輿在洛及祇園神輿觸穢の事に依り宴座を停めらる學生見參奏(續史愚抄)	元貞元	1295
一九五六	四申丙	○正月權大納言源通雄淳和院別當に補せらる(續通鑑)○二月盜大學寮に入り廟前拜段東南北面の相障子を偷む(續史愚抄)○十二月菅原在嗣式部大輔をやめ藤原明範之に代る(續史愚抄) <b>朝鮮</b> ○高麗忠烈王二二 ○是歲經史教授都監を置き一經一義に通ずるものは擢用す凡そ進士生徒並に防戍を免す(高麗史)	二	1296
一九五七	五酉丁	○五月權大納言淳和院別當源通雄弊學院別當を兼ね(續通鑑)○五月大納言源雅房	大德元	1297



天皇紀元年號支干 實支那 曆西

後伏見

後二條

一九五八	六 戊	源淳和院別當を罷む源具守大納言に選任して淳和院別當を兼ね(續通鑑)○十二月大納言源雅房淳和院別當に補せらる(續通鑑)東福寺白雲惠曉卒年七十(續通鑑・五山文學小史)	二	1298
一九五九	元 亥	○七月准大臣源通賴獎學院別當に補せらる(續通鑑)御讀始あり刑部卿在兼文選を授け奉る(續史愚抄)天皇讓位後伏見天皇受禪 朝鮮 ○高麗忠烈王二四 ○五月柳陞卒時に禮文散佚す陞新義を撰し後人之を遵用す年五十一貞慎と諡す(東國通鑑・本傳)○六月鄭可臣卒文靖と諡す羅洲の人(東國通鑑)	三	1299
一九六〇	二 子	○二月釋奠彗星見るに依りて宴座を停むるの議有りしも用ひず(續通鑑・續史愚抄)○四月正安と改元す藤原在嗣之を勸進す(續通鑑)○七月治部卿兼東宮學士藤原廣通從三位に敘せらる(續通鑑)○八月元僧一寧一山來朝歸化す(續通鑑・五山文學小史)○十二月藤原廣通東宮學士を辭す(續通鑑)	四	1300
一九六一	三 丑	○二月藤原房長穀倉院學問料を賜はり又文章生に補せらる(續通鑑)釋奠(續史愚抄) ○正月天皇讓位後二條天皇受禪○十二月北野宮に於て作文あり後深草院龜山院	五	1301

一九六二 乾元 元 壬寅

一九六三 嘉元 元 癸卯

一九六四 二 辰甲

一九六二	元 寅	の臨幸あり題雪爲廟樹花(續史愚抄) ○二月龜山院北野宮に幸し御作文を行はせらる(續史愚抄)○四月大納言源具守弊學院別當を兼ね(續通鑑)○九月後宇多院伏見殿に幸し詩歌の御會あり(續史愚抄) 朝鮮 ○高麗忠烈王二八 ○六月趙簡鄭僖方于宣無超等に命じ國學博士を試す能く六經に通ずるものは遷秩す金元祥の議に従へるなり(東國通鑑)	六	1302
一九六三	元 卯	○二月詩歌御會始あり題和歌竹退年友詩未詳(續史愚抄)○十二月春宮御書始あり御書は御注孝經在德朝臣之を授け奉る(日史・續史愚抄)○是歲菅原爲視文章生に補せらる(續通鑑)	七	1303
一九六四	二 辰甲	○八月釋奠大喪を以て宴を罷む(日史・續史愚抄) 朝鮮 ○高麗忠烈王三〇 ○五月國學に贍學錢を置く初め安駒庠序の大に毀れ儒學の日に衰へんを憂へ百官をして各銀布を出し之を養賢庫に歸して教養の資と爲さんことを請ふ之に従ふ王内庫の錢穀を出して之を助く駒餘資を以て金文鼎に付して江南に送り先聖及七十子の像を畫かしめ又祭器樂器六經子史を購ひて以て來る之に至り駒李愷李	八	1304



天皇紀元年號支干

事

實

支那

曆西

一九六六	德治元	丙午	○二月菅原房長文章得業生に任ぜらる(續通鑑)○三月藤原家倫に穀倉院學問科を賜ふ(續通鑑)○八月釋奠(園太曆・續通鑑・續史愚抄)	一〇	1306
一九六五	三	乙巳	○三月天皇後宇多上皇と共に群書治要を講ぜしむ(日史・續通鑑) 朝鮮 ○高麗忠烈王三二 ○三月儒生康慶龍家居教授す王穀を賜ふ(東國通鑑)	九	1305
一九六七	二	丁未	○正月後宇多院の御所に於て詩會始あり題春色萬年長(續史愚抄)○是年雪村友梅元に入る時に年十八(五山文學小史) 朝鮮 ○高麗忠烈王三三 ○十一月王尹順をして先代の實錄一百八十五冊を奉じて元に如かしめんとす時人皆可かず曰く祖宗の實錄豈に之を他國に出す可けんやと(東國通鑑)	一一	130

花園

一九六八 延慶元 戊申

武宗至大元

1308

一九六九	二	己酉	○四月菅原在嗣卒年七十八在嗣伏見後伏見後二條三帝の侍讀たり(續通鑑)○八月天皇崩す寶算二十四天皇深く和歌を好み又翰墨を能くし給へり(續通鑑)○九月菅原在登學士に任ぜらる(續通鑑)○十月新院百日の御琵琶及び詩歌等を始めらる(續史愚抄)○十一月花園天皇即位○十二月南浦紹明卒(五山文學小史) 朝鮮 ○高麗忠烈王三四 ○七月王薨す王嘗て金李松縉等と唱和し龍樓集あり(東國通鑑)	二	1309
一九七〇	三	庚戌	○八月釋奠日吉神輿在京に依り宴穩座堅義等を停めらる(日史・續史愚抄)	三	1310
一九七一	應長元	辛亥	○二月釋奠例の如し權中納言藤原公秀上卿た明經明法算の諸學士逐次講論す毛詩を講じ福祿綏之を以て詩題となす春日祭の使立つ日により廟拜なし(園太曆・續史愚抄・續通鑑)○八月釋奠(續史愚抄)	四	1311
一九七二	正和元	壬子	○四月様菅原公時大學頭に任ぜらる(續通鑑)○八月釋奠前關白基忠の事により宴穩座を停めらる(續史愚抄)	仁宗皇慶元	1312
一九三七	二	癸丑	○八月僧一寧南禪寺に入る(續通鑑)	二	1313
一九七四	三	甲寅	○正月政始に式部大輔在輔群書治要を授け奉る(續史愚抄)○二月釋奠宴座なし去年香宮椎焼亡せし故なり(續史愚抄)○三月詩歌御會あり題桃花水映(續史愚抄)	延祐元	1314



一九七六	五辰	<p>○五月僧一寧關東に歸らんとす後宇多法皇宸翰を賜ふ(續通鑑)○八月中原師名明經博士に任ぜらる(續通鑑)</p> <p><b>朝鮮</b> ○高麗忠肅王元</p> <p>○正月白頤正を以て僉議評理と爲す時に程朱の學始めて中國に行はれ未だ東方に及ばず頤正元在り得て之を學ぶ歸るに及び李齊賢朴忠佐首として先づ師受す(東國通鑑)成均館をして朔望の奠二丁の祭りを行はしむ諸生與らざるものは白金一斤を徴して以て養賢庠に充つ上王萬卷堂を蒸邸に構ひ文儒閣復姚燧趙孟頫廬集等を迎致して書史を考究す(東國通鑑)○六月權溥李璵權漢功等成均館に會して新購書を考閱す初め柳衍俞迪を江南に遣はす經籍一萬八百卷を購ひて還れるなり○七月元王に書籍四千三百七十一冊を賜ふ皆宋秘閣の藏する所洪淪の奏に因れる(並高麗史)</p> <p>○三月藤原春範文章博士に任ぜらる(續通鑑)新院御所に於て三席御會始あり先づ詩を講ぜらる題鶯花契萬春次に和歌題松浮春水次は御遊(續史愚抄)○四月僧一寧再び南禪寺に住す(續通鑑)</p> <p>○十月源通顯淳和粹學兩院別當に補せらる(續通鑑)</p>	四卯	<p>一九七五</p>	四卯	<p>一九七五</p>	文保元巳	<p>一九七七</p>	文保元巳	<p>一九七五</p>	元應元巳	<p>一九七九</p>	元應元巳
------	----	--	----	-------------	----	-------------	------	-------------	------	-------------	------	-------------	------

後醍醐

一九七六	五辰	<p>○二月釋奠恒の如し(圍太曆・續史愚抄・續通鑑)○九月伏見法皇崩す春秋五十三法皇尤も翰墨を善くし倭學殊に麗はし(續通鑑)○十月僧一寧卒年七十一(續通鑑・五山文學小史)</p> <p><b>朝鮮</b> ○高麗忠肅王四</p> <p>○四月閔漬本朝編年綱目四十二卷を撰して進む(東國通鑑)</p> <p>○二月釋奠(續史愚抄)天皇讓位後醍醐天皇受禪○四月當代御讀始書御座に於て式部大輔在輔後漢書明帝紀を授け奉る(續史愚抄)○七月乞巧奠詩歌御會あり(續史愚抄)○今年晝御座に於て御讀あり民部卿在兼史記五帝本記を授け奉る(續史愚抄)</p> <p>○二月釋奠東大寺八幡の神輿京師に在るを以て宴を罷む(日史・續史愚抄)○七月内大臣源有房卒年六十九有房才和漢を兼ね且翰墨に達す(續通鑑)○八月釋奠東大寺八幡の神輿京師にあるを以て宴をやむ(日史・續史愚抄)○九月源通重粹學淳和兩院別當に補せらる(續通鑑)</p> <p><b>朝鮮</b> ○高麗忠肅王六</p> <p>○六月文成公安珣を以て文廟に従祀す(東國通鑑)</p> <p>○三月法皇御所に於て評定あり徳政及文學の事沙汰せらる(續史愚抄)○十月</p>	二戊	<p>一九七八</p>	二戊	<p>一九七八</p>	元應元巳	<p>一九七九</p>	元應元巳
------	----	---	----	-------------	----	-------------	------	-------------	------



天皇紀元年號支千 實支那曆西

一九八一	元亨 元西 辛	<p>源親房淳和院別當に補せらる(續通鑑)○十一月菅原在公卒年七十四在公後宇多帝の侍讀たり(續通鑑)○是年寂室元光元に入る(五山文學小史)</p> <p><b>朝鮮</b> ○高麗忠肅王七</p> <p>○九月文宣王の像を塑す(東國通鑑)</p> <p>○二月諸道博士何れも辛酉革命の勅文を獻す日野資朝元亨の字を擇ぶ(續通鑑)○三月元僧楚俊天皇に見え退て謂て曰く帝元龍の悔ありと雖も再び即位の相ありと(續通鑑)天皇孟子荀子を讀む(花園院宸記)○五月天皇資治通鑑を讀み了はる(花園院宸記)○八月釋奠(續史愚抄)○學者是年を以て五山文學の始と爲す(五山文學小史)</p>	英宗至治元	1321
一九八二	二 戊 壬	<p>○六月屢博士等を召して五經三史の義を論ず(續通鑑)○八月僧師鍊元亨釋書三十卷を上る(續通鑑・續史愚抄・五山文學史)○十一月僧素慶古文尙書孔傳十三卷を覆刻す(日本古刻書史)</p>	二	1322
一九八三	三 亥 癸	<p>○二月清原良枝七代侍讀の賞に依り内昇殿を聽さる七代は龜山以後後醍醐天皇に至る七朝なり(續通鑑)○五月法印玄惠韓昌黎文集を講ず日野資朝等之を聽くと伴り東征を謀る(續通鑑)○五月源親房粹學院別當に兼補せらる(續通鑑)○六</p>	三	1323

一九八四	正中 元甲 子	<p>月公卿雲客を召し先づ絲竹の遊を催し次で可久賢人徳の題を課し各をして詩を賦せしむ(續通鑑)○七月乞巧奠御遊御會あり御所作琵琶次に和歌を講ぜらる(續史愚抄)○十一月玄惠昌黎集を講じ潮洲貶謫の事に及ぶ聽く者之を忌み講を廢す(續通鑑)○十二月明年の甲子革命に當るや否や紀傳明經算陰陽道等博士に仰せて勘申せしむべき旨の宣下あり(續史愚抄)</p> <p><b>朝鮮</b> ○高麗忠肅王一〇</p> <p>○六月李穀元に應舉し制科に中る(東國通鑑)○十二月安軸趙廉崔甲龍をして元に應舉せしむ制科に中る(東國通鑑)</p> <p>○正月群臣を紫宸殿に宴し詩を賦し樂を奏せしむ(日史)仁壽殿代に於て兩席御會始めあり先づ御遊次に詩を講ぜらる題に曰く宸遊萬歲春また和歌御會始めあり題松爲久友(續史愚抄)○二月北山殿に於て百首御續歌連句連歌小弓等御興あり其後西園寺に行幸し釣殿より御舟に乗り兼ねて三船を設けらる詩和歌等の題池上春興(續史愚抄)○四月天皇文中子史通鬼谷子南史節要を讀む(花園院宸記)○六月後宇多法皇崩す法皇佛學を好み時々參禪又文學を好み給へり其の多才延久以來未だ有らずといふ(續通鑑)○十二月僧玄惠詩人玉屑一冊を刊行す(日本古刻書史)</p>	晋宗泰定元	1324
------	---------	---	-------	------



天皇紀元	年號	支干	事	實支那	曆西
一九八五	二丑	乙丑	○二月僧圓澄春秋經傳集解三十卷を重刊す(日本古刻書史)○五月大外記直講清原宗尚卒宗尚四朝に仕へて侍讀たり(續通鑑)○九月僧圓月元に入る圓月佛經を誦し且儒書を習ひ算法に通ず(續通鑑)○十月僧宗澤寒山子詩集二冊を刊す(日本古刻書史) ○高麗忠肅王一二	二	1325
一九八六	嘉曆元	丙寅	○三月李晟卒年七十五至る所學者雲の如し人五經笥と謂ふ(東國通鑑・本傳) ○二月釋奠(續史愚抄)○三月南殿左近櫻下に於て花宴を行はせらる詩和歌の題禁廷花御遊の呂律朗詠には御製の詩を用ふといふ(續史愚抄)○是年寂室元光元より歸朝す(五山文學小史) ○高麗忠肅王一三	三	1326
一九八七	二卯	丁卯	○是月閔漬卒年七十九文仁と諡す嘗て權薄と世代編年節七卷並に世系圖を撰し以て進む(東國通鑑・本傳)	四	1327
一九八八	三辰	戊辰		明宗致和元 文宗天曆元	1328
一九八九	元德元	己巳	○六月元僧明極楚俊坐仙梵仙來朝す(五山文學小史)○是歲阿闍梨聖尋僧正等を	二	1329

(光嚴)

天皇紀元	年號	支干	事	實支那	曆西
一九九〇	二午	庚午	○十一月清原良枝卒年七十九(續通鑑)	文宗至順元	1330
一九九一	元弘元	辛未	御前に召され心經奧義等を聞こしめさる(續史愚抄)僧友梅元より歸る友梅元に在ると二十三年遍く名山大川を歴訪して歸る岷峨集の著あり(續通鑑) ○正月鐵菴道生卒七十(五山文學小史)○三月無量光院の櫻下に於て花宴あり先づ御遊あり次に和歌を講ぜらる題庭花(續史愚抄)○五月僧師練光嚴天皇に上表して元亨釋書を大藏に入れんことを請ふ(續通鑑)○七月大納言源通顯學院別當を兼ね(續通鑑)○八月天皇笠置に幸す北條高時京都に光嚴院を立つ○十月朝餉に於て御侍讀あり大藏卿公時朝臣史記五帝本紀を授け奉る(續史愚抄) ○三月天皇隱岐に幸す○夏中巖圓月歸朝す(五山文學小史) ○六月天皇隱岐より還幸す ○高麗忠烈王(復位)	二	1331
一九九二	(正慶元)	壬申	○六月李穀元の制科に中る(東國通鑑)	寧宗至順三	1332
一九九三	(二)酉	癸酉	○六月李穀元の制科に中る(東國通鑑)	順宗元統元	1333
一九九四	建武元	甲戌	○正月天下一統後始めて三席御會を行はせらる先づ詩を講ぜられ次に和歌次に御遊あり(續史愚抄)○春中巖圓月中正子十篇を撰す(東海一漚集・五山文學小史)○九月源具親學院別當に補せらる(續通鑑)	二	1334
一九九五	二乙	乙亥	○正月平惟繼藤原藤範共に文章博士に任ぜらる(續通鑑)藤原實世大學頭を兼ね	至元元	1335



天皇紀元	年號	支干	事	實	支	那	曆西
一九九六	延元 (建武三)	元丙子	○八月足利尊氏光明院を京都に立つ○十一月足利尊氏式目十七條を定む文章博士藤原藤範等之に與る(續通鑑)			二	1335
一九九七		(四)丑丁				三	1337
一九九八	曆應元	寅	○八月京都方曆應と改元す菅原公時之を勸進す(續通鑑)			四	1338
一九九九		(二)卯己	○二月釋奠盜大學寮に入り先聖先師の影を取る(或は破るか)(續史愚抄)○六月院の御所に於て三席御會始あり先づ詩を講ぜらる題聖澤遍於水次に和歌題松影映池次に御遊(續史愚抄)○八月天皇讓位尋崩後村上天皇受禪○是年源親房神皇正統紀を上る(續通鑑)			五	1339
二〇〇〇	興國 (三)辰	庚辰	○二月源親房職原抄二卷を作る(續通鑑)○二月釋奠(續史愚抄)○九月僧友梅播州に大龍庵を造り今秋月の詩あり(續通鑑)○秋愚中周及入元す(五山文學小史)是年中巖圓月藤陰瑣細集を撰す(五山文學小史)			六	1340
			朝鮮 ○高麗忠惠王(復位)元 ○正葵月洪哲年七十九(東國通鑑・本傳)○六月崔濯卒年五十四招翁と號す致遠				

二〇〇一		(四)辛巳	の後なり東人之文二十卷拙稿二卷あり(同上) ○正月源長通驛學院別當に補せられ氏長者となる(續通鑑)○二月源親房職原抄を上る(日史)○九月持明院殿に於て詩御會あり(續史愚抄)○十二月足利直義疎石と議し商船を遣はし元に通ず爾後年々此事あり世に天龍寺船といふ(續通鑑)是歳僧圓月日本紀を鎌倉に修む其の中に本朝は吳泰伯の後云云といふを以て朝議刊行を許さず(續通鑑・續史愚抄)(五山文學小史)			至正元	1341
二〇〇二	康永元	壬午	○三月淳和院別當源通冬驛學院別當を兼ね氏長者と爲る(續通鑑)○四月京都方康永と改元す天變地妖に依りてなり文章博士紀行親勸進す(續通鑑) 朝鮮 ○高麗忠惠王(復位)三 ○三月李仁復元に應舉し制科に中る○七月禹倬卒す丹山の人易程傳初めて來る東方能く知るなし倬閉門月餘參究して乃ち解き生徒に教授す義理の學始めて行はる年八十一(東國通鑑)			二	1342
二〇〇三		(二)癸未	○九月禁中にて詩歌合五十四番あり山家春興幽思不窮海邊眺望を以て題となす(續通鑑)○十一月天龍寺山門法堂等悉くなり光嚴上皇親ら上梁文を製す(續通鑑) 朝鮮 ○高麗忠惠王四			三	1343



天皇紀元	年號	支子	事	實支那	曆西	
一一〇四	五甲 (三)		○五月李兆年卒文烈と諡す年七十五(東國通鑑・本傳) ○十月尹宣佐卒年七十九(東國通鑑・本傳) ○三月詩の御會聯句等あり(續史愚抄) ○七月兩席御會あり先づ詩を講ぜられ次に御遊(續史愚抄) ○八月丁未釋奠宴座穩座三道堅義等を停む前月來東大寺僧徒八幡神輿を洛中に動座せるによる(園太曆)先聖先師已下の影像太政官廳より仙洞に移さるこれ官廳の破壊によりてなり光嚴上皇衣冠直衣影像を拜す(續通鑑) 光嚴上皇明經博士を召して尙書を講ぜしむ(續史愚抄・續通鑑) ○九月源有光淳和狩學兩院別當に補せらる(續通鑑) ○十月光嚴上皇秋原院に幸し博士を召し禮記中庸を講ぜしむ(續通鑑)		四	1344
一一〇五	六乙 (貞和元) 西		○正月源通冬復淳和狩學兩院別當氏長者となる(續通鑑) ○二月釋奠平宗經上卿たり神木の事により宴穩座を停めらる(續史愚抄・續通鑑) 大外記中原師右暴卒師右家業を繼ぎ政事に熟せり時人之を惜む(續通鑑) 嵩山居中卒年六十九其の外集を少林一曲といふ(五山文學小史) 盜あり大學頭紀行親を殺す(續通鑑) ○四月論語の講談を聞しめさる(續史愚抄) ○八月釋奠を停む此月一日足利尊氏の幼子天せしによる(續史愚抄・師守記・續通鑑・後鑑) ○是年白氏文集七十一卷刻成る		五	1345

天皇紀元	年號	支子	事	實支那	曆西	
一一〇六	正平元 (二) 丙戌		(日本古刻書史曰く此の書刊年未詳姑く疑を存すと) 朝辭 ○高麗忠穆王元 ○六月崔文度卒文度濂洛性理の書を觀るを樂む(東國通鑑) ○七月鄺誦元に卒(東國通鑑) ○二月釋奠宴座を行はる(續史愚抄・續通鑑) 光嚴上皇詩歌遊を催し公卿雲客二十餘其撰に應ず(續史愚抄・續通鑑) 天龍寺疎石龜山により塔を造り山勝十景を撰ぶ(續通鑑) ○四月禁中舞樂を御覽せらる(續通鑑) ○七月虎關師鍊卒年六十九著す所に元亨釋書三十卷濟北集二十卷等有り(續通鑑・後鑑・五山文學小史) 竺仙梵仙卒年五十七(一説正平四年紀元一一〇九年とす) 天柱集尙時集東渡集等有り(五山文學小史) ○八月釋奠(續通鑑) ○十一月光嚴上皇夢窓を召し師資の禮を展し正覺國師を加誥す(續通鑑) 二品尊圓親王院宣に依り風雅和歌集序併に第一卷を書き進ず院の御所に於て風雅集竟宴を行はる(續史愚抄) ○十二月雪村友梅卒年五十七友梅年十八にして元に入り四十にして歸朝す(五山文學小史・續通鑑)		六	1346
一一〇七	一一丁 (三) 亥		○正月皇太姪(崇光)始めて禁中に讀書す菅原在登御注孝經を獻じ藤原顯盛之を鑑		七	1347



二〇〇八	(四)三 子戊	授け奉る上皇臨御關白以下之に候す儀畢り絲竹の御遊あり公卿以下に祿を賜はる(續通鑑・續史愚抄)〇二月釋奠論語を講ず(師守記)正三位菅原在登老い其子在淳に侍讀を讓らむことを請ひ許さる(續通鑑)〇三年始御讀始書御座に出御治部卿菅原在淳後漢書明帝紀を授け奉る(續史愚抄)御遊詩等の御會あり(續史愚抄)〇七月乞巧奠(續史愚抄)〇八月釋奠神木遷座により宴座穩坐を罷む(續史愚抄・續通鑑・園太曆)僧慈均卒慈均二十七歳にして元に入り茂古林等に謁して歸り東福南禪等に歷任す(續通鑑)〇十月僧士曇南禪寺に住す士曇宗旨に通じ又翰墨に妙なり人求めて珍とす(續通鑑)	八	1348
		〇正月大學寮の先聖先師九哲の影當時持明院殿の御念誦堂に置かれしを道場に用ひらるべきに依り對代南面に還さる(續史愚抄)〇二月越後守師泰聖德太子の御廟を壞り又御像を損すと云ふ(續史愚抄)〇七月元僧梵仙卒年五十七梵仙元德二年來朝京都鎌倉を經歷し鎌倉に歿す(續通鑑)禁裏に七夕詩筵を開く(續通鑑)〇八月釋奠上丁の障あり延引中丁に及ぶ(續史愚抄・續通鑑)〇十一月花園法皇崩す年五十二法皇倭漢の才を兼ね又佛教に通ず(續通鑑)〇十二月主上代始御讀始あり晝御座に於て式部權大輔在淳某書を授け奉る(續史愚抄)		

二〇〇九

(五)四  
丑己

朝鮮

〇高麗忠穆王四

〇六月安軸卒年六十二文貞と謚す(東國通鑑・本傳)

〇二月釋奠花園法皇喪未だ期を過ぎざるを以て宴座穩座を停む(續史愚抄・續通鑑)〇三月春宮御學問所に於て始めて御聯句あり(續史愚抄)〇閏六月院に於て

詩歌會あり(續史愚抄)〇七月兩院春宮等乞巧奠恒の如し但管法聯句等の御會は入道前關白道教の事によりて之を停めらる(續史愚抄)〇八月釋奠花園院御一周中の故により宴穩座なし(續史愚抄)

朝鮮 〇高麗忠定王元

〇三月尹安之元の制科に登る(東國通鑑)

二〇一〇

(觀應元)五  
寅庚

〇正月藤原行尹卒行尹家業を承け能書の名あり(續通鑑)〇二月京方觀應と改元す文章博士藤原行光之を勳進す(續通鑑)〇三月東宮に於て詩歌の會あり詩題宮花不限春といふ菅原在成之を獻す歌題庭花久芳といふ藤原爲定之を獻す(續通鑑)僧玄惠卒玄惠始て程朱新釋を講じ又資治通鑑宋朝通鑑を讀み北畠親房に傳ふ又庭訓往來太平記を著はす(後鑑・續通鑑)禁裏に詩筵を催さる(續通鑑)御作文始題宸遊花色久(續史愚抄)〇五月菅原在登高師泰に殺さる(續通鑑)〇八月釋奠兵事により宴穩座を停めらる但し廟拜あり(續史愚抄・園太曆・續通鑑)

一〇

1350

九

1349



天皇紀元	年號	支干	事	實支那	曆西
二〇二一	六辛卯		抄・續通鑑) ○九月詩の御會あり題菊有長生種又春宮にも同御會あり題菊花今遇時(續史愚抄・續通鑑) ○二月釋奠儀に依り停止せらる(續史愚抄・續通鑑) ○八月釋奠兵事により宴穩座を停めらる(續史愚抄・續通鑑) ○九月夢窓疎石卒年七十七明儒宋濂其の塔銘を撰す(後鑑・續史愚抄・續通鑑) ○是年春屋妙葩輔教篇を翻刻す(五山文學小史) 朝鮮 高麗忠定王三	二	1351
二〇二二	七壬辰		○正月李穀卒韓山の人稼亭集を著す年五十四文孝と謚す(東國通鑑・本傳) ○二月釋奠(續史愚抄・續通鑑) ○八月釋奠停止(續史愚抄) 京方後光嚴院踐祚 ○十月菅原在成卒在成光嚴以下四朝の侍讀たり(續通鑑) ○十一月主上代始御讀始あり從三位在淳書(書名缺)を授け奉る(續史愚抄) 朝鮮 ○高麗恭愍王元	二二	1352

(後光嚴)

(文和元)

天皇紀元	年號	支干	事	實支那	曆西
二〇二三	八癸巳		開き元老大臣大夫士をして輪番に入り侍して經史法言を進講せしむ(高麗史志) ○二月釋奠延引廟具はざる故なり(續史愚抄) ○八月釋奠沙汰に及ばず主上美濃に御座あるの故なり(續史愚抄) ○九月垂井頓宮に於て御會あり先づ詩次に和歌(續通鑑・續史愚抄) 朝鮮 ○高麗恭愍王二	二三	1353
二〇二四	九甲午		○十月使を遣して元に如き李穡を以て言狀官に充つ穡遂に制科に擢でらる(東國通鑑) ○四月准三宮源親房卒(續史愚抄・後鑑・日史) ○五月菅原在淳卒在淳光明院以下三朝の侍讀たり(續通鑑) ○十一月源通相淳和擧學兩院別當に補し氏長者と爲る(續通鑑)	二四	1354
二〇二五	一〇乙未		○八月釋奠清原宗季初献をなし藤原俊冬等次て拜す次に講論あり宗季孝經を講す次に宴座三道堅義あり次に穩座(續史愚抄・續通鑑) 僧義堂鎌倉に赴く義堂は夢窓の弟子詩文を善くす中華禪僧詩偈を編し眞和集と云(續通鑑) ○九月勅して詩歌會を催すの議あり春日神木入浴によつて止む(續通鑑)	二五	1355
二〇二六	一一丙申		○正月年始御讀始黒戸に於て少納言文章博士長綱朝臣後漢書明帝紀を授け奉る(續史愚抄) ○二月釋奠源具信上卿たり(續史愚抄・續通鑑) 禁中に詩歌會を催す	二六	1356



二〇一七	一四丁酉	<p>詩題は宸遊契萬春歌題は松有佳色なり(續史愚抄・續通鑑) ○三月上巳詩の御會あり桃花映春色を以て詩題となす(續史愚抄・續通鑑) 關白藤原良基菟玖波集を撰して之れを奏覽す(續史愚抄) ○六月禁中に詩筵を開く題水石先秋涼(續史愚抄・續通鑑) ○八月源通有弊學院別當に補せられ氏長者となる(續通鑑) 釋奠(續史愚抄)源具信淳和院別當に補せらる(續通鑑)</p> <p><b>朝鮮</b> ○高麗恭愍王五</p> <p>○十一月李穡元に仕へ是に至りて母老ゆるを以て官を棄て、歸る(東國通鑑)</p>	一七	1357
二〇一八	一三戊戌	<p>○正月命じて中外の學校を修めしむ(東國通鑑)</p> <p>○正月年始御讀黒戸に於て文章博士長綱史記孝文本紀を授け奉る(續史愚抄) ○七月御會あり先づ詩を講ぜらる題二星秋有信次に和歌御遊(續史愚抄) ○八月</p> <p>釋奠早且始祭初獻間上卿不參因りて獻を罷む助教清原教氏等參仕廟拜及都堂の儀沙汰なしといふ(續史愚抄・續通鑑) ○是年中巖圓月蒲室集を註す(五山文學小史)</p> <p><b>朝鮮</b> ○高麗恭愍王七</p> <p>○六月十二徒朔試す(高麗史志)</p>	一八	1358

二〇一九	一四己亥	<p>○正月詩歌御會始あり詩題萬物感陽和和歌題底上鶴(續史愚抄・續通鑑) ○二月釋奠神の事に依り宴穩座を罷む(續史愚抄・續通鑑) ○七月七夕の詩歌御會あり詩題星期不限秋和歌題七首(七夕月七夕風七夕霧等)(續史愚抄・續通鑑) ○九月禁中に重陽の宴を開き菊開九重節を以て詩題となす(續史愚抄・續通鑑) ○十月元亨釋書を天下に施行すべき旨宣下あり(續史愚抄)</p> <p><b>朝鮮</b> ○高麗恭愍王八</p> <p>○六月翰林院に命じ尙書及歴代の諸書を進めしむ(高麗史)</p> <p>○四月藤原公賢卒年七十公賢官位極高頗る文才あり(續通鑑) ○是歲隱士一人寒士一人老僧一人北野社に詣り終宵連歌し後和漢故事を談じ又本朝古昔王道を述べ或人之を記して北野通夜物語といふ(續通鑑)</p>	一九	1359
二〇二〇	一五庚子	<p>○二月范德機詩集七卷刻成る(日本古刻書史) ○三月朝餉に於て御讀あり文章博</p>	二〇	1360
二〇二一	一六辛丑	<p>○二月范德機詩集七卷刻成る(日本古刻書史) ○三月朝餉に於て御讀あり文章博</p>	二一	1361



二〇二二 (眞治元) 寅	一七 寅	二二 二	<p>士親朝後漢書明旁紀を授け奉る此夜御書所始あり(續史愚抄)御書所作文あり和漢御會あり(續史愚抄)清原良兼卒年五十五良兼直講少外記たり(續通鑑)○五月僧覺明卒覺明元より歸り出雲に居る時後醍醐帝の召に應し後村上帝に召さる(續通鑑)○六月仙洞に於て阿一仰せにより尙書を講ず(續史愚抄)○近年兵革息ます僧徒多く難を支那に避く學士宋濂之を聞き日東曲十首を作る(續通鑑)○是年乾峯士曇卒(五山文學小史)</p> <p><b>朝鮮</b> ○高麗恭愍王一〇</p> <p>○二月李齊賢に命じ無逸篇を講ぜしむ(東國通鑑)○五月李穡に命じ洪範を講ぜしむ國學火あり(東國通鑑)</p>
二〇二三 (一八) 卯	一八 卯	二三 三	<p>○四月藤厚忠光勸學院別當に補せらる(續通鑑)</p> <p><b>朝鮮</b> ○高麗恭愍王一</p> <p>○正月王福州に至り大いに紅賊を破る李仁復をして國史秘書を收めしむ(東國通鑑)</p> <p>○正月年始御讀始大藏卿長綱史記孝文本紀を授け奉る(續史愚抄)○十月詩の御會あり題可貴聖入道(續史愚抄)</p>

二〇二四 (一九) 辰	一九 辰	二四 四	<p>○正月年始御讀始黒戸に於て大藏卿長綱史記孝景本記を授け奉る(續史愚抄)○五月堺の僧道祐論語集解十卷を重刊す後に正平版論語といふ(日本古刻書史)○八月釋奠諒闇に依り之を停めらる(續史愚抄)○十月別源圓旨卒年七十一著す所に南游東歸二集有り(五山文學小史)○此年足利基氏夥瓦硯を得源義重をして銘を作らしむ(續通鑑)</p>
二〇二五 (四〇) 巳	二〇 巳	二五 五	<p>○正月年始御讀始あり京大藏卿長綱史記孝文本紀を授け奉る(續史愚抄)○十二月龍泉令湊卒(五山文學小史)</p> <p><b>朝鮮</b> ○高麗恭愍王一四</p> <p>○正月林禮上書して成均に五經四書齋を分ち科擧は一に元朝の法に依らんことを請ふ(東國通鑑)</p>
二〇二六 (五一) 午	二一 午	二六 六	<p>○九月高麗國人元主の詔書を奉じて來朝し海寇を禁せんことを請ふ(續通鑑)○十月詩の御會あり題勝地多清興(續史愚抄)</p> <p><b>朝鮮</b> ○高麗恭愍王一五</p> <p>○十二月河南王郭永錫と遣し文廟に謁せしむ(高麗史)</p>
二〇二七 (六一) 未	二二 未	二七 七	<p>○二月詩歌御會詩題聖化萬春久和歌題竹契還年(續史愚抄)○四月藤原隆家卒隆</p>



天皇紀元	年號	支干	事	實	支	那	曆
長慶二〇二八	(應安元)	一三戊申	<p>家俊冬に共に詩歌を好む源經有等と唱和の詩歌多し編して塵玉集といふ(續通鑑)〇九月寂室元光卒年七十八寂室録を著す(五山文學小史)</p> <p><b>朝鮮</b> 〇高麗恭愍王一六</p> <p>〇是月文宣王の塑像を崇文館に稱す文武百官冠帶侍衛す(高麗史志)〇五月重ねて國學を營み中外の儒官をして布を出して費を助けしむ始めて五經四書齋を分つ(高麗史・東國通鑑) 〇七月李齊卒賢瑱の子益齋と號す年八十一文忠と諡す益齋亂稿十卷あり(東國通鑑・本傳)〇八月王文廟に謁す(高麗史) 〇是歲李穡每日明倫堂に坐し授業す性理の學始めて興る時に朱子集注始めて至る鄭夢周講說す胡煥文の四書を得るに及び融合せざるなし諸儒歎服推して東方理學の祖と爲す(東國通鑑)</p>		明太祖洪武元		1368
二〇二九	(應安元)	二四己酉	<p>〇二月僧絶海海覺と共に明國に入る絶海は夢窓の弟子詩文を善くす(後鑑・續通鑑) 〇天皇崩長慶天皇踐祚 〇四月華人陸仁國に歸る仁字元良雪樵と號す(續通鑑) 〇七月僧契聞卒年六十八契聞元に入り文宗に謁して歸る圓覺に居り萬休叟と號す(續通鑑)</p> <p>〇八月釋奠(續史愚抄) 〇九月詩歌御會詩題菊有重陽信和歌題三首月前雲野</p>			二	1369

天皇紀元	年號	支干	事	實	支	那	曆
後圓融二〇三一		二辛亥	<p>外月寄月祝(續史愚抄)</p> <p><b>朝鮮</b> 〇高麗恭愍王一八</p> <p>〇八月李穡に命じ文廟に釋奠せしむ辛丑より後釋采法式に中らず今禮度始めて觀るべし(高麗史志)</p> <p>〇二月詩の御會始あり(續史愚抄) 〇八月詩の御會あり題草樹皆秋色(續史愚抄)</p> <p>〇九月明の木板工陳孟千陣伯壽二人來朝す(日用工夫集)</p> <p><b>朝鮮</b> 〇高麗恭愍王一九</p> <p>〇四月明帝王に六經四書通鑑漢書を賜ふ(高麗史) 〇八月朴實金濤柳伯儒を遣し明に應舉せしむ濤制科に中る(東國通鑑)</p> <p>〇二月釋奠(續史愚抄)兩席御會始詩題春爲皇歡到(續史愚抄) 僧義堂足利氏滿に學を勧め又貞觀政要を呈す(續通鑑) 〇三月京都方後光嚴院讓位後圓融院受禪</p> <p>〇閏三月光嚴上皇始めて文殿沙汰あり藤原仲房等上卿たり(續通鑑) 〇四月朝餉に於て御讀勤解由三位高綱後漢書明帝紀を授け奉る畫御座に於て御讀大藏卿長綱史記五帝本紀を授け奉る(續史愚抄) 〇八月釋奠(續史愚抄) 〇九月三席御會詩題明德月無私詩和歌題池月添光(續史愚抄)</p> <p><b>朝鮮</b> 〇高麗恭愍王二〇</p>			四	1371
建德元	(三)戊戌	三	<p>〇二月詩の御會始あり(續史愚抄) 〇八月詩の御會あり題草樹皆秋色(續史愚抄)</p> <p>〇九月明の木板工陳孟千陣伯壽二人來朝す(日用工夫集)</p> <p><b>朝鮮</b> 〇高麗恭愍王一九</p> <p>〇四月明帝王に六經四書通鑑漢書を賜ふ(高麗史) 〇八月朴實金濤柳伯儒を遣し明に應舉せしむ濤制科に中る(東國通鑑)</p> <p>〇二月釋奠(續史愚抄)兩席御會始詩題春爲皇歡到(續史愚抄) 僧義堂足利氏滿に學を勧め又貞觀政要を呈す(續通鑑) 〇三月京都方後光嚴院讓位後圓融院受禪</p> <p>〇閏三月光嚴上皇始めて文殿沙汰あり藤原仲房等上卿たり(續通鑑) 〇四月朝餉に於て御讀勤解由三位高綱後漢書明帝紀を授け奉る畫御座に於て御讀大藏卿長綱史記五帝本紀を授け奉る(續史愚抄) 〇八月釋奠(續史愚抄) 〇九月三席御會詩題明德月無私詩和歌題池月添光(續史愚抄)</p> <p><b>朝鮮</b> 〇高麗恭愍王二〇</p>			三	1370



二〇三二	文中元壬 (五)子	○五月李存吾卒年三十一慶州の人(東國通鑑・本傳) ○二月足利氏滿僧義堂をして貞觀政要を講せしむ(續通鑑) ○今年釋奠二八月間未詳(續史愚抄)	五	1372
後龜山 二〇三三	(六)丑癸	朝鮮 ○高麗恭愍王二二 ○三月使を遣して明に如き子弟をして入學せしめんことを請ふ(東國通鑑) ○今春建仁寺中大學堂西來院等焼く(續史愚抄) ○六月明國使仲猷祖闡明主の命を奉じて天台の教僧無逸克勤と共に來朝す(續通鑑・後鑑・五山文學小史) ○八月釋奠(續史愚抄) 天皇讓位後龜山天皇受禪	六	1373
二〇三四	(七)寅甲	朝鮮 ○高麗恭愍王二二 ○二月以後文廟朔望の祭を行ふ(東國通鑑) ○七月鄭夢周より歸り子弟を入學せしむるの帝命を宣す(東國通鑑) ○正月僧印原卒年八十明宋濂碑文及銘を作る(續通鑑) ○八月釋奠諒闇によりて停止(續史愚抄) ○十月明人俞良甫善注文選六十卷を刻す所謂博多版是なり(日本古刻書史) ○十一月夢巖祖應卒早霖集の著有(五山文學小史・續通鑑) ○十二月足月義滿令三條を出す其一は神に對し在すか如きの祭を怠らざること	七	1374

二〇三五	天授元乙 (永和元)卯	其二は國は民を本とし民は天を以て本とす宜しく稻穀紬絹の備をなすべきこと其三は貢賦期を怠らざること是なり(續通鑑) 朝鮮 ○高麗恭愍王二三 ○二月李仁復卒年六十七文忠と謚す嘗て閔漢の編年綱目忠烈忠宣忠肅三朝實錄及古今金鏡二録を修す(東國通鑑・本傳) ○十二月白文寶卒(東國通鑑) ○正月建仁寺僧圓月卒年七十六圓月詩文共に巧なり著す所中正子十篇瑣細集蒲室集注等あり其集を東海一瀕といふ(續通鑑・五山文學小史) ○二月釋奠(續史愚抄) ○三月詩歌御會始詩題宸遊春得時和歌題松樹春久(續史愚抄) ○九月詩歌御會詩題佳節世如如菊和花題草花映月深夜壽衣忍不逢戀(續史愚抄) 朝鮮 ○高麗辛禔元 ○七月田祿生朴尙裘等流されて道に死す尙衷博學善く文を屬す不義の富貴視ること蔑如たり(東國通鑑)	八	1375
二〇三六	(二)辰丙	○正月絶海中津明の太祖に謁し態野峯前の詩を獻す太祖之に和す(後鑑) ○三月僧絶海汝霖明より歸る絶海汝霖在華九年なり(續通鑑・五山文學小史) 詩御會始(續史愚抄) ○六月彗星現はれ安倍氏勸文を獻じ泰山府君を祭る(續通鑑) ○九月	九	1376



天皇	紀元	年號	支干	實	支	冊	曆西
----	----	----	----	---	---	---	----

				詩歌御會あり(續史愚抄)○十二月僧觀喜集千家注分類杜工部詩二十五卷を重刊す(日本古刻書史)○是年文珪入明す之を使僧の始とす(五山文學小史)				
	三〇三七		三巳丁	○九月高麗鄭夢周國命を承けて筑紫に來り海賊を禁ぜんことを請ふ高麗四書朱注を用ふるは夢周より始まる(續通鑑)○今年釋奠二八月未詳(續史愚抄)		一〇	1377	
	二〇三八		四戊午	○七月朝餉に於て御讀あり新菅三位長衡史記五帝本紀を授け奉る(續史愚抄)		一一	1378	
	二〇三九		五己未	○十二月僧義堂謙倉より六臣注文選を細川頼之に送り且つ詩あり(讀通鑑)		一二	1379	
	二〇四〇		六庚申	○二月釋奠神木動座により三道堅義及び宴座なし(續史愚抄)○三月年始御讀式部大輔長嗣文選第一を授け奉る(續史愚抄)○閏四月細川頼之剃髮し且其族を帥るて京を出で阿波に移る途中人生五十愧無功云々の述懷あり(續通鑑)○八月釋奠を行はる(續史愚抄)		一三	1380	

後小松

	二〇四一		弘和元辛酉	○五月憲府疏して復書筵を開かんことを請ふ之を納る(東國通鑑)			
	二〇四二		二壬戌	○二月釋奠(續通鑑)○三月三席御會詩歌樂の三船を池水に浮ぶ(續史愚抄)○八月釋奠三席御會(續史愚抄)○九月足利義滿義堂に孟子の疑義を質す義堂朱子新注の尊ぶべき所以を説く(後鑑)○十一月足利義滿義堂を召して孟子を講論す(後鑑・續通鑑)天境靈致卒年九十一(五山文學小史)○十二月足利義滿義堂を召して孟子を講論し又大學周易左傳等のことを問ふ義堂一々之に對へ又四書の次第を説き之を讀むを勸む(後鑑・續通鑑)		一四	1381
	二〇四二		二壬戌	○閏正月年始御讀文章博士秀長黒戸に於て貞觀政要を授け奉る(續史愚抄)○二月足利義滿義堂周信をして論語を講ぜしむ(後鑑)○三月朝餉に於て御讀あり文章博士淳嗣史記五帝本紀を授け奉る(續史愚抄)○崇光上皇僧義堂をして十牛圖跋を作らしむ(續通鑑)○四月京都方後圓融院讓位後小松院受禪○九月虎關和尚海藏院を建つ其文庫多く儒釋二書を藏す(空華日工集)○十一月僧通徹卒通徹		一五	1382

及び文庫火け開山已來の公文皆燒失す(續史愚抄)義滿鎌倉怪松を天龍寺に移栽し杜鵑松と號す五岳の僧徒題詠す(續通鑑)

○高麗辛禰六



天皇紀元年號支干

事

實

支

那

曆西

二〇四三	(三) 癸亥	元に入り在留三十年にして歸朝し建仁南禪等に歷住す(續通鑑)○義滿菅原秀長等を召し孝經誰所作哉を論議せしむ(續通鑑) ○正月義滿淳和學兩院別當に補せさらる(續通鑑)○二月釋奠(續史愚抄)○八月釋奠(續史愚抄) <b>朝鮮</b> ○高麗辛禔九	一六	1383
二〇四四	元中元甲子(至徳元)	○二月王禍養賢庫の匱乏を聞き豊儲倉の米を給して諸生を養はしむ(東國通鑑) ○二月今年の甲子革命に當るや否や宜しく紀傳明經算陰陽曆道等博士をして勸申せしむべき旨宣下あり(續史愚抄)○九月後小松院御讀書始を爲す清原良賢侍讀す(後鑑)○十一月新院御所に於て三席御會を行はせらる詩題聖猷天合徳和歌題松樹契久(續史愚抄)○今年釋奠一八月未詳(續史愚抄)	一七	1384
二〇四五	(二) 乙丑	○九月良賢真人御讀書始に候す議定所に於て孝經を授け奉る(續史愚抄) <b>朝鮮</b> ○高麗辛禔一一	一八	1385
二〇四六	(三) 丙寅	○八月李達衷卒文靖と諡す(東國通鑑・本傳)	一九	1386
二〇四七	(四) 丁卯	○是歲歸化元人俞良甫李善注文選(新刊五百家注音辨)唐柳先生文集(新刊五百	二〇	1387

二〇四八

(一) 己辰

家注音辨)昌黎先生文集春秋經傳集解等を翻刻開版す世に之を博多版と稱す(日本古刻書史)

二二

1388

二〇四九

(六) 己巳

○八月書筵を開く(東國通鑑)○十月使を遣して明に如き子弟を入學せしめんとを請ふ(東國通鑑)

二二

1389

**朝鮮** ○高麗恭讓王元

○八月趙浚劾して曰く文益漸は本遺逸賢良を以て諫大夫に拜す而して依違苟容諫争の節なし請ふ山野に放ち歸らしめんと(東國通鑑)○十月諫官李崇仁を劾す權近論救して曰く國家の詞命多く其の手に出づ明帝累りに文章の美を稱す云々(東國通鑑)

二〇五〇

(七) 庚午

**朝鮮** ○高麗恭讓王二

二三

1390



天皇紀元	年號	支干	事	實	支	那	曆西
二〇五一	八辛 二未		○正月經筵官を置く王經筵に御し尋いで又經筵に御す(東國通鑑)○二月京五部及西北面州府に儒學教授官を置く(高麗史志)○八月王文廟に謁し宋文中をして詩の七月篇を講ぜしむ(高麗史)○秋權近入學圖説を著す(潜谷舊録) ○六月太宗謂卒年七十一(五山文學小史)○十一月雲溪支山卒年六十二著す所に西巖集二册贖隱集五册有り(五山文學小史)			二四	1391
後小松 二〇五二	九壬 三申		朝鮮 ○高麗恭讓王三 ○正月各道政府に儒學教授官を置く ○是春權近五經淺見録を著す (潜谷著録) ○六月十二徒を罷む(高麗史志)○十月經筵に御す(東國通鑑) ○三月細川頼之卒年六十七頼之文事有り詩を善くす暇日杜少陵集を讀み能く之を記憶すといふ(後鑑・續通鑑) ○閏十月後龜山天皇吉野より京都に遷幸父子の禮を以て神器を後小松院に讓る○十一月藤原長親卒長親耕雲老人と號し博く和漢に通ず源氏物語抄を作り毎帖贊詞を以て史記索隱述贊に擬す(續通鑑)○十二月天皇讀書始を爲す菅原秀長史記の五帝本紀を奉授す (續史愚抄) 朝鮮使僧覺鏈來朝す (後鑑)			二五	1392
			朝鮮 ○朝鮮太祖李成桂元				

二〇五三	四癸 酉		○四月趙英珪等鄭夢周を擊殺す夢周は迎日の人性理の學を精研し五部學堂を建て郷校を設けて以て儒術を興す(東國通鑑)李穡を韓州に放つ(東國通鑑)李崇仁を廢して庶人と爲す(東國通鑑)○七月劉敬柳觀に命じ更日大學衍義を進講せしむ又曹庶に命じ洪範を書して以て進めしむ(國朝寶鑑) ○是年太祖諸道の臣に命じ學校の興廢を以て守令に考課す(文獻備考)濟州學校成る(文獻備考)太祖即位後孔州迤北より甲山に至るまで皆學を建てて士を聚めて以て經書を訓ふ(文獻備考)科擧の法を定め成均館に命じて四書五經通鑑を以て試みしむ(文獻備考)			二六	1393
二〇五四	應永 元 戊甲		○正月年始の讀書始を爲す菅原秀長史記の五帝本紀を奉授す(續史愚抄)○二月詩歌御會始を爲す宸遊春萬年を以て詩題と爲す(續史愚抄)○八月後圓融院の諒闇に依りて釋奠を停止す(續史愚抄)			二七	1394
二〇五五	二亥乙		○七月應永と改元す右大辨參議重光を勸進す(續史愚抄)○十二月足利義持征夷大將軍と爲る(續史愚抄) ○二月詩歌御會始を延期す(續史愚抄)○三月詩歌御會始を爲す(續史愚抄)○八月釋奠(續史愚抄) 朝鮮 ○太祖四 ○是年王命じて文廟を營む(太祖實錄)			二八	1395



天皇紀元年號支干	實支那曆西	事
二〇五六 三子丙	二二九	○正月年始の續書始を爲す菅原秀長文選表卷を奉授す(續史愚抄)○三月性海靈見卒年八十二著す所に石屏集十卷拾遺二卷有り(五山文學小史)○八月釋奠(續史愚抄)○十月足利義持始めて書を讀む(續通鑑)
二〇五七 四丑丁	三〇	○五月李穡卒年六十九(碑銘) ○三月年始の續書始を爲す菅原秀長史記の孝景本紀を奉授す(續史愚抄)○八月足利義滿僧岐陽を明に遣す(續史愚抄・後鑑)
二〇五八 五寅成	三一	○三月文廟を經始す(文廟碑文) ○正月年始の續書始を爲す菅原秀長侍讀す(續史愚抄)○二月九日の釋奠を延引して十九日に行ふ大學寮倒壞後は官正聽の東一二間を以て廟倉と爲し、が今西間を以て之に當つ(續史愚抄)○三月幹藤藤氏古今韻會舉要三十卷を刊す(日本古刻書史)○七月朝鮮國使朴敦之來朝大内義弘之を迎接し山口に留め趣を京師に告ぐ(續通鑑・續史愚抄)○八月釋奠(續史愚抄)

天皇紀元年號支干	實支那曆西	事
二〇五九 六卯己	三三九	○七月文廟成る(文廟碑文)文制諸賢を從享すること一に漢土の制に違ふ朝鮮諸儒の從紀は高麗の制に依る明倫堂を建てて經史を講習す養賢庫成る儒生の供饋を掌る(文獻備考)○是年鄭道傳權近を以て成均館の提調と爲し四品以下の儒生を集めて經史を講習す(國朝寶鑑)
二〇六〇 七辰庚	三四〇	○三月集賢殿を置き多く書籍を置き文臣をして更日經義を會論して顧問に備へしむ尋で集賢殿を改めて寶文閣と爲す(國朝寶鑑) ○正月年始の續書始を爲す菅原秀長貞觀政要を奉授す(續史愚抄)○八月釋奠(續史愚抄) 朝鮮 ○定宗恭請王元
二〇六一 八己辛	三四一	○二月文廟火あり(文廟碑文)○五月王經筵に御す(國朝寶鑑)○十月王大學衍義を講ず(國朝寶鑑)十一月王松京に卽位學に詣り先聖に謁す胄子に命じて就學せしむ(文廟碑文) 調聖の禮此に始まる(文獻備考) ○正月年始の續書始を爲す菅原秀長後漢書紀第一を奉授す(續史愚抄)○二月釋